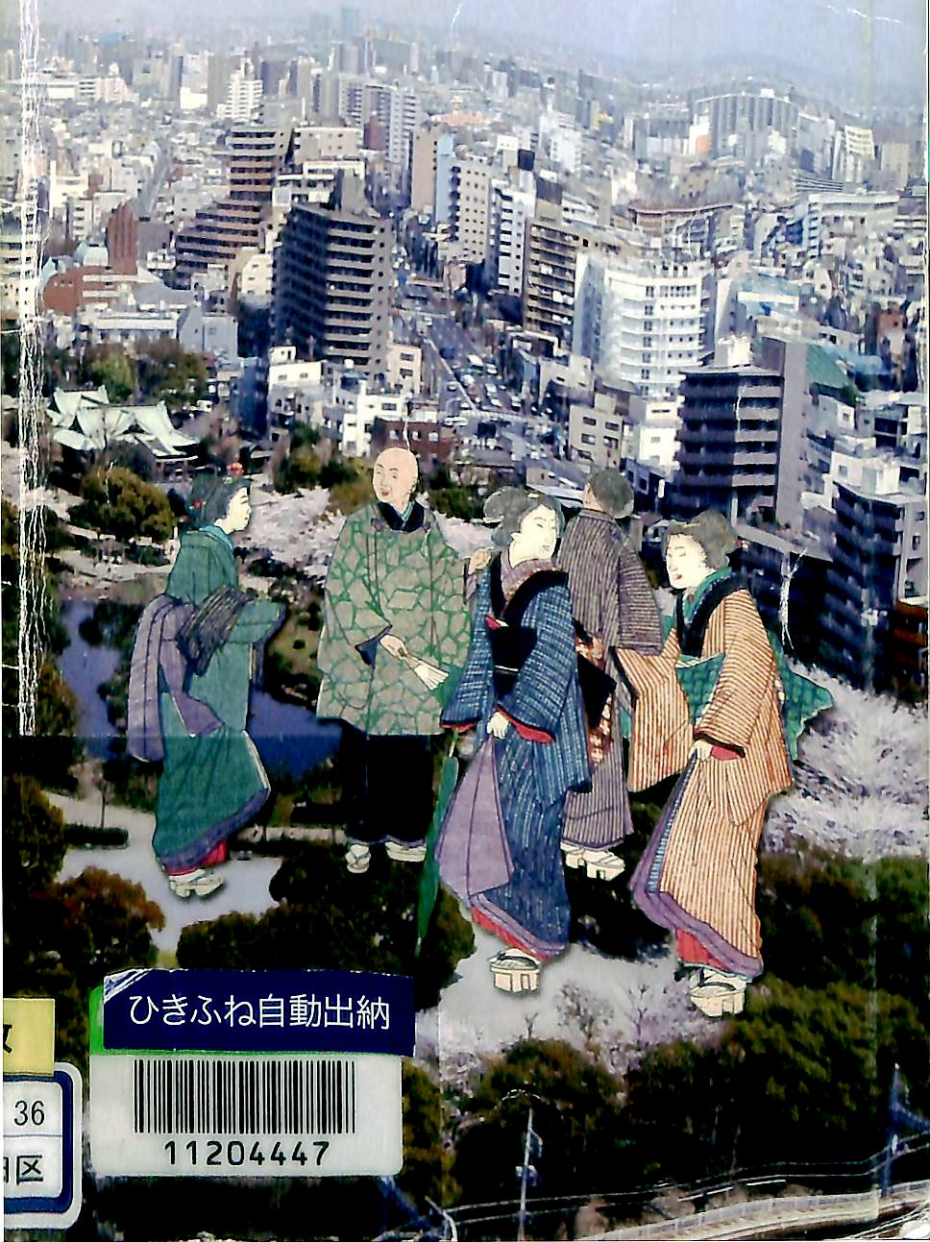
すみだの
史跡 文化財 散歩



ひきふね自動出納
11204447
36
区

ご利用時の注意について

刊行物の発行後に史跡説明板の移設や撤去、文化財登録の解除等があり得るため、現状との相違がある場合があります。

参考資料としてご利用になる際には、現状との相違を確認する必要があるため、下記までお問い合わせください。

（問合せ先）5608-6310 生涯学習課文化財担当

文化財めぐりの各コース

（※■色の文字の場所は非公開）

A 墨田・堤通コース （1～17頁）

～中世の隅田宿界隈を散策します～

（堀切駅）→1．鈴木家住宅→2．鐘紡発祥の地→3．鐘淵の由来説明板→4．多聞寺→5．圓徳寺→6．成林庵→7．正福寺→8．下稲荷→9．榎本武揚像→10．木母寺→11．隅田川神社→12．近代映画スタジオ発祥地→13．白鬚橋→14．岐雲園跡→15．啓運閣教会→16．玉の井稲荷神社→17．子育地蔵→18．第六十八番札所→19．隅田稲荷神社→（鐘ヶ淵駅東口）

豆じてん：板碑

B 向島・東向島コース （18～54頁）

～寺島・玉の井を含む向島全域を散策します～

（曳舟駅西口）→1．ユートリヤ→2．力石→3．鈴木家→4．鈴木家→5．幸田露伴の校歌→6．蓮花寺→7．向島百花園→8．法泉寺→9．佐原家→10．白鬚神社→11．旧墨堤の道→12．子育地蔵堂→13．幸田露伴の蝸牛庵跡→14．歌川豊広辞世狂歌碑→15．海棠園の跡→16．墨堤の桜→17．桜橋→18．長命寺→19．弘福寺→20．三囲神社→21．すみだ郷土文化資料館→22．言問橋→23．牛嶋神社→24．水戸徳川家下屋敷跡→25．富田木歩終焉の地→26．堀辰雄の住居跡→27．常泉寺→28．森鷗外住居跡→29．秋葉神社→30．松本家→（曳舟駅西口）

豆じてん：六地蔵　豆じてん：うまいもの

C 八広・東墨田コース （55～59頁）

～かつての田園地帯を散策します～

（八広駅北口）→1．小林家→2．八広庚申堂→3．萬福寺→4．白髭神社→5．木下川梅園の跡→6．木下川薬師道の道標→7．三輪里稲荷神社→8．鳥井家→（京成曳舟駅東口）

豆じてん：庚申塔　豆じてん：小さな博物館

D 立花・文花コース （60～68頁）

～小村井村・葛西川村を散策します～

（小村井駅北口）→1．埋蔵文化財展示室→2．すみだ環境ふれあい館→3．香取神社→4．大沢梅次郎像→5．吾嬬神社→6．慈光院→7．長友家→8．大井戸稲荷神社→9．北向地蔵→10．東漸寺→11．白髭神社→12．立花大正民家園→（平井駅西口）

豆じてん：隅田？墨田？

E 押上・京島コース （68～74頁）

～旧曳舟川沿いを散策します～

（曳舟駅東口）→1．高木神社→2．正円寺→3．円通寺→4．飛木稲荷神社→5．高松プロダクションの跡→6．キラキラ橘銀座通り→（京成曳舟駅東口）

豆じてん：隅田川七福神めぐり　豆じてん：本所と向島

F 吾妻橋・東駒形・本所・石原コース（75～88頁）

～隅田川沿いを散策します～

（本所吾妻橋駅西口または浅草駅隅田公園口）→1．勝海舟像→2．枕橋→3．浩養園→4．如意輪寺→5．清雄寺→6．天祥寺→7．妙縁寺→8．福厳寺→9．桃青寺→10．篠塚地蔵→11．明徳資料館→12．華厳寺えんま堂→13．源光寺→14．牛嶋神社御旅所→15．能勢妙見堂→16．殉職慰霊碑→17．松倉米吉の旧居跡→18．栗本鋤雲の旧居跡→19．徳山稲荷神社→20．蔵前橋→21．村松志保子の産婆学校跡→22．厩橋→23．木村義雄旧居跡→24．本久寺→25．駒形橋→（本所吾妻橋駅西口）

豆じてん：レガッタ

G 業平・横川・太平コース（88～97頁）

～寺町を散策します～

（押上駅南口）→1．春慶寺→2．法性寺→3．小梅銭座跡→4．横川一丁目遺跡→5．本法寺→6．霊性院→7．法恩寺→8．千栄院→9．陽運院→10．大横川親水公園→11．津軽稲荷神社→（錦糸町駅北口）

豆じてん：隅田川の渡し　豆じてん：桜とツツジ

H 横網・亀沢・両国コース（97～117頁）

～にぎやかな両国の町を散策します～

（両国駅西口）→1．両国国技館→2．舟橋聖一生誕の地→3．旧安田庭園→4．震災慰霊堂（本所被服廠跡）→5．復興記念館→6．葛飾北斎生誕地→7．河竹黙阿弥終焉の地→8．三遊亭円朝の旧居跡→9．野見宿禰神社→10．津軽家上屋敷跡→11．江川太郎左衛門終焉の地→12．江戸東京博物館→13．榛稲荷神社→14．殉職者の碑→15．芥川龍之介文学碑→16．勝海舟生誕地→17．尺振八の共立学舎跡→18．塩原橋→19．本所松坂町吉良邸跡→20．与兵衛すし発祥の地→21．大高源五の句碑→22．花火資料館→23．回向院→24．芥川龍之介生育の地→25．斎藤緑雨の旧居跡→（両国駅西口）

豆じてん：本所七不思議

I 錦糸・江東橋コース（117～123頁）

～錦糸町界隈を散策します～

（錦糸町駅南口）→1．伊藤左千夫の住居跡→2．錦糸堀公園→3．田螺稲荷神社→4．江東観音→5．芥川龍之介文学碑→6．江東橋二丁目遺跡→7．津軽稲荷神社→8．錦糸町駅北口遺跡→9．すみだトリフォニーホール→10．錦糸公園→（錦糸町駅北口）

豆じてん：区のマーク

J 緑・千歳・立川・菊川コース（123～130頁）

～本所と深川の境を散策します～

（両国駅東口）→1．寿座の跡→2．元徳稲荷神社→3．小林一茶・立川焉馬の旧居跡→4．江島杉山神社→5．西光寺→6．初音森神社→7．要津寺→8．弥勒寺→9．長谷川平蔵・遠山金四郎の旧居跡→（菊川駅）

豆じてん：江戸時代の橋　豆じてん：「第九」

～さくいん～（131～134頁）

凡例

■色の文字の場所は非公開のため、具体的内容は刊行物等をご覧ください。

移動時間は単純に移動するのに要する時間。（見学時間等は含みません）

コースは一例です。ご自由に散策ください。

WC ＝境内あるいはその周囲にトイレがあります。

MAP ＝「すみだの文化財マップ」に印されている番号です。

【報告書】＝『墨田区の文化財調査報告書』Ⅰ～Ⅹに詳細が記されています。

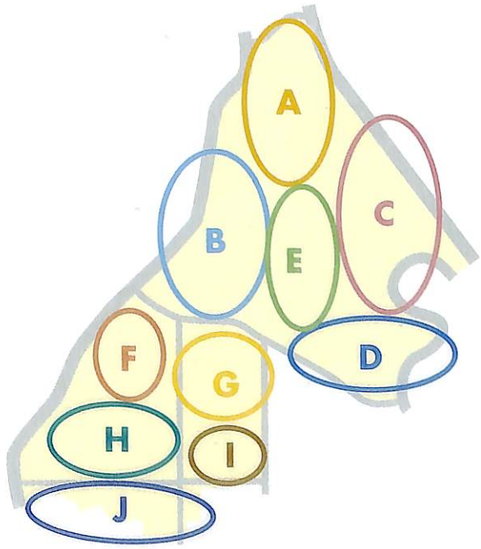
【文化財】＝『すみだの文化財』の該当頁に概要が記されています。

【集成】 ＝『墨田区古文書集成』Ⅰ～Ⅴ集に収録されています。

●●● ＝（信号の名称）

〔1〕 ＝屋内に収蔵されている文化財は〔 〕内に数字で表記します。

(1)・① ＝屋外で見学できる文化財は（ ）内あるいは○内に数字で表記します。



はじめに

はじめて『すみだの史跡文化財ガイド』を刊行したのは昭和50年のことでした。

何度も改訂・増補をくりかえしてまいりましたが、今回は前々年に刊行した、『すみだの文化財マップ』の版に合わせた形にいたしました。また、ご要望の多かった散策ルートをエリア別に掲載いたしました。

紹介する文化財は、多くの人の努力によって今日まで残ってきた貴重なものです。ルールとマナーをお守り頂きますようお願い致します。

前回の冊子の半分ほどの頁数にしてその分、全頁カラーとし、地図や写真を多く入れてみました。

詳しく調べたい方のために『墨田区文化財調査報告書』、『墨田区古文書集成』、『すみだの文化財』等の頁数を表示しておきましたので、そちらもご活用ください。

2006年3月31日

墨田区教育委員会

A 墨田・堤通コース

～中世の隅田宿界隈を散策します～

このコースは、墨田区で最も古くから村があった地域を歩くものです。震災・戦災の影響が少なく、隅田村の風情が残っています。

東武伊勢崎線堀切駅（足立区）の改札口正面に、綾瀬川を渡る歩道橋があります。橋を渡ればそこは墨田区です。墨田区に第一歩を印したら右手の道を行けば１．**鈴木家住宅**の裏手に出ます。さらに道を西進すれば墨堤通りと出会う所に石碑が建っています。２．旧鐘紡記念碑です。墨堤通りを南下すると●●●（堤通２）の植込みに２．旧鐘紡発祥の地の説明板があります。

横断歩道を渡ると区立鐘淵中学校があります。校舎が終わる辺りの植込みに３．鐘淵の由来説明板が建っています。校門前の横断歩道を渡ると広い運動場がありますが、運動場の奥に４．多聞寺の裏側が見えます。

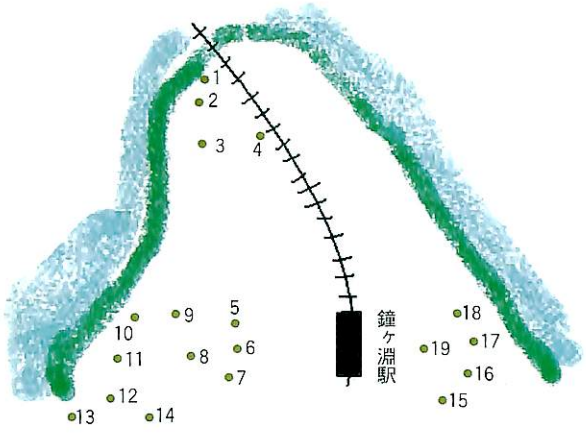
多聞寺を出て、南に向かうと５．円徳寺、６．**成林庵（非公開）**、７．正福寺、８．下稲荷と道沿いに続きます。８．下稲荷の角を曲がり、墨堤通りに出ます。

●●●（隅田川神社参道）を渡って右手に戻り、今来た方向へ戻ります。墨堤通りが地下へ分離する辺りに９．榎本武揚像が立つ、区立梅若公園が現れます。公園奥の都営白鬚東アパートを通り抜けると、高速道路を背景に変わった塔が見えます。10．木母寺です。木母寺の南側約100mの所に建つのが11．隅田川神社です。隅田川神社を出て、南に向かうと区立堤小学校があります。公園側校門の脇には、12．近代映画スタジオ発祥地の説明板が、川側には校舎と校庭の境目にスタジオのイラスト付の説明板があります。学校を後にして、更に南に行けば13．白鬚橋にたどり着きます。

橋から墨堤通りに戻り、通りを渡ると墨田一丁目第２団地が広がります。角にある白鬚橋交番の左には鎌倉街道下の道の説明板が、右脇の大正通りを少し行けば14．岐雲園跡の説明板が立っています。大正通りを進むと、やがて玉ノ井いろは通りと名前が変わります。左手に墨田三丁目交番を見て間もなく、15．**啓運閣教会（非公開）**があります。北に進んで突き当たったら右へ。やがて16．玉の井稲荷（東清寺）の駐車場が目に入ります。

お参りしたら先ほどの道を東へ。玉ノ井いろは通りと再び合流し、東へ道なりに向かうと六差路で鐘ヶ淵通りとぶつか

りますから、真東へ。北に向かう一方通行路が出てきたら、その矢印のとおり左へ。120m程行けば17. 子育地蔵が見えます。１本後ろの道を右に北進すれば18. 隅田稲荷神社にたどり着きます。神社の南側の道を西へ110mほど向かうと突き当たりやや左手にさらに西に向かう道があります。そこが19. 第六十八番札所、更に進めば鐘ヶ淵通りとぶつかります。そのまま北へ行けば、鐘ヶ淵に着きます。



鐘ヶ淵駅周辺

（堀切駅）→（３分）→１．鈴木家住宅→（３分）→２．旧鐘紡記念碑→（３分）→２．旧鐘紡発祥の地説明板→（３分）→３．鐘淵の由来説明板→（10分）→４．多聞寺→（８分）→５．圓徳寺→（５分）→６．成林庵→（２分）→７．正福寺→（５分）→８．下稲荷→（７分）→９．榎本武揚像→（６分）→10．木母寺→（11分）→11．隅田川神社→（７分）→12．近代映画スタジオ発祥地→（５分）→13．白鬚橋→（５分）→14．岐雲園跡→（10分）→15．啓運閣教会→（３分）→16．玉の井稲荷神社→（12分）→17．子育地蔵→（５分）→18．隅田稲荷神社→（４分）→19．第六十八番札所→（６分）→（鐘ヶ淵駅東口）　移動時間：126分

１．鈴木家住宅（墨田５-22-３）　MAP １【文化財５頁】

＜区登録文化財＞となっている住宅で、安政年間（1854－61）に建てられたといわれています。荒川放水路の建設に伴って引き家されてきた様子を写した写真が『すみだの今昔』（区立緑図書館

鈴木家住宅（非公開）

刊）の中に収録されています。非公開。

2．鐘紡発祥の地（墨田５-11～19） MAP 2

明治22年（1889）、江戸時代に繁昌した越後屋・白木屋など呉服屋５店が出資した、西洋式の紡績会社が操業を開始しました。地名を採り、有限責任鐘淵紡績会社（略称：鐘紡）と名付けられ、近代的工場の先駆けといわれました。敷地の北端には記念碑と大正年間の建築と推測される洋館（墨田５-19-１：非公開）が、墨堤通り側には発祥の地の説明板（墨田５-16-１）が建っています。

3．鐘ヶ淵の由来（堤通２-11-１・鐘淵中学校内） MAP 3

正門から北へ50mほどの所に説明板が建っています。曲尺の形に川が曲がっているため曲ヶ淵、と後世、寺院が移転する際に梵鐘が川底に沈んだので鐘ヶ淵と呼ばれ、数々の伝説が生まれました。

4．多聞寺（墨田５-31-13） MAP 4 WC

天徳年間（957～960）には隅田千軒宿、今の隅田川神社付近にあって、大鏡山明王院隅田寺と称え、本尊は不動明王でした。なお、明治維新までは隅田川神社の別当寺でした。狸にまつわる伝承もあることから、多聞寺を一名「たぬき寺」とも呼びました。

多聞寺は区内の最北端にあり、関東大震災、戦災ともに遭わなかったので、昔日の面影を残す数少ない寺院となっています。寺前の道は古代から続く奥州街道の名残です。

(1) 山門≪区指定文化財≫【文化財１頁】

木造茅葺切妻造四脚門の様式をとり、境内正面入口に東面して建てられています。多聞寺に残る唯一の江戸期木造建築であり、区内最古の建造物と考えられます。

享保３年（1718）に焼失し、現在のものはその後に再建されたもので、再建年代は扁額の年号から明和２年（1765）と考えられます。

(2) 「毘沙門天」案内碑

【文化財73頁】

多聞寺は毘沙門天を祀ることから、文化年間（1804～1818）に隅田川七福神のひとつに組み込まれました。以来、文人墨客を中心に七福神

多聞寺山門

めぐり＜区登録文化財＞は大変な流行をみました。

山門の脇にあり、「隅田川七福神之内　毘沙門天　正二位子爵榎本武揚」、裏面に「明治四十一年七月」とあります。

七福神めぐり期間中の多聞寺

(3)　狸塚（伝承）

【報告書Ⅰ・91頁】

村人に悪さをして退治された狸を葬った伝説があります。

(4)　下村義楽居士「たることを」の狂歌碑

【報告書Ⅵ・149頁】

本堂に向かって左前の、高さ100cmほどの石に次の２首が刻まれています。

「たることをしれば浮世も面白や　長く短し夢のうきはし」

「乳ぶさも呑しむかしは　きのふけふ　あすは月見ん鷲の御山で」

寺の過去帳によると、下村義楽は福井県小浜の人で、文政２年（1819）に没しましたが、墓所は確認されていません。

(5)　六地蔵坐像＜区登録文化財＞【文化財59頁】

墓域全体を見わたす位置に、年紀、印相（持物）不同ですえられています。多少の損傷はありますが、６体ともに保存良好なものは、区内でも多くはありません。

正徳２年（1712）、同３年に２体、同４年、享保元年（1716）、同３年にかけて僧理慶が作らせた六地蔵です。いずれも、現世と来世の「二世安楽」を願っています。とくに、享保３年（1718）銘のものには、童子、童女の名が多く、胸の痛む思いがします。

(6)　板碑２基＜区登録文化財＞【文化財50頁】

地蔵のそばに建つ弥陀三尊の板碑（年紀不明）があり、他に弥陀一尊（花瓶）のものが保管されています。

(7)　庚申塔

①「寛文四年」（1664）銘庚申塔＜区登録文化財＞

【文化財61頁】

参道入口の祠に安置されている阿弥陀立像が刻まれたものです。

②「延宝八年」（1680）銘庚申塔【報告書Ⅲ・13頁】

墓域入口左側の祠に安置されている地蔵立像が刻まれたものです。

③「延宝八年」（1680）銘庚申塔【報告書Ⅲ・14頁】

④「元禄十年」（1697）銘庚申塔【報告書Ⅲ・21頁】

⑤「元禄十五年」(1702) 銘庚申塔【報告書Ⅲ・23頁】
青面金剛立像が刻まれたものです。

⑥「(年紀不明)」庚申塔。【報告書Ⅲ・35頁】
青面金剛立像が刻まれたものです。

③から⑥の4基はいずれも墓域入口に並ぶものです。

(8) 「慶応三年」銘線刻地蔵供養石塔【報告書Ⅳ・31頁】

墓域中央部にひときわ高く(総高238cm)、切石積の上に二段の台座を設けて塔身を置き、正面には線刻の地蔵像を刻み、その左面にはご詠歌「わが身をばちひろのそこにしつめても　くるしき海の人渡さらまし」を掲げ、右面には、造塔主旨として「法界万霊地震二霊十三回忌追善菩提」と「十方信者二世安穏平等扶済」を願った安政2年(1855)の江戸大地震の13回忌供養塔です。

5. 圓徳寺(墨田5-42-17) MAP 5

醍醐山圓徳寺といい曹洞宗に属します。はなやかな朱の山門が目立ちます。寺伝では、慶長18年(1613)に文京区駒込にある吉祥寺13世離北良重和尚の開山としています。本尊は薬師如来です。

(1) 「文化八年」銘宝篋印塔【報告書Ⅰ・90頁】

寛文十二年銘庚申塔

正面に「宝篋印塔」とし、銘して「皇風永扇　仏日増輝　五穀成就　国家安全」、背面に「文化八辛未(1811)二月　吉祥廿八代願主八十翁彰山」とあります。そして、台座に「安政四丁巳歳(1857)仲夏」とありますから、安政2年(1855)の江戸大地震で倒壊したものを、再建したようです。

(2) 「寛文十二年」銘庚申塔<区登録文化財>【文化財61頁】

みごとな三猿を彫り出した台座に、舟型光背を持つ阿弥陀立像は区内随一(総高226cm)の大型のものです。寛文12年(1672)の年紀に「奉造立庚申待供養現当二世安楽所」として、隅田村の27名の人々を刻み、資料性も高いと言えましょう。

(3) 佐藤中陵「にごりなき」の歌碑【報告書Ⅵ・146頁】

不整形の自然石(高93cm)に3首を添えていますが、下辺部にやや風化が見られます。上部に「天保十四年(1843)癸卯八月朔日　水藩　八十二翁中陵」として、自身の眼疾とその全治の経過を簡潔に記しています。

佐藤中陵（1762～1848）は江戸青山の生まれで、成人して薩摩島津侯・米沢上杉侯・水戸徳川侯に仕え、薬草の採集・栽培につとめ、本草学者として大成しました。

6．成林庵（墨田２-11-12） MAP 6

臨済宗妙心寺派に属し、文京区湯島麟祥院末で、本尊は釈迦如来となっています。区内でも数少ない尼寺で、開基は上野国高崎（群馬県高崎市）城主安藤対馬守重博に仕えた老女千代が、享保元年（1716）主君の追善供養のために、山堂和尚を招いて庵を起こしたのに始まるとされます。

当庵の開基そして中興の事情は、今に残されている「武蔵国隅田村成林庵由来中興再建趣旨書」＜区登録文化財＞【文化財36頁】に詳しくうかがい知ることができます。非公開。

成林庵門前（非公開）

7．正福寺（墨田２-６-20） MAP 7

月光山藥王院と号し、真言宗智山派に属して、東向島蓮花寺の末寺となっています。開山は慶長７年（1602）宥盛法印によると伝えられ、本尊は薬師如来を祀っています。

(1)「宝治二年」銘板碑＜区登録文化財＞【文化財50頁】

境内参道右側にあります。ボリューム感のある青石（緑泥片岩）の塔婆（高116cm）です。これは近くの御前栽畑から出土したものと伝えられていますが、詳細は不明です。

宝治二年銘板碑

阿弥陀の種子（梵字）を大きくおどらせて上部中央にすえ、その下に銘して「宝治二年（1248）戊申三月三日」としています。この武蔵型板碑は原石産地が埼玉県秩父方面であるだけに、荒川流域に多く、この「宝治二年」銘板碑は都内で最古のものであることが確認されています。

このほかに、年紀不明の弥陀三尊板碑２基があります。

(2)「万治四年」銘阿弥陀如来＜区登録文化財＞【文化財61頁】

舟型光背を持った阿弥陀像（総高176cm）で、水盤を扇形にした台座に起立していて、顔容はいかにも柔和といえます。

銘を「奉造立日記念仏無縁講供養二世成就所　万治四辛丑年（1661）三月廿日」とし、尊像の左右に62名（その多くは女性）の人員を数えることができます。おそらく、女性中心の念仏講中の人達が、正福寺の僧の勧めによって造立、供養されたものでしょう。

(3) 「寛文十年」銘庚申地蔵像【報告書Ⅰ・88頁】

墓域に入ってすぐの無縁仏群の上段右側に安置されています。舟型光背の一部に欠損が見られますが、ふくよかな尊像全体には江戸初期の雰囲気が伝わってきます。銘は「奉造立庚申待二世安楽所　寛文十庚戌（1670）八月吉日」としています。

(4) 首塚（伝承）【報告書Ⅰ・87頁】

門前の道路に面して、立派な覆堂（さやどう）に地蔵像（高62cm・昭和14年銘光背）が安置されています。これは天保４年（1833）の隅田川浚渫（しゅんせつ）工事の際に多数の人骨が引き揚げられ、それを埋葬し、供養の地蔵像を建てたものです。とりわけ頭骨が多かったことから「首塚」と呼ばれるようになり、いつしか首から上の病を治してくれると信じられるようになりました。

8．下稲荷（しもいなり）（墨田２－３－１）MAP 14

境内に小さな庚申石仏があります。

【報告書Ⅰ・85頁】【報告書Ⅲ・27頁】

9．榎本武揚（えのもとたけあき）の銅像（堤通２－６：梅若公園内）MAP 7 WC

＜区登録文化財＞【文化財31頁】

梅若公園はかつて、梅若神社々頭の地を児童遊園にしたことに始まります。榎本武揚銅像は大正２年（1913）５月、旧幕臣のち代議士江原素六などの発起により、府会議員本山義成らが中心となって建立されたもので、彫刻家藤田文蔵の秀作です。

榎本武揚の銅像

武揚は幼名を釜次郎といい、梁川と号しました。海軍伝習所に学び、オランダに留学、海軍奉行となり幕府海軍の育成に全力をつくします。慶応４年（1868）、いよいよ江戸城明け渡しという８月19日、彼は幕府の軍艦８隻を奪って品川沖から蝦夷地の函館を目ざして退却します。フランス式の城塁、五稜郭に拠り、徳川家のために官軍に抵抗しますが降伏

し、東京に護送されて獄に下ります。明治５年（1872）１月６日赦されて自由の身となりました。

明治政府には開拓使下僚として仕官、特命全権公使としてロシアに派遣され、幕末以来の懸案であった樺太帰属問題解決のために尽力し、同８年（1875）５月、ロシアとの間においてようやく千島・樺太交換条約の調印にこぎつけました。

同18年（1885）発足の第１次伊藤内閣の逓信大臣になってからは、文部・外務・農商務の各大臣を歴任、のち枢密顧問官となり、子爵を受爵しました。晩年は向島に隠栖して悠々自適の生活を送り、同41年（1908）10月に逝去しました。

(1) 梅若塚（伝承）≪都指定旧跡≫

銅像の背後に広がる公園の中に「旧跡梅若塚」の小さな標石が建っています。梅若伝説の発祥地がこの場所です。昭和51年に木母寺が移転した時に塚も移動しましたが、塚のあったこの場所は今でも≪都指定旧跡≫であり、＜区遺跡第１号＞でもあります。

10. 木母寺（堤通２-16-１） MAP 8 WC

木母寺全景

木母寺は山号を梅柳山といい、天台宗に属する墨東第一の名刹といえます。開山は忠円阿闍梨で、平安中期の貞元元年（976）であったと伝えられています。

古くは梅若寺と言い、隅田院とも称しました。天正18年（1580）家康によって、梅柳山の命名を得、慶長12年（1607）には、前関白近衛信尹が参詣の折、柳の枝を筆がわりにして「梅」の字を「木母」と分けて書いて以来、寺号としたといいます。

その後、明治維新の廃仏棄釈によって廃寺となり、梅若神社となっていましたが、明治21年（1888）、光円僧正の特段の努力により、仏寺として再興されました。

かつては堤通りに面していましたが、東京都の防災拠点建設事業により、昭和51年、梅若塚・碑林ともども、南東に約160mほど移転して、現況に至りました。

当寺には寺宝も多数存在しましたが、この度の戦火で多くが失われました。それでもなお、次のようなものが残されています。

〔1〕扇1面（梅若権現ゆかりの品）
〔2〕近衛信尹墨跡＜区登録文化財＞【文化財36頁】

梅若権現御縁起

〔3〕梅若権現御縁起
≪区指定文化財≫
【文化財28頁】
〔4〕都鳥手鑑＜区登録文化財＞【文化財54頁】
〔5〕扁額「梅若塚」1面
（9代目市川団十郎揮毫）

(1) 空翠子麗翁居士「其ままに」の句碑【報告書Ⅵ・117頁】

正面に「其まゝに　帰るぞ夏の　裸虫」と自虐的な句
（裸虫は人間の異称、また貧しくて衣服のない人）。

(2) 伊丹宗朝「今を忍ぶ」の歌碑【報告書Ⅵ・119頁】

「今を忍ぶ　人もやあらむ　水くきの
あとをかたみと　残すことの葉」

(3) 笠窓巨山「これはゝゝゝ」の句碑【報告書Ⅵ・120頁】

「これはゝゝゝ　今来る人や　夕桜」

(4) 竜城三秀「斯ぞとは」の句碑【報告書Ⅵ・122頁】

「斯ぞとは　おもへと舟に　散さくら」

(5) 玉陶斎近見「咲花を」の歌碑【報告書Ⅵ・124頁】

「咲花を　人ちらすかと　おとろきて
見れは小蝶の　遊ふ長閑さ」

(6) 亀田鵬斎「題隅田堤桜花」の詩碑【報告書Ⅹ・64頁】

「長堤十里白無痕。訝似テ澄江ニ共ニ月ト渾。
飛蝶環リ迷ウ三月ノ雪。香風吹キ度ル水晶ノ村。」

(7) 水品広道「見る度に」の狂歌碑【報告書Ⅵ・127頁】

「見る度に　落る□□　あつかひの
かひなくなりし　昔蒔絵を」

(8) 准南堂鳳翁「流れての」の辞世歌碑【報告書Ⅵ・129頁】

「流れての　世にや哀れと　みやこ鳥
すみたかはらの　水茎のあと」

(9) 春路「花にとて」の句碑【報告書Ⅵ・130頁】

「花にとて　のけておく日は　なかりけり」

(10) 冨士田千蔵「種まきや」の句碑【報告書Ⅵ・131頁】

「種まきや　ふし田の中の　日のめくみ」

(11) 二世八巣謝堂「一とせの」の句碑【報告書Ⅵ・133頁】

「一とせの　空のしまりや　けふの月」

(12) 冠月庵星員「歌よみて」の狂歌碑【報告書Ⅵ・138頁】

「歌よみて　月雪花の　楽しみは
たるの口から　酒も出次第」

(13) 小唄の久満「さみたれや」の句碑【報告書Ⅵ・135頁】

「さみたれや　身はくれ竹の　夢の露」

(14) 「三遊塚」【報告書Ⅹ・79頁】

不整形の自然石に「三遊塚」と大書するのは、「幕末の三舟」と言われた、山岡鉄舟（高歩）の揮毫、碑陰も高橋泥舟（逸人）の筆です。

三遊塚は、先師三遊亭円生（1768～1838）の追善供養と同時に、三遊派落語隆盛を記念して三遊亭円朝（1839～1900）が、明治22年（1889）に建立したものです。

(15) 「天下の糸平」の碑＜区登録文化財＞【報告書Ⅹ・82頁】

糸平の巨碑

「糸平」こと田中平八（1834～84）は本姓藤島釜吉、信州伊那（長野県駒ヶ根市）の生まれ。田中保兵衛に養われて、田中平八と自称しました。維新には志士として活躍、その後開港地横浜に出て、身を実業界に投じ大成功をおさめました。「天下の糸平」は、明治29年（1896）建碑。当時の元勲伊藤博文の揮毫で、都内でも屈指の巨碑（高さ5.5m、幅3.5m）といわれています。

(16) 梅若塚（伝承）

梅若伝説といわれる悲話は謡曲「隅田川」、浄瑠璃「隅田川」、長唄「八重霞賤機帯」などにうたわれたり、江戸時代

梅若塚（覆堂内）

に多くの戯曲や小説にもなって、多くの人々の涙をさそいました。

平安時代中期、吉田少将惟房の子梅若丸は信夫藤太という人買いにかどわかされ、途中病気になり隅田川のほとりで、

「たずね来て　とわばこたえよ　都鳥　すみだ河原の　露と消えぬと」の一首を残し、12歳で世を去ります。来あわせた天台宗の高僧忠円阿闍梨が追福を祈って築いたのが、この梅若塚と伝えられています。

この塚も木母寺堂宇の移転と共に移設され、今ではガラス張りの覆堂に収められ、旧玉垣をもって区画されています。

11. 隅田川神社（堤通２-17-１） MAP 11 WC

「水神社」と呼ばれ、かっては樹木が繁茂し「水神の森」とも称され、また隅田川の増水にあっても沈むことがなく「浮島」の名もありました。

昔から、河川交通の要衝（往古の街道筋・近世の渡場）であり、海運・運送業者の尊崇を集めていました。現在は、社地も旧地の南100mの地に移転しています。

祭神は速秋津比古ほか三神を主神としています。

維新の時には社掌矢掛弓雄が大いに社運を盛り上げた模様で、彼の手になる歌碑、記念碑が多数残っています。

隅田囃子の様子

また、墨田地域に残された伝統芸能「隅田囃子」＜区登録文化財＞【文化財70頁】の活動も、この神楽殿を中心に行われています。

(1) 元の木阿弥「きょうよりも」の歌碑（「剃髪碑」）
【報告書Ⅵ・99頁】

「けふよりも　衣は染つ　墨田川
流れわた利に　世遠王堂ら婆や」

(2) 「無琴道人墓銘」の碑【報告書Ⅸ・55頁】

撰文を亀田鵬斎（興）、書を大窪詩仏（行）のコンビによ

る、実に優れて端正な墓碑銘で、文政２年（1819）に建てたものです。

無琴道人（1781～1818）は本名を青木金山といい、北陸佐渡に生まれ、一念発起して江戸に出て幕府の儒者山本北山に師事しました。残念ながら弱冠38歳で病没したため、彼の早世をいたんで建碑されました。

(3) 「文政二年」銘道標【報告書Ⅳ・89頁】

区内の道標の中でも名品のうちに属します。「建久年間垂跡」と篆額に掲げて、

「隅田邨総鎮守　水神宮　是より西二丁余　山東庵京山　建並書」としています。おそらく墨堤上にあったものを、のち移設したものでしょう。

(4) 狂歌堂真顔「よけてふけ」の狂歌碑【報告書Ⅵ・110頁】

「よけてふけ　花のあすたの（隅田川）　河原風
かはらぬ色を　あすた（あした）にもみむ（ん）」

(5) 梅堂安径「雨雲の」の句碑【報告書Ⅵ・103頁】

「雨雲の　下にあかるき　さくらかな」

(6) 「佐々木荘助君之碑」【報告書Ⅸ・58頁】

隅田川神社本殿

佐々木荘助（1835～92）の一代記といってもよい碑です。荘助は常陸（茨城県）下妻に豪商長谷部又右衛門の６男として生まれ、22歳で出府、和泉屋の吉村甚兵衛（定飛脚問屋）に仕え、有志とともに運送会社を始めました。名称を内国通運会社といい、後の日本通運株式会社（日通・丸通）の礎を作ります。

明治28年（1895）の建碑で、篆額は維新の時に荘助と何かと折衝のあった前島密（ひそか）（日本郵便事業の創始者）です。この碑は墨堤にあったものを、昭和９年（1934）の墨堤拡張工事の折に移築されたものです。

(7) 「医学士須田君之碑」【報告書Ⅸ・62頁】

須田哲造（1848～94）の一代記と言えましょう。本姓を細井氏といい、信濃（長野県）伊那福与村に生まれ、蘭医学を修め、ドイツの名医につき研修。後年、文京区小石川春日町に明々堂病院を設け、名医の誉れが高かったといいます。

(8) 「吟香岸田翁碑」【報告書Ⅸ・67頁】

日本の新聞事業の先駆者岸田吟香（銀次・1833～1905）の一代記です。作州（岡山県久米郡旭町）の人で、安政の大獄に発奮し、横浜居留地でヴァン・リードと「藻塩草（もしおぐさ）」を共同創刊。米人宣教師ヘボン（ローマ字表記創案者）の英和辞典編纂を助けました。ヘボンからは眼薬「精錡水（せいきすい）」の製法も学びました。明治44年（1911）の建碑で、撰文は漢学者三島毅（二松学舎を開学）、書丹は書家の日下部東作（鳴鶴）です。東作は楊守敬の教えを受けた人物です。

「麗子像」で有名な洋画家岸田劉生は吟香の子です。

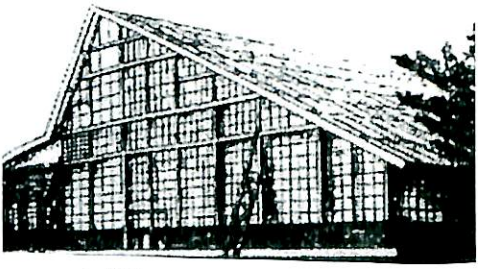
(9) 矢掛弓雄「隅田川八景」の句碑【報告書Ⅵ・105頁】

東久世道禧（みちとみ）（1833～1912）は幕末の七卿落ちの一人で、彼の筆になる題額「花香月影」のもとに、社掌矢掛弓雄が「隅田川八景」を引き寄せ、その一つひとつに彼の歌を添えたものです。

「すみた川　すみてさやけき　月みれは
世のうき島も名のみ也けり」

12. 近代映画スタジオ発祥地（堤通２-19-１：堤小学校内）

MAP 12 WC



在りし日の日活向島撮影所

ここは本格的劇映画が製作された、当時東洋一のスタジオ、日活向島撮影所のあった所です。明治34年（1901）、外国映画が日本に輸入されると、日本でも本格的な劇映画制作の機運が高まりました。大正２年(1913)、国内の映画制作会社４社が合同し、日本活動写真フィルム株式会社（日活）が創設され、ここに敷地面積900m²、全天候型のグラスステージがつくられました。「カチューシャ」が大ヒットしたことから、以後760本にも及ぶ「向島作品」が一世を風靡していきました。しかし、関東大震災によって倒壊し、大正12年（1923）閉鎖されました。

13. 白鬚橋（堤通１・２の境）≪都選定歴史的建造物≫

灰色の男性的な鉄橋は昭和６年（1931）に架橋されました。

古代から隅田川で唯一の渡河地点として舟橋が架けられ、官道として整備されていました。在原業平や源頼朝らもここを通ったようです。

そして長い間、白鬚の渡し（橋場の渡しとも）として親しまれていました。大正に入って民間による有料の橋として初めて架橋されましたが、関東大震災で焼け落ち、ドイツのヒンデルリィヒテーテ橋を参考に現在の鉄橋が架けられました。

14. 岐雲園跡（墨田１－４－１：墨田一丁目第２団地）

MAP 13 WC

幕末の外交を担当した旗本岩瀬忠震が蟄居した屋敷跡です。忠震はペリー来航以来、外交問題が重要視されるなか、外国奉行として活躍しましたが将軍継嗣問題で大老の井伊直弼と衝突、左遷・蟄居の身となりました。

墨田一丁目第２団地

この屋敷は広さ約500坪（1650m²）、隅田川の水を引き入れた別荘風の構えで自分が所有する明の魯岐雲の画巻にちなみ、岐雲園と名づけました。また、都鳥にちなんで号を鴎所と名乗り、風雅な生活を送りました。

忠震の死後、同僚の永井尚志が、その後は鐘淵紡績に勤めた幸田家の長男成常が父成延と暮らしました。成延の死後、成常は会社を興して転出したため、代わって次兄の郡司成忠が暮らしました。

明治26年（1894）成忠が樺太・千島方面へ探検に出発したことから、留守番を仰せつかったのが三男の成行（露伴）でした。露伴は大役を終えた後、谷中へ帰りましたが、留守番の間に大好きな釣りに没頭したことが忘れられず、まもなく向島に転居することになりました。すみだにおける露伴最初の家がこの地にありました。また、白鬚橋から多聞寺前を抜けて堀切に向かう道は古代の東海道の名残です（白鬚橋交番脇に「下の道」の説明板が立っています）。

15. 啓運閣教会（墨田３-６-14） MAP 18

〔１〕「文明元年」銘板碑＜区登録文化財＞【文化財53頁】

区内に２基ある題目板碑のひとつです。明治43年（1910）の大水の際に出土したといわれますが、詳細は不明です。非公開。

16. 玉の井稲荷（墨田３-10-２：東清寺） MAP 16

大正７～８年頃（1918－19）から浅草の銘酒屋がこの周辺に移転してきました。明治通りがこの地まで拓かれていたことによります。やがて歓楽街を形成していきました。この玉の井の中心付近にあったのが、玉の井稲荷です。

大正４年（1915）白鬚橋～四ツ木橋の間に道路を安全に拓けるようにと塩山（山梨県）から遷座させました。

今も残る大正道路・玉ノ井いろは通りがそれです。この道路の南側が作家の永井荷風が通った地域でした。

昭和20年（1945）３月10日の大空襲によって全焼してしまった後、今度は道路の北側に特殊飲食店（特飲街）が形成されましたが13年ほどで解散し、今では静かな住宅街となっています。

子育地蔵堂

17. 子育地蔵（墨田４-41-21）

【報告書Ⅰ・89頁】

この辺りは高森島と呼ばれたところで、周囲は海だったといいます。ここを開拓した武士の徳を称えてこの地蔵が造立されました。

18. 南葛第六十八番札所（墨田４-18-11） MAP 15

【報告書Ⅲ・24, 26, 79頁】

かつて高森島と呼ばれていた頃は、弘福寺の前身となる小庵や多くの庚申塔がありました。森田家の一隅に庚申塔の祠が佇んでいます。

19. 隅田稲荷神社（墨田４-38-13） MAP 14

古くは「八僧稲荷」とも称し、旧善左衛門村（明治22年町村制施行により消滅）の鎮守社（荒川開削により移転）でした。土地の開拓者江川善左衛門の５代目が伊勢参詣の折、数々の厄災を８人の僧によって救われ、帰郷後、村人と合力

して稲荷社を建てたのに始まると言われています。

往時にはこの縁起を万燈にしたてた万燈御輿でにぎわったといいますが長い中断後、近年復活され、毎年６月15日を例大祭としています。

〔１〕神竜図＜区登録文化財＞【文化財61頁】

神竜図

近くに住んでいた、日本画家鴨下晁湖の手になる天井画があります。社殿が改修された、昭和17～18年（1942－43）に描かれたものです。

(1)　「弘化四年」銘水鉢【報告書Ⅲ・47頁】

銘に「奉献　氏子中」「弘化四未年（1847）九月吉日」「弘福二十七代　尭隣　納」とあり、弘福寺開山鉄牛和尚ゆかりの稲荷社であることをうかがわせています。水舎の天井絵は彫刻師でもある小松重太郎の手によります。

★文化財豆じてん　板碑（いたび）

板碑は鎌倉時代を中心にして流行した青石製卒塔婆で、埼玉県中央部を発祥とし、荒川沿いに広がっていきました。

現在多くは仏寺・墓域で見られます。そして、阿弥陀・釈迦（図像や種子）を信仰し、願文・回向文・題目・讃などを刻んだ供養塔です。中には、逆修（預修）と言って、生前に供養するものもあります。区内全体としては28基（うち１基は牛嶋神社の参考拓本）を数えますが、いずれも区内北部の、ほぼ隅田川と東武伊勢崎線に囲まれた地域に集中することは、すこぶる興味のあることです。

なお、これらのうち、区の登録文化財とされている板碑は19基を数えます。

板碑の形状は、頭部（三角形）と碑身（長方形）、脚部（地面に差し込む部分）からなっています。頭部と碑身とは２本の溝で区分しています。

碑身には本尊によって種字が刻まれていますが、釈迦・阿弥陀・地蔵などいろいろあります。

現在、都内で確認されている板碑のうち、最も古いものは

墨田区の正福寺にあるもので、宝治２年（1248）の年号が刻まれています。

なお、造立末期（16世紀末）には本来の追善供養・作善供養の性質が変容して、念仏供養・月待供養として建立されていきました。そのため、江戸時代初期には作られなくなり、代わって庚申塔が建てられるようになりました。

板碑の名称

B 向島・東向島コース

～寺島・玉の井を含む向島全域を散策します～

浅草側から見て対岸はすべて向島というわけですから、かなり広域です。

東武伊勢崎線の曳舟駅西口を出て、線路に沿って北進すると向島郵便局があります。更に北進すると斬新な建物が見えてきます。これが1．すみだ生涯学習センター（ユートリヤ）です。正面に回ると明治通りと交差しますが、その手前右側に2．力石があります。明治通りを左手に向かい、水戸街道と交差したら右手、水戸方面に北上します。向島消防署を越えた辺りで左手に東武博物館と東向島駅が出てきます。博物館前の道を西へ。百花園方面に向かいます。この通りの北には小学校や中学校が点在していますが、この辺りに3．と4．の鈴木家（非公開）があります。

明治通りの（百花園入口）信号を渡り、左手の細い道を行くと左手に5．墨田川高等学校、右手に6．蓮花寺があります。

蓮花寺を100mほど行き、右（北）に曲がると突き当たりに7．向島百花園が現れます。百花園の北側を走る明治通りを北西に行くと、歩道橋があります。左手に8．法泉寺の瓦屋根が見えます。法泉寺の裏手に9．佐原家（非公開）があります。

墨堤通りに出たら左へ。10．白鬚神社の所で大きくカーブしている所が11．旧墨堤の道です。この道が再び墨堤通りと出会う所にあるのが12．子育地蔵堂。地蔵坂を20m程下って墨堤通りに平行した道を南へ130m程歩き、東に向かう道を行けば、13．露伴児童遊園の脇に出ます。遊園前のやや広い道を右手に行けば、露伴ゆかりの雨宮酒店の脇に出ます。なお、左手に延びる商店街は吉行淳之介著『原色の街』の舞台となった、鳩の街です。

墨堤通りに出ると、前方右の倉庫の辺りにかつて大倉喜八郎や中野碩翁の別荘がありました。前方左の配送所奥には銅像堀公園があります。

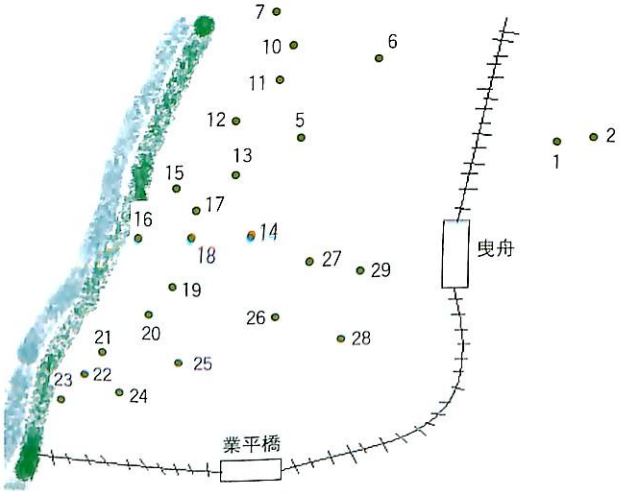
墨堤通りを左に100m程行った所で坂を下ると14．歌川豊広辞世狂歌碑が建っています。墨堤通りに戻って、更に南下すると、左の坂下に高いマンションが見えます。このマンションの南側に15．言問小学校があります。再び墨堤通りに出て、王貞治氏ゆかりの区立隅田公園少年野球場の角を曲がると言問団子や長命寺の桜もち等の老舗、16．墨堤の桜や17．

桜橋、そして隅田川が目の前に現れます。

土手下には18．長命寺、19．弘福寺が並んでいます。土手を南下するとやがて20．三囲神社の大鳥居、緑青色の屋根にチョコレート色の21．すみだ郷土文化資料館が見えてきます。22．言問橋をくぐり、隅田公園を歩くと23．牛嶋神社と庭園が見えます。池があった辺りが24．水戸徳川家下屋敷でした。公園の南端の枕橋近くには25．富田木歩の説明柱が建っています。

さて、池の近くの築山の裏側に立ち並ぶ住宅街の一角、今は社宅になっているところにかつては26．堀辰雄の旧居がありました。🔵🟡🔴（牛嶋神社前）を渡り、言問通りに戻って🔵🟡🔴（言問橋東）で右手を見れば、27．常泉寺が見えます。常泉寺前を通り、小梅通りを左折。🔵🟡🔴（向島3・4丁目）で左折すれば、28．森鴎外住居跡や本所高校が現れます。

そのまま桜橋通りを歩き、🔵🟡🔴（向島3丁目）交差点の所を右折。水戸街道を北上します。やがて29．秋葉神社に着きます。水戸街道を更に北上し、🔵🟡🔴（東向島2丁目）を右折すると突き当たりに曳舟駅に到着します。駅の近くには30．松本家（非公開）もあります。



曳舟駅周辺

（曳舟駅西口）→（10分）→1．ユートリヤ→（1分）→2．力石→（5分）→3．鈴木家→（3分）→4．鈴木家→（10分）→5．幸田露伴の校歌→（1分）→6．蓮花寺→（5分）→7．向島百花園→（7分）→8．法泉寺→（5分）→9．佐原家→（1分）→10．白鬚神社→（2分）→11．旧

墨堤の道→（1分）→12．子育地蔵堂→（8分）→13．幸田露伴の蝸牛庵跡→（8分）→14．歌川豊広辞世狂歌碑→（7分）→15．海棠園の跡→（7分）→16．墨堤の桜→（5分）→17．桜橋→（5分）→18．長命寺→（1分）→19．弘福寺→（6分）→20．三囲神社→（2分）→21．すみだ郷土文化資料館→（4分）→22．言問橋→（1分）→23．牛嶋神社→（1分）→24．水戸徳川家下屋敷跡→（6分）→25．富田木歩終焉の地→（5分）→26．堀辰雄の旧居跡→（6分）→27．常泉寺→（7分）→28．森鷗外住居跡→（13分）→29．秋葉神社→（10分）→30．松本家→（5分）→（曳舟駅西口）移動時間：156分

1．ユートリヤ（東向島2-38-7） WC

すみだ生涯学習センターのことです。各種の設備を持ち、区民の学習や創造を形にできるようになっています。
URL　http://www.city.sumida.tokyo.jp/~yutoriya/

2．力石（ちからいし）（東向島2-42-7） MAP 57 ＜区登録文化財＞

伍大力菩薩銘力石

【文化財53頁】

正面に「四拾三貫目（約161.25kg）」、左側面に「伍大力菩薩（ごだいりきぼさつ）」、「寺嶌（島）村」と刻まれています。

力石とは、腕力や体力を鍛えるために重い石を持ち上げて、力比べや曲芸を行った石のことです。

この江戸時代の力比べは深川（現江東区）から全国に広がっていったといわれています。

3．鈴木利光家の板碑（東向島4） MAP 26 ＜区登録文化財＞

非公開。【文化財53頁】

4．鈴木長家の板碑（東向島4） MAP 27 ＜区登録文化財＞

非公開。【文化財53頁】

5．幸田露伴の校歌（東向島3-34-1：墨田川高等学校内）

旧七中の校歌碑

墨田川高等学校は、かつては東京府立第七中学校と呼ばれ

ていました。学校創立の際に近くに暮らしていた作家、幸田露伴に校歌を依頼したところ、露伴は快く承諾して書き上げました。

校舎の入口右脇に露伴直筆の校歌が刻まれている石碑が立っています。

6．蓮花寺（東向島３-23-17） MAP 25

清滝山蓮花寺は、京都智積院末で真言宗智山派に属し、本尊は空海自筆の弘法大師画像と伝えられています。

蓮花寺山門

この寺の開山については諸説があります。

(1) 「文化十五年」・「文政五年」銘道標＜区登録文化財＞【文化財41頁】

山門前正面向かって右の道標は、正面に「女人済度　御自筆　弘法大師」、左右両側面には、ともに「大しミち」、「たいしみち」。左側の道標は、正面に「厄除弘法大師」、右側面に「西　白ひけ（鬚）　はしはみち（橋場道）」と刻まれています。

(2) 「天保三年」銘石燈籠【報告書Ⅳ・57頁】

参道両側の赤御影石造りの大きな燈籠１対は、田中金六の寄進で、天保３年（1832）に建てられたものです。金六は江戸幕府の蝦夷地御用達をつとめ、その功により浅草新寺町（台東区菊屋橋付近）に屋敷を拝領して三人扶持を与えられ、天保３年（1832）88歳で没しました。

(3) 最上算子塚（「そろばん塚」）【報告書Ⅳ・27頁】

この塚は弟子と思われる中原耕張が文政３年（1820）に建てたもので、上部に丸い穴があり、碑文は

「最上　算子塚　山谷新鳥こへ　中原耕張　世中は何れの道もそろばんの　かけはしわたる士農工商」と刻まれています。

(4) 四国88ヶ所写しの石碑

①「四国拾番写　阿波国　切播寺」

②「第五番　阿波国板野郡矢竹村地蔵寺写」【報告書Ⅵ・30頁】

③「四国七拾五番　善通寺之写」【報告書Ⅵ・32頁】

④「四国七拾三番　本尊釈迦如来」「讃岐国出釈迦寺写」【報告書Ⅵ・33頁】

⑤「四国七拾六番」「讃岐国金倉寺写」【報告書Ⅵ・34頁】

⑥「七拾二番　讃岐国曼荼羅寺之写」【報告書Ⅵ・37頁】
⑦「七拾四番　讃岐国甲山寺之写」【報告書Ⅵ・38頁】
⑧「六拾九番　讃岐国観音寺之写」【報告書Ⅵ・39頁】
⑨「拾九番阿波国立江寺之写」【報告書Ⅵ・40頁】
⑩「四国八十八箇所　第一番阿波国霊山寺写」
【報告書Ⅵ・42頁】
⑪「第17号　阿波国名東郡井戸邑（むら）　明照寺之写」
【報告書Ⅵ・44頁】

(5) 亀田則恒の碑【報告書Ⅵ・28頁】

「老の身の　枯木にもまた死に花の
さきだつ妻の碑に向島　九十一歳翁亀田則恒」

「浦嶋の　亀田則恒齢さへ　つくことあらじ呉竹の杖
呉竹亭真直　俗姓金子勝五郎治喜」

(6)「題群盲評古之図」の碑【報告書Ⅸ・46頁】

昔、鏡面王が群盲者に象を撫でさせ、それぞれ自分の思った象の形をのべさせた所、皆的外れの答えをしたという話がありますが、群盲者とは肉眼の盲者のことではなく、見性の無い衆生即ち衆愚のことである等、心眼の大切さについて述べています。

環中斎高独歩の撰並びに書で、その門人山中抜山が、天保5年（1834）に建てたものです。

(7) 宮内源之輔「先嬉し」の辞世句碑【報告書Ⅵ・43頁】

「先嬉（まず）し　雪に明るき　西の空」

(8)「雪月雅望」の詩碑【報告書Ⅸ・45頁】

「雪月雅望　山幽詩離　春花秋葉　雲□鳥飛」

(9) 永谷秀葉「常磐木の」の句碑
【報告書Ⅵ・46頁】

「新派芸術家月野喜代
美の為　常磐木の
月かけ清し　秋の暮」

道標

(10) 六地蔵
【報告書Ⅳ・32頁】

当寺の六地蔵は、小林惣吉氏によって明治34年（1901）に安置されたものです。

この六地蔵の傍らに、地蔵真言を刻んだ木製の輪がありますが、これは転輪蔵を模したもので、これを回転させると真言を唱えた功徳があるといわれています（転輪蔵は経典を納

めておく回転式書棚で、信者がこれを一回転させると、看経したのと同じ功徳があるといいます)。

⑾ 植村蘆洲の墓【報告書Ⅸ・50頁】

「山東野老埋骨之処」は大沼枕山の書で、碑陰も枕山の撰文です。

⑿ 東条琴台の墓【報告書Ⅰ・72頁】

琴台は寛政7年（1795）6月、江戸の芝宇田川町（現港区浜松町）に生まれました。名は耕、字は子蔵といい、琴台はその号です。若い時から学問好きで博覧強記で知られ『儒林小史』(10巻)、『経籍通史』(20巻）等多くの著述があります。幕末に越後高田藩榊原氏に招かれて学問の師となりましたが、明治5年（1872）8月亀戸天神社の神官になりました。晩年に眼病で失明、明治11年（1878）9月84歳で没しました。

⒀ 大矢市次郎の墓【報告書Ⅰ・72頁】

となりの北条秀司撰文の墓誌に次のように記されています。

「明治二十七年（1894）二月十一日、東京浅草に生まれ、昭和四十七年（1972）五月二十八日、七十八歳にて歿す。全生涯を新派演劇に捧げ芸格高厳、気骨稜稜、明治大正昭和を通じて最も偉秀なる大名優であった。その示した演技のすべては後進にとって永遠の経典である。」

⒁ 佐原鞠塢（きくう）の墓

百花園の佐原氏代々の墓で、「浄」の一字が記されているだけです。

昭和52年（1977)、歓名寺（台東区元浅草3丁目）から当寺に遷されたものです。

7．向島百花園（東向島3-18-3）≪国指定名勝及び史跡≫≪都選定景観上重要な歴史的建造物勝≫≪新東京百景≫

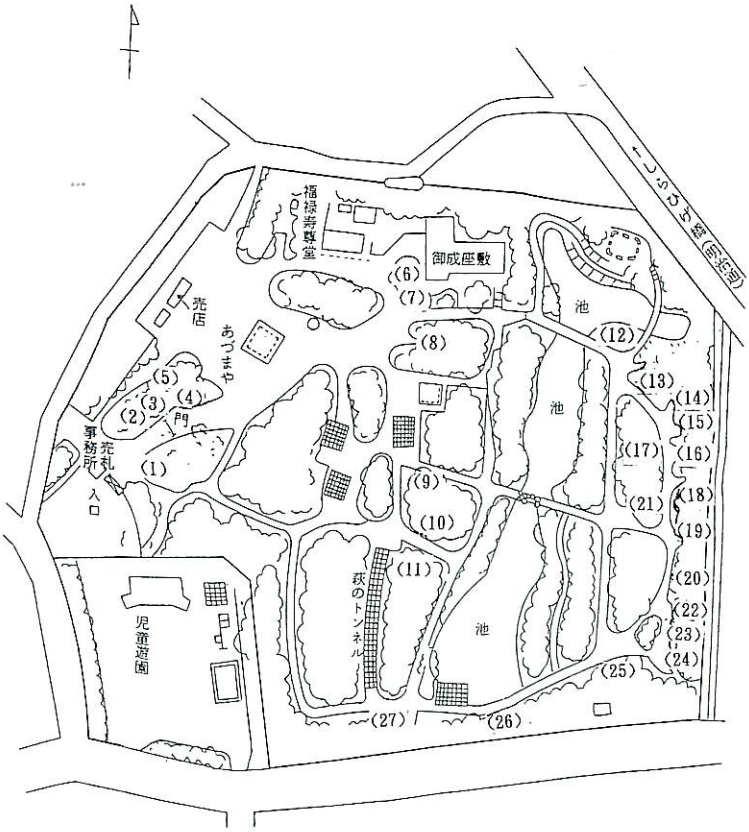
MAP 24 WC

百花園入口

百花園を造ったのは佐原鞠塢で、文化元年（1804）のことでした。

鞠塢は宝暦12年（1742）仙台に生まれ、後に江戸に出ました。

日本橋住吉町で骨董店を開き北野屋平兵衛と改名し、諸大家に出入りして大いに繁昌しました。さらに長谷川町（中央区日本橋堀留）に転居するとますます賑わい、茶人・墨客の著名人が集まるよ



百花園案内図（『墨田区文化財調査報告書Ⅵ・Ⅸ』より作成

うになりました。当時の文化人である加藤千蔭・村田春海・亀田鵬斎・大窪詩仏・蜀山人（大田南畝）・酒井抱一らにことのほか愛顧を受けました。その後、故あって隠居して本所中ノ郷にひそみ、菊屋宇兵衛と改め、剃髪して鞠塢と号し、寺島村の多賀屋敷跡3,000坪（約１万m²）を買い求めて百花園を開きました。

百花園という名は「梅は百花のさきがけ」という意味で、酒井抱一（画家・俳人）が命名したといわれています。鞠塢は天保２年（1831）８月に亡くなりましたが、辞世の歌は「隅田川　梅のもとにてわれ死なば　春咲く花の肥料ともなれ」の１首です。墓は近くの蓮花寺にあります。

この名園も、明治以来しばしば災難にあい荒廃に瀕しました。当時寺島村に別荘を構えた小倉石油の小倉常吉氏はこれを惜しく思い、私財を投じて園地を収め、旧景の保存に努めました。未亡人がその遺志を継いで昭和13年（1938）すべてを東京市に寄贈しました。

しかし今次の大戦ですべて焼失し、現在の姿にまで整った

のは同33年頃のことでした。昭和53年、≪国指定名勝及び史跡≫に指定されました。

(1) 「福禄寿尊」案内碑【文化財73頁】

「隅田川七福之内福禄寿尊　正二位勲一等伯爵　土方久元」と刻まれ、隅田川七福神めぐり＜区登録文化財＞のひとつであることを知らせています。

福禄寿尊像

(2) 松尾芭蕉「春もやや」の句碑【報告書Ⅵ・58頁】

「春もやや　けしきととのふ
　月と梅　はせを」

(3) 千樹庵益賀「鳥の名の」の句碑【報告書Ⅵ・53頁】

「鳥の名の　都となりぬ　梅やしき」

(4) 亀田鵬斎「墨沱梅荘記」【報告書Ⅸ・29頁】

亀田鵬斎の撰并書になるもので、名碑といわれています。「墨沱之瀕葛陂之傍荒圃鋤而新園成植之梅一百株」の書き出しで百花園の成り立ちを述べ、鵬斎が自分と百花園や鞠塢との関わりの中で、梅荘（百花園）の美しさや鞠塢の風流瀟洒を称えた美文が刻まれています。

(5) 雲山先生看梅の碑【報告書Ⅸ・35頁】

「金盤銀燭酔って郷たり」「林下の儷妹清浄の身」「清標高格百花の冠」で始まる三つの七言絶句が刻まれています。

(6) 茶筅塚【報告書Ⅵ・68頁】

「茶筅塚　おりたらん　草の錦や　花やしき　黙翁」

(7) 松尾芭蕉「こにやくの」の句碑【報告書Ⅵ・51頁】

「こにやくの　さしみも些し　うめの花　はせを」

(8) 山上憶良「秋の野に」の歌碑【報告書Ⅵ・54頁】

「秋の野に　咲きたる花を　指折り
　かき数うれば　七種の花」

「芽の花　乎花葛花　瞿麦の花　姫部志
　又藤袴　朝貌（ききょう）の花」

(9) 大窪詩仏画竹の碑（「詩仏老人碑竹記」）
【報告書Ⅸ・32頁】

大窪詩仏の竹の画に、詩人佐羽淡斎が詩を題し、碑陰には、詩仏老人碑竹記として、硯学朝川善庵の撰、巻菱湖の書という、文人四大家の合作です。文政５年（1822）の建碑です。

(10) 金令舎道彦「きょうの月」の句碑【報告書Ⅵ・56頁】

「けふの月　さてもをしまぬ　光かな　美知彦」

(11) 其角堂永機「朧夜や」の句碑【報告書Ⅵ・86頁】

「朧夜や　たれをあるしの　墨沱川　永機」

(12) しのふつか（忍ぶ塚）【報告書Ⅵ・61頁】

二世河竹新七が、初代河竹新七の作った歌舞伎狂言「慈悦」の正本をここに埋めて、その功績を遺すために建てたものです。明治13年（1880）の建碑。高林二峯書。

(13) きやうけん塚（狂言塚）【報告書Ⅵ・73頁】

二世河竹新七（古河黙阿弥）顕彰の碑。

娘と門弟達が明治27年（1894）に建てたもので、高林二峯書。

古河黙阿弥は、幕末、明治の脚本作者で、「三人吉三」「鼠小僧」など350余りの作品があります。本所南二葉町に没しています。なお現今では「河竹黙阿弥」が一般的な作者名となっています。

お成座敷

(14) 「飯島光峨翁之碑銘」【報告書Ⅸ・39頁】

幕末江戸の画家飯島翁の顕彰碑。光峨は沖一峨の弟子で、東海、近畿、関東各地を巡って自然や風俗を師とし精進しました。門人達が翁の徳に報いるため、翁の知人の五峯高林寛（二峯の長男）に碑文を依頼し、明治33年に建てたものです。

(15) 井上和紫「紫の」の句碑【報告書Ⅵ・83頁】

「紫の　ゆかりやすみれ　江戸生れ　和紫」

(16) 「哥沢芝金之碑」【報告書Ⅵ・79頁】

榎本武揚が篆額を書いています。

「ほととぎす　今一声のきかまほし
　月はさゆれど姿は見えず　エゝぢれったい
　　何としよう　しんきくさいじゃないかいな」

(17) 「矢田蕙哉翁之碑」
【報告書Ⅵ・71頁】

「花暮れぬ
　我も帰りを　急(いそご)うず(する)」

萩のトンネル

(18) 鶴久子「空蝉の」の歌碑
【報告書Ⅵ・90頁】

「空蝉(うつせみ)の
　世のうきことはきこえこぬ
　　いはほ(わお)の中も秋風のふく
　　久子」

(19) 二神の碑【報告書Ⅵ・95頁】

「くゝのちの神　かやのひめの神」

この二柱の神は、古事記にあるイザナギ・イザナミの両神から生まれた神で、『古事記』では「くくのちの神は木の神、鹿野(かや)のひめの神は野の神」としていますが、本居宣長は「かや」を「茅」として、野の神のほか草の祖神という解釈をしています。百花園の成り立ちから見ても、やはり、木の神、草の神としてここに並べて祀ったのでしょう。

(20) 最中堂秋耳「限なき」の句碑【報告書Ⅵ・88頁】

「限(かぎり)なき　そらの要(かなめ)や　望(もち)の月　最中堂秋耳」

(21) 「月岡芳年翁之碑」【報告書Ⅵ・75頁】

二条基弘の題字、小杉楹邨の撰並びに書で、浮世絵師月岡芳年の伝記が刻まれています。

(22) 杉谷雪樵「芦雁図」の碑【報告書Ⅸ・37頁】

表に雪樵の遺墨、「芦雁の図」が刻されている高さ190cm、幅104cmの大きな碑です。門弟の根本樵谷が明治31年（1898）に建てたものです。

雪樵は雪谷流の画家で、旧熊本藩士。明治20年（1887）上京し大いに名声を博し、しばしば宮内省の命で絵を描き、いつも褒賞に預かりました。雪谷流掉尾(とうび)の作家です。

(23) 螺舎秀民「芦の芽や」の句碑【報告書Ⅵ・65頁】

「芦の芽や　田へ来水も　角田川」
碑陰には「田へ引た　あとの流れや　芦の花」

(24) 七十二峰十湖「何事も」の句碑【報告書Ⅵ・89頁】

「何事も　かゝる浮世か　月の雲　七十二峰十湖」

(25) 雪中庵梅年「黄昏や」の句碑【報告書Ⅵ・63頁】

「黄昏や　又ひとり行　雪の人　雪中庵梅年」

(26) 北元居士「水や空」の句碑【報告書Ⅵ・59頁】

「水や空　あかり持あふ　夜の月　北元居士」

(27) 宝屋月彦「うつくしき」の句碑【報告書Ⅵ・67頁】

「うつくしき　ものは月日ぞ　年の花」

8．法泉寺（東向島３－８－１）　MAP 18

曹洞宗に属して晴河山法泉寺といい、文京区駒込吉祥寺末で区内でも古い寺院です。寺伝によると、昔、葛西三郎清重が所領地に両親の追善供養のために建立しましたが荒廃し、天文元年（1532）に僧安元が中興し、それまでの真言宗から曹洞宗に改宗しました。

法泉寺全景

本尊は釈迦如来を安置、かつては、新田義貞の守本尊という伝承を持つ俗称「髻不動尊」が信仰を集めたそうです。

また、非公開ですが区内でも多数（８基）の板碑が保存されています。

＜区登録文化財＞【文化財51頁】

(1) 千鳥庵鳥秦「散る日から」の句碑（「短冊塚」）
【報告書Ⅵ・15頁】

「散日から　ちるを盛や　花の山」

(2) 尚左堂俊満「故郷の」の歌碑【報告書Ⅵ・16頁】

「故郷(ふるさと)の　おやの袖(そで)にも　やどるかと
　　おもへ(えば)は月は　ふたつなきもの」

尚左堂俊満（1757～1820）は幕末の浮世絵師で戯作者でした。本姓を窪（窪田）と称しました。

裏に友人石川雅望(まさもち)（宿屋飯盛(やどやのめしもり)）が彼の人となりを記しています。

(3) 中山胡民の墓

中山家は寺島村の名主をつとめた家で、胡民は通称を祐吉という江戸末期の著名な蒔絵師です。大変緻密な蒔絵を作ったことで知られ、晩年、法橋（僧侶の叙階）に叙せられ、泉々と号しましたが、明治６年63歳で没しました。

(4) 石仏諸像

①「寛文二年（1662）」銘石造地蔵立像＜区登録文化財＞【文化財59頁】
②「寛文六年（1666）」銘庚申地蔵像【報告書Ⅲ・６頁】
③「延宝八年（1680）」銘庚申阿弥陀坐像【報告書Ⅲ・12頁】
④「延宝九年（1681）」銘念仏供養龕(がん)【報告書Ⅳ・12頁】
⑤「元禄六年（1693）」銘地蔵坐像【報告書Ⅳ・13頁】
⑥「享保二年（1717）」銘銅造地蔵立像＜区登録文化財＞【文化財31頁】

(5) 保護樹木「しいのき」「たぶのき」

9．佐原家（東向島３）＜区登録文化財＞【文化財33頁】

MAP 19

百花園の園内では、来園者が隅田川周辺の土を用いた楽焼を楽しんでいました。

「角田川焼」と呼ばれたこれらの楽焼は、来園者によって手ひねりや絵付けが施され、みやげ物としても売られていました。明治時代に、大森貝塚を発見したエドワード・モースによって海外に紹介され、ボストン美術館にも収蔵されています。製作者でもあり、窯元でもあった佐原家には15点ほどが残されています。非公開。

10．白鬚(しらひげ)神社（東向島３－５－２） MAP 20

区内でも古社に属します。社殿は元治元年（1864）に造営された白木造りで、区内では震災・戦災を免れた貴重な建造物でしたが、平成２年、放火によって焼失。その後、同４年

白鬚神社全景

に再建されました。

社伝によると、天暦５年（951）慈恵大師が関東に下向の折、近江国志賀郡境打下（滋賀県高島市）に鎮座の白鬚大明神を勧請したものといいます。主神は国つ神の猿田彦命です。

(1) 白鬚神社縁起の碑【報告書Ⅵ・４頁】

享和２年（1802）社殿修理を機に、高名な橘（加藤）千蔭（回向院の項参照）が筆をふるったものです。

(2) 北島玄二「うつせみの」の歌碑（「黒人塚」）【報告書Ⅵ・３頁】

「黒人塚」と大書きした碑の左面に歌が刻まれています。

「うつせみの　うつつにしばし　すみた川
渡りそはつる　ゆめのうきはし」

(3) 天広丸「くむ酒は」の狂歌碑【報告書Ⅵ・６頁】

天広丸（1756～1828）は本名を磯崎広吉、号を酔亀亭と名乗り、宝暦６年（1756）現在の鎌倉市今泉に生まれ、文政11年（1828）に没しています。

「くむ酒は　是風流の　眼なり
月を見るにも　花を見るにも」

(4) 佐羽淡斎「墨多三絶」の詩碑【報告書Ⅸ・３頁】

佐羽淡斎の三連の絶句（四句から成る）の漢詩に、巻菱湖の「墨多三絶」の篆額、大窪詩仏（行）の筆（草書）、裏面の讃を亀田鵬斎（興）になる名碑といえましょう。

墨多三絶の碑

(5) 千鳥庵鳥秦「散る日から」の句碑（「短冊塚」）【報告書Ⅵ・15頁】

「つく、、し　つめよ硯の　すみ田川」

(6) 桑楊庵千則「久かたの」の歌碑【報告書Ⅵ・10頁】

「久かたの　天津をとめも　うらやまむ
人間界の　華のしら雲」

(7) 春秋庵白雄「人こいし」の句碑【報告書Ⅵ・8頁】

「人こひし　火ともしころを　さくらちる」

(8) 中原耕張「つくづくし」の句碑（「筆塚」）
【報告書Ⅵ・9頁】

(9) 四世今日庵「こころほど」の句碑【報告書Ⅵ・11頁】

「こころほど　こと葉のたらぬ　さくらかな」

(10) 「岩瀬鷗所君之碑」【報告書Ⅸ・16頁】

岩瀬鷗所君之碑

幕末の外交家、岩瀬忠震（1818～1861）の一代記といってよく、弱冠44歳で不遇のうちに没したのを惜しみ、現役時代の同輩、永井介堂の撰文・書・篆額による、没23年後の顕彰碑です。岩瀬鷗所は、幕府の徒頭、設楽貞丈の第3子に生まれ、のち岩瀬忠正の嗣子になりました。安政元年（1854）、老中阿部正弘によって目付に抜擢され、黒船来航にあたり外国奉行・作事奉行として、井伊大老のもと条約締結の任に当たりました。後、将軍継嗣問題で左遷され、寺島の岐雲園に蟄居しました。文久元年（1861）7月岐雲園で没しました。

(11) 「鷲津毅堂之碑」【報告書Ⅸ・20頁】

高さ256cmの大碑で、字数は区内一の多さでしょう。篆額は明治の元勲三条実美、撰文を友人三島毅（二松学舎の建学者）、書は巌谷修（一六。小波の父）の手になるものです。

鷲津毅堂（1825～82）は幕末・明治初期に活躍した漢学者・政治家で、明治政府に登用され、登米県（宮城県北部）権知事、権大法官五等判事・司法権大書記官となり、勲五等従五位に叙されました。

(12) 石燈籠

①「寛政十三年」銘石燈籠【報告書Ⅳ・52頁】

②「嘉永二年」銘石燈籠【報告書Ⅳ・62頁】

(13) 「文化三年」銘狛犬一対＜区登録文化財＞【文化財65頁】

文化3年（1806）に作られた、阿形・吽形一対の狛犬です。阿形の台座に損傷が見られますが、像そのものは摩滅は少な

いと言えます。白鬚神社の「御宝前」に「奉納」されたものです。作者は神田今川町の石工、六兵衛明貴の手になるものです。

⑭ 寺島ナス

江戸時代、この一帯は野菜の産地でした。とりわけ小ぶりなナスの味が良く、「寺島ナス」と呼ばれて珍重されました。

なお、隅田川七福神めぐりではここは寿老人ならぬ寿老神として有名です。＜区登録文化財＞【文化財74頁】

11. 旧墨堤の道（東向島３-２、３、４、５と堤通１-11の間）

MAP 21

旧墨堤の名残です（あと向島５-４と５-５の間にも残っています）。

江戸時代には花見や七福神めぐりで賑わいました。当時は堤の両側に桜並木が作られていました。

わずかに残る旧墨堤

12. 子育地蔵堂（東向島３-２-１） MAP 22

伝承によると、文化年間（1804～1818）に隅田川堤防改修中に石造りの地蔵尊を得、それを当地の植木屋平作が、地蔵尊の霊験に感得して、庚申塔のある辻に祀ったのに始まると言います。

⑴ 「子育地蔵尊御由来」碑

子育地蔵尊（堂）の由来を自然石に刻し、昭和８年（1933）に４代目萩原平作が建立したものです。この碑文と「子育地蔵尊御堂建立百年遠忌供養塔」（隷書体）は寺島生まれの西川寧（昭和60年度文化勲章受章）の筆になるものです。

⑵ 庚申諸像

① 「寛文三年」（1663）銘庚申塔【報告書Ⅲ・４頁】

② 「貞享三年」（1686）銘庚申観音像【報告書Ⅲ・16頁】

③ 「元禄三年」（1690）銘青面金剛像【報告書Ⅲ・18頁】

子育地蔵堂

④「元禄七年」（1694）銘青面金剛像【報告書Ⅲ・20頁】
⑤「元禄十一年」（1698）銘青面金剛像【報告書Ⅲ・22頁】
⑥「万延元年」（1860）銘庚申塔【報告書Ⅲ・34頁】
※道路を挟んだ反対側（堤通交通公園）の川沿いには、かつて早稲田大・慶応大など、10大学の艇庫が建ち並び、さながら艇庫村の様相を呈していました。

13. 幸田露伴旧居跡（東向島１－７－12：露伴児童遊園）

MAP 28 WC

2度目の蝸牛庵跡

文豪幸田露伴の区内３番目の家があった所です。東向島１－９－１にある雨宮酒店横の別棟を「蝸牛庵（かぎゅうあん）」と名づけて間借りしていた露伴は、明治41年（1908）自分で家を設計し、ここでも「蝸牛庵」と名づけて暮らし始めました。しかし、関東大震災で井戸に油が浮くようになったため、大好きな隅田川を離れ、大正13年小石川へと転出しました。
※なお、墨堤通りの西側（堤通１－１－５）には大倉財閥の大倉喜八郎の別邸（江戸時代には中野碩翁の別荘）が、銅像堀公園（向島５－９－１）には西村勝三の製靴会社「桜組」がありました。

14. 歌川豊広辞世狂歌碑（向島５-11-１）＜登録文化財＞

【文化財46頁】 MAP 32

浮世絵師３世歌川広重が師祖豊広の60回忌に建立した石碑。

「死んでゆく　地獄の沙汰は　ともかくも
あとの始末は　金次第なり」

※東隣にあたる向島５-13辺りに榎本武揚の屋敷がありました。

15. 成島柳北の海棠園（かいどうえん）跡（向島５-40-14・言問小学校内）

MAP 35

成島柳北の旧居がここにありました。柳北が海棠を植え、海棠園と名づけました。

16. 墨堤の桜（向島５－１）＜区登録文化財＞【文化財80頁】

MAP 36・42 WC

江戸時代の絵図にも逆S字に曲がる堤が描かれていますが、ここから枕橋までの間は墨田区の＜登録名勝＞にもなっています。吉宗によって江戸っ子のレクリエーションの場がつくられました。歴史的名所として、現在までも多くの人によって維持・修復され続けています。

墨堤の桜

明治～昭和までの間、屋内プールの辺りには東京大学と東京商科大学（現在の一橋大学）の艇庫が並んでいました。

(1) 墨堤植桜之碑＜登録文化財＞【文化財42頁】 MAP 36

墨堤の起源や復興の経緯が刻まれている石碑です。

(2) 墨堤常夜燈＜登録文化財＞【文化財40頁】 MAP 36 WC

制作年は不明ですが、明治10年以前の建立です。三囲神社の大鳥居と並び、墨堤のシンボルとして有名です。

向島のシンボル

(3) 野口雨情の歌碑

「都鳥さへ　夜長のころは
　　水に歌書く　夢を見る」

(4) 区立隅田公園少年野球場

世界のホームラン王となった王貞治氏が少年時代に活躍した場所です。

(5) 「流燈会之碑」

【報告書Ⅹ・30頁】

言問亭主人外山新七が、明治11年（1878）隅田川とゆかりの深い左近衛権中将在原業平の１千年忌を記念し、都鳥に擬した流燈を隅田川に流し、修法会を催しました。そして、12年（1879）中将を言問の岡に祀り、そのことを墨堤のほとりに住む成島柳北に撰文を願い、この碑を建立しました。

この碑と並んで外山佐吉「都□□　捨て気安し　ほと、きす」の句碑があります。

17. 桜橋（向島２、５） WC

昭和60年、姉妹区である台東区との間に歩行者専用のX字型橋を架橋しました。橋の両岸は水と親しめる親水テラスとなっています。

18. 長命寺（向島５－４－４） MAP 37

天台宗延暦寺末で、古くは宝寿山常泉寺と号していたそうですが、創建年等は不明です。寛永のころ３代将軍家光がこの辺りに鷹狩りに来た時、急に腹痛をおこしましたが、住職が加持した庭の井の水で薬を服用したところ痛みが治まったので、長命寺の寺号を与えたといいます。

芭蕉の句碑

(1) 松尾芭蕉「いざさらば」の句碑 ＜区登録文化財＞【文化財43頁】

「いざさらば
雪見にころふ所まて」

碑陰には、３世自在庵祇徳の文で、芭蕉や祇空、祇徳の略伝や、この碑の建立の経緯等が述べられています。

(2) 十返舎一九「内損か」の狂歌碑【報告書Ⅴ・117頁】

「なべて人のいかに異なりとおもふことも
常となりてはめずらしからねど　いつとてもあかぬものは
月の夜と米の飯　さては色と酒なるべし
内損か　腎虚とわれはねがふなり
そは百年も生き延しうへ」

下部に熊手の絵が描かれています。

(3) 橘東世「こころ行」の歌碑【報告書Ⅴ・113頁】

「こころ行　果こそしらね　すみた河
花の波たつ　春の夕くれ」

(4) 「長命水石文」の碑【報告書Ⅴ・96頁】

この寺が長命の寺号を賜った経緯と井戸が長命水と名付けられたことを、時の住職最空が記しています。書は国学者の屋代弘賢で、天保３年（1832）の建碑です。

(5) 五狂歌師の狂歌碑【報告書Ⅴ・123頁】

高さ143cmほどの石の表面に次の五首が刻まれ、裏面には「関儀兵衛」と刻まれているのみです。

長命寺本堂

「九十翁長者園　千代までも　爰に隅田の長命寺
九十九まででで　落葉かくとは

蜀山人　どのやふな　なん題目を
かけるとも　よむは妙法
連歌狂歌師

十返舎一九　辞世　此世をば　どりやお暇に
せんこうの　煙りと供に
はひ左様なら

八十三翁天霞道人　朝霞　引出す牛の　御前まへ
もふ草も芽を　さますた堤

七十五翁雪廼屋富士丸辞世　寝ておきて　呑食ひの業
世苦の娑婆　けふは極楽
南無阿弥陀仏」

(6) 「江戸桜」の碑【報告書Ⅴ・118頁】

明治29年（1896）４月、歌舞伎座で９代目団十郎主演の「江戸桜」に出演した河東節連中の建てた記念碑です。

(7) 「孕山堂江雨燈影」の碑【報告書Ⅴ・106頁】

「身はされど　影のみここに　すみだ川
月雪花の　ながめあかねば」

(8) 「鼠取養犬　六助塚」【報告書Ⅷ・79頁】

ねずみを捕るのが猫より上手だったという珍しい飼犬の塚です。台石の一部には、犬の頭部が彫り出されています。碑面には「名は六助資性剛毅」と、人間を讃えるような銘文があります。北新川（中央区）の酒問屋の飼犬で、人々に愛さ

六助塚

れていましたが屠犬者に殺されたのを哀れんで建てた碑です。明治21年（1888）の建碑です。

(9) 「我興乃蘇鉄（そてつ）」の碑

【報告書Ⅷ・85頁】

碑陰の文によると、我興は本名を伊藤久兵衛といい、たいそう俳句を好み、かつて芭蕉雪見の句碑を長命寺に建てました。その縁で、長女定子が父の50回忌に大蘇鉄を植えたということです。明治41年（1908）の建碑。

(10) 樹月「涼しさの」の句碑【報告書Ⅴ・100頁】

「涼しさの　ゆめは故郷へ　もとりけり　樹月」

(11) 「三代目橋市」の碑【報告書Ⅴ・108頁】

「いときれて　ひまのとれたる奴凧
あみだ（だ）と友に光るすりこぎ（ぎ）」

(12) 「遠湖先生墓碑」【報告書Ⅷ・66頁】

司馬滕（遠湖）の墓碑で、撰と書とは清国駐日の初代副使で学者の張斯桂によるものです。清の光緒帝庚辰（明治13年）の建碑です。

遠湖は唐津藩（佐賀県）の儒学者で博学多芸・画竹・挿花・点茶・建築・樹芸にすぐれ、砲術のほか、洋銃の製作までできたといいます。また、門人も多く、その数千余人に達したとのことです。

(13) 「山村一蔵先生碑」【報告書Ⅷ・70頁】

山村一蔵は、岸和田藩（大阪府）医の子で、東京に出てお雇外国人のドイツ人ワグネルについて勉強しました。大学、外務省を歴任後、大学医学部教師となり、また本郷台町（文京区本郷５丁目）に自ら独逸学を教授しました。

この碑は、九鬼隆一の篆額で明治13年（1880）の建碑です。

(14) 「奥田昌屏紀念」の碑【報告書Ⅷ・78頁】

若くして亡くなった門弟の奥田昌屏を追福して、女流画家奥原晴湖が明治21年（1888）に建てた記念碑です。

(15) 「退鋒郎毛君瘞髪塚銘并序（たいほうろうもうくんえいはつ）」の碑【報告書Ⅷ・47頁】

29歳で没した稲垣貞（子幹）という書家の筆塚です。「筆神佩阿君像」は酒井抱一の画で、銘と序とは亀田鵬斎の撰並

びに書です。「退鋒郎毛君」とは禿筆のことで、ここでは筆を擬人化してその功を讃えています。

碑陰には、子幹の母静一尼が次のように記しています。

「愛子世にありしほど　常に持て慣らせし筆を埋めんとするに　今さら涙のとゞめがたくて」

退鋒郎毛君像

「在しよに　かたらむ人と　せしふでも
いまはなげきの　はやこしとぞみる」

文化10年（1813）の建碑です。

⑯「梅陰先生大黒君碑」【報告書Ⅷ・56頁】

梅陰先生大黒君碑

梅陰先生、氏は大黒、名は亀次郎といいます。父は幸大夫（光大夫）といい伊勢の人です。天明２年（1782）遠州灘で遭難し北アメリカ州のロシア領アムチトカ島に漂着、10年後の寛政４年（1792）にようやく帰国できました。鎖国の時代でしたので御園に軟禁されますが、そこで生まれた長男が梅陰です。

梅陰は14歳で商家に奉公し、仕事の合間に学問に励みました。父の没後、母を養うため学問を教え門弟数百人を数えました。忠孝の志が厚く、旧主の遺族のために献身的に尽くしたうえ、母への孝養のため一生を独身で過ごしました。

嘉永５年（1852）に門人たちと良吟比丘尼（梅陰の妹）が建てた碑で、安井息軒の撰文です。

⑰「勝川春英翁略伝」の碑【報告書Ⅴ・93頁】

浮世絵師勝川春英の７回忌法会に、報恩の意味で建てた碑で、その生涯、人柄、逸話などを記しています。個性の強い写実的な手法が幕府の弾圧を招き、手鎖50日の処分を受けました。

碑文は国学者で狂歌師の石川雅望が書きました。

⑱ 「丹頂斎一声「斯はかり」」の句碑【報告書Ⅴ・102頁】

「斯(かくば)はかり　月は満つるに　かけ陶□」

⑲ 現在庵露心「人ありて」の辞世句碑【報告書Ⅴ・111頁】

「人ありて　ひとのすたらす　花盛(さかり)」

⑳ 月双庵笑魚「花もやや」の句碑【報告書Ⅴ・104頁】

「花もや(や)、　笑(い)ひ尽して　五月雨(さみだ)る(る)、　月双庵笑魚」

「世に有し時の約速(ママ)に寿海老人白〔　〕」

㉑ 九十三翁田夫「紫陽花や」の句碑【報告書Ⅴ・99頁】

「紫陽花や　人も浅黄を　着て規式」

㉒ 「柳北仙史之像(りゅうほくせんし)」の碑【報告書Ⅷ・75頁】

成島柳北は、天保８年（1837）江戸浅草に生まれました。名を弘、字を保民といいます。家が柳原の北にあるので柳北と号しました。将軍家定・家茂２代に仕えました。尊皇攘夷論の盛んな中で彼は漢学を修め、一方で洋学者柳河春之、福沢諭吉等と交友を重ねて、欧米の事情や学術を学ぶことに努めました。

「柳北仙史之像」の碑

慶応元年（1865）兵制に当たる一方、外国奉行から会計副総裁に進み、幕政に加わりましたが、幕府が倒れると、向島の別荘海棠園（現言問小学校）に悠々自適の生活を送りました。

明治７年（1874）９月、朝野新聞の社長となると、雑録欄を担当して軽妙洒脱の筆を揮って巧みに時事を風刺しました。

日本の生命保険制度の草分けである「共済五百名社」（明治安田生命保険相互会社の前身）の創立に努力しています。明治17年（1884）、48歳で没しました。

㉓ 守川周重(ちかしげ)「月をただ」の辞世句碑【報告書Ⅴ・116頁】

「辞世　月をた(だ)、　頼(たより)に消(きゆ)る　秋の雲」

㉔ 滑稽庵五音「安心の」の句碑【報告書Ⅴ・109頁】

「安心の　里と見えけり　桃の花」

「古しへの　姿か秋の　隅田河」

「かたみにと　書のこしたる　言のはは
いはほとともに　朽せさらまし」

「世を安く　ふるにつけても　忍ぶかな
身に残したる　親のひかりを」

「埋もれぬ　親の名のみか　かきとめし
こすゑの花も　世に匂うらむ」

㉕「万治二年」銘庚申塔＜区登録文化財＞【文化財61頁】

「奉供養庚申地蔵大菩薩二世安楽所」「万治二年（1659）十一月」の銘があり、地蔵像が彫られています。区内では一番古い庚申塔です。

㉖ 橘守部・冬照の墓＜区登録史跡＞【文化財78頁】

守部は江戸時代の国学者で、平田篤胤・伴信友・香川景樹らとならんで、天保の四大家といわれました。通称は北畠源助、号は池庵といい、天明元年（1781）伊勢に生まれ、17歳の時に江戸に出ましたが全くの独学でした。やがて『山彦冊子』を刊行して名声をあげ、以後続々と名著を出しました。守部の国学は本居宣長に対抗する意識をもって成立しているといわれています。

養子の冬照も国学者でした。

㉗ 春秋庵梅笠の墓【報告書Ⅰ・55頁】

「紫陽花や　かはりかはりて　もとの色　波平」

19. 弘福寺（向島5－3－2）＜大雄宝殿は区登録文化財＞

【文化財2頁】 MAP 39

弘福寺大雄宝殿

かつて隅田村香森島（高森島）にあった小庵を、延宝6年（1673）黄檗宗の寺として、江戸氏一族の牛島殿の城趾に寺地を受け、ここに移し、現在に至っていると伝えています。開山は鉄牛道機禅師で、開基は小

田原城主稲葉正則です。鉄牛は石見（島根県）の出身で、京都宇治万福寺の創建にも尽力し、大変行動力のあった禅僧と伝えられています。

現在の本尊釈迦如来像は、後世の松雲禅師の作といわれています。伽藍は関東大震災で焼失し、昭和８年（1936）に再建されました。

森鴎外は少年時代、この地域で過ごし、没後ここに葬られました。しかし、震災後に三鷹禅林寺へ改葬されました。

黄檗宗の関係から鳥取藩池田家、津和野藩亀井家ゆかりの寺院として、多くの関係者の菩提寺となっています。

(1) 咳の爺婆尊（じじばば）【報告書Ⅳ・35頁】

咳の爺婆尊

風外和尚の名と徳から、人呼んで「咳の爺婆尊」。口中に病のある人は爺に、喉を病む人は婆に祈り、咳・風邪の病が全快したら、煎豆や番茶をそなえて供養する習わしが伝わっています。

(2) 池田冠山（かんざん）の墓碑＜区登録史跡＞【文化財77頁】

池田冠山の墓

明和４年（1767）江戸に生まれ、幼名を鉄之丞、恒次郎のちに定常といい、天明５年（1785）に本家筋の養家を継いで、鳥取藩支藩（西館（にしやかた）・若桜（わかさ））の藩主となりました。若くして藩主の座を子に譲り、その後は、専ら著述を楽しみとし、晩年は「冠山道人」とも号しました。

編著書には『浅草寺志』『江戸黄檗禅刹記』『墨水源流』など数多くあります。

(3) 建部綾足（たけべのあやたり）の墓碑【報告書Ⅰ・45頁】

建部綾足は弘前藩（青森県）の家老の次男として享保４年（1719）に生まれましたが、幼くして父を失い実兄のもとで成人しました。

「吉野の山にてよめる」として「波とのみ　みふねの山の山桜」とあり、下部に自画像が描かれています。

(4) 「貞享五年」銘梵鐘＜区登録文化財＞【文化財32頁】

当寺の梵鐘は井伊氏によって寄進された、貞享５年（1688）の「牛頭山弘福寺大鐘銘並序」として始まる銘文の記された、貴重なものです。

20. 三囲神社（向島２－５－17）＜本社は区登録文化財＞

【文化財３頁】 MAP 39

三囲神社全景

三囲神社は、始めは現在地の北方の田圃の中にあって「田中稲荷」と呼ばれていました。文和年間（1353～55）近江三井寺（滋賀県）の僧源慶が東国遍歴のとき、弘法大師ゆかりのことを聞いて、社を改築しようとしたところ、土中より白狐にまたがる老翁の像を得ました。その時、どこからともなく白狐が現れて神像を３回まわったところから「三囲」の名としたと伝えています。

神社の本殿は震災・戦災を免れ、安政年間（1854～60）の建築と伝えています。元禄６年（1693）に、俳人宝井其角が村人に代わって雨乞いのために句を詠じ、翌日雨ふったと『五元集』にみえています。

また三囲にあやかって、三井氏が江戸に進出したさいに守護神と崇め、以来三井家一統の尊崇は続いてきました。

境内には隅田川七福神＜区登録文化財＞のうち恵比寿・大国天の２神が祀られています。

(1) 「菱湖先生之碑」【報告書Ⅷ・12頁】

江戸後期の書家、巻菱湖（1777～1843）の顕彰碑と言えるもので、彼のあくなき研鑽のさまを朝川善庵の撰文、門弟大竹培の書で詳しく述べられています。なお、篆額は日野資愛の筆です。

菱湖は幕末三筆のひとりとされ、名を大任、字を致遠といい、越後（新潟県）の人です。江戸に出て亀田鵬斎に学び、欧陽詢・李北海の書をよくして一家を成し、菱湖流と呼ばれました。

(2) 日比翁助「いしがきの」の歌碑【報告書Ⅴ・67頁】

「いしがきの　小石大石　持合ひて
御代はゆるがぬ　松ヶ枝の色」

(3) 萩廼屋裏住「楠の」の辞世狂歌碑【報告書Ⅴ・76頁】

「楠の　つよきも老の　たのまれず
　　くちての後は　石となるもの」

(4) 宝井其角「ゆふたちや」の句碑（雨乞いの碑）
＜区登録文化財＞【文化財61頁】

其角は、能因法師が雨乞いの和歌を神に献じた故事にならって、「豊か」な実りの願いをこめて「ゆ・た・か」の３字を詠みこんで「ゆふだちや　田を見めぐりの　神ならば」の句を献じました。

雨乞いの碑

其角は寛文元年（1661）江戸に生まれ、姓を榎本、のち宝井と称した江戸中期の俳人で、芭蕉は嵐雪と共に蕉門の双璧として重んじました。現在のものは明治６年（1873）に三越店中の人々による再建です。

(5) 服部山蝶「きぬぎぬの」の句碑【報告書Ⅴ・39頁】

「きぬぎぬの　浅黄桜と　見しや夢」山蝶

「蝶の羽　袖にのこる　草の香」三升（９代目団十郎）

(6) 西山宗因「白露や」の句碑【報告書Ⅴ・17頁】

「白露や　無分別なる　置どころ」

宗因は慶長10年（1605）肥後（熊本県）に生まれました。大阪天満宮の連歌界の重鎮となりましたが、俳諧を始めたのは晩年に近くなってからのことでした。

(7) 朱楽菅江「執着の」の辞世狂歌碑【報告書Ⅴ・78頁】

「執着の　心や娑婆に　のこるらむ
　　よしのの桜　さらしなの月」

(8) 「秦蒙将軍之象」の碑【報告書Ⅷ・29頁】

建碑発願者は日本橋通り旅籠町に筆問屋を経営し、江戸第一の筆商と呼ばれた高木寿顕で、明治16年（1883）４月16日、蒙恬の忌日に合わせて除幕式が行われました。

寿顕は蒙恬を敬慕し、40年の歳月をかけて円山応挙筆の蒙

恬の画像を探しあて、その喜びを碑石に残そうとしました。しかし、不幸にも実現しないうちに不帰の客となったので、友人知人が彼の宿意を果たしたものです。

蒙恬は秦の始皇帝に仕えた勇将で、秦の蒙将軍としてきこえ、万里の長城を築いたりもしましたが、文人としてもその名が高く、とりわけ動物の毛を使って今のような筆を完成させたことで、筆祖と仰がれています。

(9) 富田木歩「夢に見れば」の句碑【報告書Ⅴ・66頁】

「夢に見れば　死もなつかしや　冬木風」

(10) 老翁老嫗の石像

老翁老嫗の石像

元禄年間（1688～1704）、この三囲稲荷の白狐を守る老夫婦がいて、祈願しようとする人が老夫婦に頼み、田圃に向かって呼んでもらうと、どこからともなく狐が現れて願い事を聞き、またいずれかへ姿を消してしまいます。しかし、他の人がどんなに呼んでも決して現れなかったということです。俳人其角もそのありさまを「早稲酒や狐呼び出す姥が許」と詠んでいます。老夫婦の没後、里人や信仰者がその徳を慕って老夫婦の石像を建てたと伝えられています。

老翁像には「元禄十四年（1701）辛巳五月十八日　四野宮大和時永　生国上州安中　居住武州小梅町」、老嫗の像には「大徳芳感」とだけ刻まれています。

(11) 狛犬（１対）＜区登録文化財＞【文化財64頁】

本殿前の狛犬で、小松石で造られた総高186cmのものです。奉納者121名の姓が陰刻され、信仰の広さが分かります。

なお、吽形狛犬台座裏面に「延享二年（1745）乙丑年五月二十二日　石工和泉屋太郎介」とみえ、どっしりとした立派な造りといえます。

(12) 神狐（１対）＜区登録文化財＞【文化財64頁】

本殿正面に並ぶ神狐で、小松石で造られた総高162cmのものです。台座側面に「向店」と刻まれていますので、越後屋（三越の前身）の奉納です。彫成のすっきりした柔和な優れた神狐といえるでしょう。

(13) 土手下の大鳥居＜区登録文化財＞【文化財６頁】

よく江戸川柳や錦絵にも描かれているもので、上部だけしか見えないのが有名でした。

(14) 常夜燈＜区登録文化財＞【文化財41頁】

(15) 三井家寄贈建造物群

三田綱町（港区）にあった三井家本館が江戸東京たてもの園に移築され、残された建築物がゆかりの深い三囲神社に贈られました。三井家の祖霊社で彫刻がすばらしい顕名（あきな）社、めずらしい三角鳥居、家紋の入った水鉢などです。

※三囲神社文書【集成Ⅱ】

現在三囲神社には文書類は残されてはいませんが、三井文庫や国立国会図書館などの資料から三井家と神社の関係などがわかります。

顕名社

21. すみだ郷土文化資料館（向島２－３－５） MAP 49 WC

資料館全景

平成10年（1998）、墨田区の歴史・風土・伝統を紹介する場として開館しました。チョコレート色のレンガ造に薄緑色の屋根をのせた５階建ての建物で、１階にはすみだの通史がわかりやすく紹介されているほか、各種図書資料が並ぶ「図書コーナー」やすみだゆかりの人物50人をパソコン検索できる「おもしろ人物発見」、「刊行物販売コーナー」などがあります。２階は平安時代から隅田川を象徴する梅若丸関係の資料を展示してあるほか、桜で賑わう墨堤のようすが一目でわかるジオラマ。近代産業資料、レガッタ（ボートレース）に関する資料などを展示。３階は「企画展示室」となっています。所蔵されている＜区登録文化財＞には次のものがあります。

〔1〕大沢家文書【文化財34頁】
〔2〕扁額「時敏塾」【文化財37頁】
〔3〕扁額「牛嶋学校」【文化財38頁】
〔4〕橋本家旧蔵板碑3基【文化財51頁】
〔5〕芥川家旧蔵雛人形【文化財55頁】
〔6〕錦糸町駅北口遺跡出土品【文化財56頁】
〔7〕江東橋二丁目遺跡出土品【文化財57頁】
URL　http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryou/kyoudobunka/

22. 言問橋（向島1、2）

昭和3年（1928）にドイツのケルンドイツ橋を参考に作られました。かつて竹屋の渡しがあった所に架橋されましたが、橋名の由来については不明です。架橋の際、担当者が隅田川を渡った平安時代の歌人在原業平の歌、「名にしおはば　いざ言問わん都鳥　わが思う人は　ありやなしやと」から引用したのではないでしょうか。

23. 牛嶋神社（向島1-4-5） MAP 50 WC

関東大震災で焼失する被害を蒙りましたが、かつては少し北の墨堤常夜燈の東にあり、隅田公園開設にあたり昭和7年（1932）に現在の地に移りました。縁起によると、貞観年間（859～79）の頃慈覚大師が一草庵で素盞之雄命（すさのおのみこと）の権現である老翁に会い、牛御前社と呼ぶようになったとも伝えています。本所総鎮守の社として知られています。また当社には、後刻と思われる貞観17年（875）銘を持つ板碑が所蔵されていましたが、震災時に損壊して現物は実見することができず、拓本のみ残っています。

牛嶋神社全景

(1) 談洲楼烏亭焉馬（だんしゅうろううていえんば）「いそがずば」の句碑＜区登録文化財＞【文化財45頁】

「いそがずは　濡（ぬれ）まし物と　夕立の
あとよりはるる　堪忍（かんにん）の虹」

焉馬は本所竪川の大工の棟梁で、文化人としてきこえ、団十郎をもじって談洲楼と号しました。また竪川に住むことから、立川とも号しています。

天明４年（1784）に仲間の狂歌師、戯作者連を向島の料亭武蔵屋に集めて、自作自演の落し噺しの会を催したことは、江戸落語の始まりといわれています。なお、この碑は焉馬本人が建てたものです。

(2) 「殲蒙古仇碑記」（「北条時宗偉功碑」）【報告書Ⅹ・14頁】

文永11年（1274）・弘安４年（1281）の、元寇の役として知られる蒙古軍を撃退した北条時宗の功績をたたえた碑です。明治18年（1885）、仮名垣魯文・肝付兼武等によって建てられています。

(3) 「荻園加藤先生之碑」【報告書Ⅹ・11頁】

幕末明治の国学者であり歌人でもあった加藤千浪（弥三郎）の碑です。

漢文碑と和文碑とがあります。荻園とも号し、国学を浅田由豆流（岸本由豆流）について学び、歌道・書法にも秀でていました。漢文碑は明治10年（1877）12月門人等によって建立されました。平山省斎篆額・服部謙撰文・巻菱潭書です。和文碑は篆額・年紀が剥落していますが、漢文碑と同期と思われ、彼の縁者・教え子たちによって建立されたものです。

(4) 奉納「撫牛」＜区登録文化財＞【文化財65頁】

これは仏寺の御賓頭盧様と同じように、自分の悪い部分と撫牛の同じ部分をなでると、病気が治るという信仰で、肉体だけでなく心も治るという心身回癒の祈願物です。文政８年（1825）頃奉納されました。淡島寒月の句に「なで牛の石は涼しき青葉かな」、堀辰雄の作品の中にも、「メランコリックな目ざしをした牛」とも描かれています。

撫牛

(5) 神牛＜区登録文化財＞【文化財63頁】

本殿の左右に１対の神牛が奉納されています。奉納願主は、本所仲之郷村の大工中と大工久次郎で、安政６年（1859）の奉納です。石工は本所小梅村角次郎となっています。

(6) 狛犬＜区登録文化財＞【文化財63頁】

本殿前には３対の狛犬があります。このうち、一番奥の享保14年（1729）本所中之郷・横川町若者中が奉納したものと、岩の上に立つ文政10年（1827）のものが文化財となっています。

(7) 大田南畝詩碑【報告書Ⅴ・10頁】

右側面に「貞観緑字歸然存　牛渚残碑墨水村　神化長留玄牝跡　蘋蘩不絶素鷺尊　文化辛未秋　南畝覃書」と刻まれています。

(8) 「文久二年」銘鳥居＜区登録文化財＞【文化財６頁】

隅田川に面した側にある文久２年（1862）の鳥居です。

(9) 力石群＜区登録文化財＞【文化財67頁】

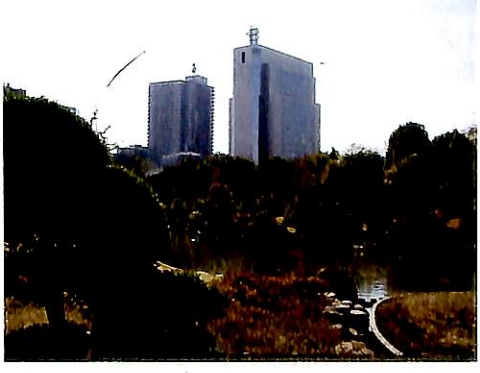
(10) 牛島の牛牧

かつてこの一帯には牛の放牧場が作られ、多くの牛が飼われていたといわれています。牛島の地名がここから生まれたともいわれていますが、定かではありません。

24. 水戸徳川家下屋敷跡（向島１－３：隅田公園内）

MAP 52 WC

元禄６年（1693）浜屋敷から移転を命ぜられた水戸徳川家の下屋敷の跡です。下屋敷は藩主の私的な屋敷、妻子と過ごす場だったことが多いので、池や築山を造り、癒しの空間を演出していました。



和風庭園と墨田区役所（右）

明治時代、西洋から導入されたレガッタ（ボートレース）が大好きだった明治天皇は、観戦のためにたびたび水戸家を訪れました。堤上には「明治天皇　海軍漕艇天覧　玉座趾」の標石があります。

残念ながら屋敷は関東大震災によって焼失しましたが、災害の反省として東京市内に数ヶ所の火除地を設置する計画が、当時の復興院で取り上げられた際、名勝史跡である墨堤を復興整備させるため、隅田公園設置案が帝都復興計画に基づいて実施されました。

こうして隅田公園は昭和６年（1931）３月、本所・下谷両区にまたがる河岸公園として開園しました。総面積187,000m²

の内、墨田区側は96,774m²で区民プール体育館・少年野球場、児童遊園、釣堀などが作られました。水戸家の下屋敷跡には日本庭園・桜の山・自由広場が作られました。隅田公園としては、≪新東京百景≫に選ばれています。

(1) 明治天皇「花くわし」の句碑【報告書Ⅶ・57頁】

「花くはし　桜もあれど　此やとの
よよのこころを　我はとひけり」

(2) 藤田東湖「天気正大気」の詩碑【報告書Ⅹ・25頁】

「天地正大の気粋然として神州に鍾る。秀でては富士の嶽となり、巍々として千秋に聳ゆ。」と日本古来の国体を賛美した「正気之歌」は、尊皇攘夷論者の水戸藩士、藤田東湖が弘化２年（1845）から３年間、小梅の水戸屋敷に幽閉されている時に作られたものです。

正気之歌

(3) 「二峯先生之碑」【報告書Ⅹ・48頁】

書家高林二峯の卒するのを偲んで、息子で同じ書家の五峯（高林寛）等が、二峯の墓所のある円通寺の門前に建てた碑です。平成元年（1989）隅田公園内に移築されました。

篆額は勝海舟で、碑陰には関係者名が数多く記されています。

25. 富田木歩終焉の地（向島１－３先） MAP 53 WC

富田木歩は明治30年（1897）、向島小梅町（向島３丁目）に生まれました。

本名は一といいます。幼くして両足の自由を失い、小学校にも入学できませんでした。木歩の家は竹屋の渡しや「大和田」という鰻屋を営んでいました。しかし、木歩の生まれるころから家運が傾きはじめていました。17歳のころ俳句誌「ホトトギス」を知り、俳句に親しんで

木歩終焉の地

いきます。「犬猫と同じ姿や冬座敷」、「死装束縫ひ寄る燈下秋めきぬ」、こんな句を吟じています。女工となった妹も、奉公に出た弟も結核でなくなり、母も脳溢血で失い、こんな句も残しました。「母のみとりに仏燈忘る宵の冬」。木で義足をこしらえ歩くことを工夫しますが、思うようにいきませんでした。その願いが「木歩」の号に表されています。

そして、大正12年（1923）の大震災に、枕橋の土手まで助けられて避難しましたが、橋はすでに焼け落ち、避難者の荷物も火を吹き、やがて猛火に包まれてしまいます。木歩27歳の若さで、ここ隅田公園枕橋のたもとが、その悲しい終焉の地となってしまいました。翌年、句碑が三囲神社境内に建てられました。

26. 堀辰雄の住居跡（向島１－７－６） MAP 54

堀辰雄は、明治37年（1904）12月28日麹町区（千代田区）平河に生まれました。父の浜之助は広島藩士で、維新後上京し、裁判所に勤めていました。同39年、母志気は辰雄を連れて、向島小梅町の妹の家を頼って平河町の家を出ました。そして41年、志気は向島須崎町の彫金師上条松吉に嫁しました。地元の牛島小学校から、芥川龍之介も学んだ両国の府立第三中学校（現在の両国高等学校）に入学し、大正10年（1921）には中学校４年で第一高等学校理科乙類に入学しています。関東大震災で父と３人で隅田川に避難しましたが、母を失いました。翌年４月に向島新小梅町の新築の家に移りました。それが隅田公園隣のこの場所でした。

堀辰雄住居跡

昭和13年（1938）４月結婚と同時に軽井沢に行き、愛宕山の近くに新居を定めています。しかし同19年（1944）喀血し、以来状態が思わしくなく、28年（1953）５月28日、49歳の若さで永眠しました。墓所は多磨霊園にあります。

辰雄は室生犀星・芥川龍之介の二人を師と仰いでいますが、フランス文学を咀嚼した「聖家族」「美しい村」「風たちぬ」など多くの名作を残しています。とりわけ、「花を持てる女」「幼年時代」「水のほとり」などの作品には向島界隈が

多く描かれています。また、牛島小学校では一時、後に作家となる佐多稲子と同級でした。

※辰雄の家の裏側を走る水戸街道を挟んだ反対側（向島１-８-２）には、女医第１号の荻野吟子が晩年開業していた医院がありました。

27. 常泉寺（向島３-12-15） MAP 51

朝川善庵の墓

慶長元年（1596）の創建で、開山は仙樹院日是上人、開基は高橋新右衛門と伝えます。徳川家の信仰を得て寺料30石を給され、境内も源森川から続き、本行坊・本種坊・本住坊の３塔頭もありました。現在は日蓮正宗富士大石寺（静岡県）の末寺になっています。

(1) 朝川善庵の墓 ≪都指定旧跡≫

天明元年（1781）片山兼山の末子として江戸に生まれました。諱は五鼎、善庵または学古塾と号しました。父兼山が早く没し、母は遺児を連れて医家朝川黙翁に再嫁しました。黙翁は遺児たちをかわいがり、自ら句読を授け、長じては山本北山に学ばせもしました。

善庵も兼山のあとをうけて、本所小泉町（両国２丁目）に住み、儒者・医者として知られ、嘉永２年（1849）没しました。

(2) 「医聖漢張仲景先生の碑」【報告書Ⅹ・35頁】

漢の長沙地方の長官でもあり、医聖と仰がれ『傷寒論』等を著した張仲景の功績をたたえて、漢方医滝清が大井鮫洲（大田区）の別業に文政10年（1827）建碑したものを常泉寺に移築したものです。

(3) 「従三位勲二等薬学博士下山君碑」【報告書Ⅹ・41頁】

近代日本の薬学に貢献した下山順一郎（忠興）は尾張犬山（愛知県）藩士で明治３年（1870）18歳の時、藩貢進生として大学南校（後の東京大学）に学び、東大医学部を経てドイツ留学の後、東大助教授、陸軍薬剤官などを歴任し、さらに諸外国で研究を重ねて、日本最初の薬学博士の学位を取得しました。

その後も内外の大学や薬学界の要職にある傍ら私財を投じて薬草園を開き、海外の薬草を移植するなど、多くの功績を

残しています。明治45年（1912）、60歳で病没しました。

篆額は旧犬山藩主の子である成瀬正雄です。大正２年７月建立。

(4) 加藤たき「花に鳥」の句碑【報告Ⅶ・63頁】

「花に鳥　春十分の　寝ざめかな」

28. 森鴎外住居跡（向島３-37-25） MAP 44

森鴎外（林太郎・1862～1922）は明治５年（1872）11歳の時に、津和野藩（島根県）亀井家の侍医であった父に伴われて、向島小梅村の当時本邸であった屋敷内（本所高等学校西隣）に初めて上京しました。

現在の本所高等学校

その後屋敷近くの小梅村87番地に住みますが、同６年（1873）には家族全員も上京したので、現在の本所高等学校のグラウンドの一部にかかる小梅村237番地の家を購入し移り住んでいます。

弟篤次郎・妹きみ（小金井喜美子）も、この地の牛島小学校に学んでいます。明治12年（1879）一家が千住に転居するまで、鴎外にとっても多感な少・青年期の一時をここで過ごしたわけです。

長じてのち軍医総監・帝室博物館長、とりわけ小説家として一時代を画す足跡を残しています。

鴎外最初の墓所は、同郷石見国出身鉄牛禅師開山であり、亀井家の菩提寺でもあった向島弘福寺にありましたが、震災後の隅田公園建設の区域にかかり、墓所は同宗の三鷹禅林寺に移転しました。

また、鴎外最初の号は曳舟川からとった牽舟居士を名乗り、鴎外の号もこの地の隅田川の都鳥に因むかと思われます。

本所高等学校の場所には昭和21年（1946）まで牛島小学校がありました。明治の学制が発布されて間もない明治６年（1873）に開校しました。

29. 秋葉神社（向島４-９-13） MAP 40

古くから千代世稲荷として祀られていましたが、後に遠江国（静岡県）秋葉権現を分祀して相殿としています。元禄15

秋葉神社の石燈籠

年（1702）12月に別当を造営し、墨東でも著名な神社となったと伝えています。江戸時代には火伏の神として諸大名やその夫人達の信仰を集め、社勢すこぶる高い時もありました。多くは燈籠にその名残をとどめています。

(1) 石燈籠（７基）＜そのうち６基が区登録文化財＞

【文化財65頁】

宝永元年（1704）銘の上州沼田城主藤原正永（本多正永）が奉納した石燈籠１対（両基）、宝永２年（1705）銘の左近衛少将源（酒井）忠挙（前橋城主）奉納の石燈籠１基と、宝暦８年（1758）銘の伊奈源忠宥奉納の石燈籠１基が、あたかも１対のように並んでいます。さらに、宝永２年（1705）銘の前橋城主源（酒井）忠挙奉納の石燈籠１基と、寛保元年（1741）の郡山城主柳沢吉里の室源頼子（忠挙の女）奉納の石燈籠１対両基があります。

〔１〕「秋葉神社文書」＜区登録文化財＞【文化財35頁】

【集成Ⅰ】

当社に伝存されている古文書・古記録は104点に達し、「秋葉・稲荷両社来由記」、『千葉社記』など縁起及び別当寺である満願寺の山号・寺号呼称に関する「達書」などの創建資料を中心に、醍醐寺（京都）三宝院末としての本末関係や大峰山（奈良）入山に関する一紙文書、明治初年における満願寺の廃寺・飛木稲荷移管文書から成り立っています。非公開。

30. 松本家（東向島２） MAP 41

文久２年（1862）、須崎・寺島・亀戸村の伊勢講代表者が伊勢参りをした際、同行者の松本文四郎によって書かれた覚え書きが残されています。非公開。＜区登録文化財＞【文化財34頁】。

文書の詳細については【集成Ⅲ】に収録されています。

★文化財豆じてん　六地蔵

六地蔵

六地蔵とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の6つの迷界で苦しんでいる人々を救うという6種の地蔵菩薩を表したものです。それぞれの迷界で苦しんでいる人々を、地蔵菩薩が極楽へ導いてくれるのです。

かつては村の入口や辻道にありましたが、現在では交通事情が変わってしまい、近所のお寺の境内に移されていることが多くなりました。

形状は一列に並ぶ立像や坐像が一般的です。墨田区内にも数ヶ寺の境内で見ることができますが、中には一石を六角形に削り、それぞれの面に1尊ずつ浮彫りにした、6面石幢（せきとう）の形にしたものもあります。

★文化財豆じてん　うまいもの

形の無い文化財、料理や菓子などを作り出す技は、出来上がった作品がすぐに消えていくため、なかなか後世には伝えられません。たとえば向島は、人々にとって憩いの場でしたから、料亭や茶店などが軒を並べていました。植半や大七、入金や武蔵屋、両国では与兵衛鮨や淡雪とうふなど、有名な料亭や茶店が数多くありました。明治に入って近代産業が発達すると向島には花街が形成され、大いににぎわいました。関東大震災や東京大空襲によって町は瓦解しました。

長命寺のさくら餅は江戸時代中期から、言問だんごやじまん草餅は明治初期から続いている名店の代表です。

C 八広・東墨田コース

～かつての田園地帯を散策します～

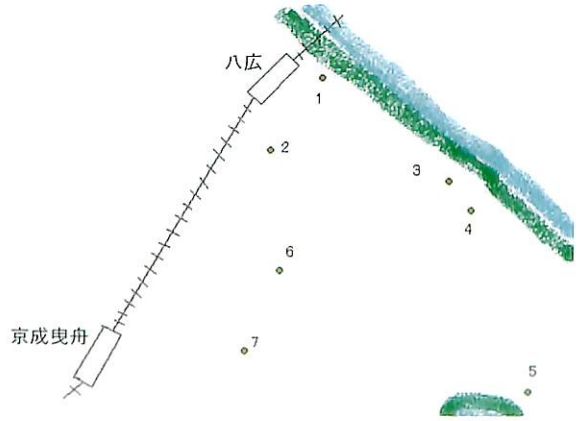
八広・東墨田一帯は、江戸時代まで広大な田園地帯でした。生産される農産物は旗本たちの生活を支え、江戸っ子たちの生活も支えました。ほとんどが四ツ木方面（現葛飾区）の村人たちが開拓した新田でした。

昭和時代には荒川駅と呼ばれていた京成押上線八広駅の改札を出て、八広中央通りに出る直前に１．**小林家（非公開）**があります。八広中央通りと八広はなみずき通りが交差する（八広五・六丁目）信号の近くに２．八広庚申堂があります。八広はなみずき通りは南東に向かって行くと、途中で大きく南に曲がるところがあります。ここでは曲がらずに南東に向かいます。

やがて都立皮革技術センターや区立東墨田公園が現れますが、この公園の北側に３．萬福寺があります。萬福寺の北、荒川の土手に沿って右手に向かうと４．白髭神社があります。更に170m程土手沿いに向かい、鉄工場の先で右に曲がると５．区立東墨田東公園の前に出ます。

先ほどの区立東墨田公園・都立皮革技術センターまで戻ります。皮革技術センター角の信号の、次の信号を左へ曲がると一方通行路となっていますので、このまま（八広４丁目）信号まで直進します。信号を渡った所で50m程左手方向に八広はなみずき通りを南下すると、西進する一方通行路が出てきますからこの道を西進します。やがて八広中央通りに出ますので、そこを右折し200m余り北上すると交番横の植栽の中に６．木下川薬師道の道標が立っています。

八広中央通りを南に戻ると７．三輪里稲荷があります。さ



八広駅周辺

らに南下すると明治通りに出会います。明治通りを右手（西北）方向に進むと京成曳舟駅です。踏切の向こうには８．鳥井家（非公開）があります。

（八広駅北口）→（２分）→１．小林家住宅→（５分）→２．八広庚申堂→（20分）→３．萬福寺→（３分）→４．白髭神社→（５分）→５．木下川梅園の跡→（22分）→６．木下川薬師道の道標→（５分）→７．三輪里稲荷→（25分）→８．鳥井家→（２分）→（京成曳舟駅東口）
移動時間：89分

１．小林家（八広６-31-１）＜区登録文化財＞【文化財４頁】

MAP 59

小林家は安政年間（1854－61）に建築されました。明治に入って大畑・木下・上木下川・下木下川の各村を束ねる戸長宇田川家の役場として使用されました。

小林家住宅（非公開）

荒川放水路の建設に伴い曳家され、昭和５年（1930）から現有の小林家となりました。

整形四間取りで、墨東地域の農家特有の構造をよく遺しています。非公開ですが、同様の構造を持つ小山家住宅（立花大正民家園 P.67）は内部も公開しています。

また、小林家の当主は人形生地づくりの区無形文化財技術保持者であり、敷地内に小さな博物館・人形資料館（事前予約）を開設しています。

２．八広庚申堂（八広５-32-10） MAP 60

『新編武蔵風土記稿』の大畠村の項に「庚申堂　村持」と見え、元禄期（1688～1704）に大畑新田村が生まれたころから、講中によって大切にされてきました。現在は正覚寺が管理しています。

(1) 「元禄二年」銘庚申塔＜区登録文化財＞【文化財61頁】
この庚申塔のために堂宇が造られました。

(2) 「享保五年」銘地蔵像【報告書Ⅳ・19頁】

(3) 観音菩薩像【報告書Ⅳ・34頁】

3．萬福寺（東墨田３-12-19） MAP 63 WC

萬福寺の石造群

光明山蓮池院と号し、真言宗豊山派に属しています。大永７年（1527）東福坊が創建したと伝えられています。本尊は阿弥陀如来です。荒川開削前は、現在地よりやや東にありました。

(1)「寛文二年（1662）」銘地蔵像（２体）【報告書Ⅳ・８頁】
(2)「□□二年」銘地蔵像
(3)「寛文十二年（1672）」銘観音坐像【報告書Ⅳ・９頁】
(4)「天和二年（1682）」銘庚申像＜区登録文化財＞【文化財60頁】
(5)「元禄三年（1690）」銘阿弥陀像【報告書Ⅳ・12頁】

4．白髭神社（東墨田３-13-24）

嘉暦２年（1337）以前の創建と伝えられていますが、もとは木下川薬師の守護神であったという伝えもあります。祭神は猿田彦命です。

境内には「百度石」の標石があります。

5．木下川梅園の跡（東墨田３-19-２：区立東墨田東公園）

MAP 64 WC

かつて旧中川の近くに6,000m²にも及ぶ、墨東最大の「木下川梅園」がありました。

幕末に徳川家の所有となり、勝海舟が別荘として使用していました。昭和40年（1965）に水門の変更により、江戸川区に編入されました。史跡説明板は300m程西にある区立東墨田東公園に立てられています。

6．木下川薬師道の道標（八広４-12-３：交番脇）

MAP 61 WC

木下川薬師への道に建てられていた道標ですが、交通事情によって現在地に移転しました。

木下川薬師道の道標

【報告書Ⅳ・87頁】

（右）「左ゑとみち」
（正面）「右や久しみち」
（左）「大畠村講中」

7．三輪里稲荷神社（八広3-6-13） MAP 62

慶長19年（1614）に出羽国（山形県）湯殿山の修験者大日坊が、羽黒大神の分霊を大畑村（現在地）の鎮守として勧請し、三輪里稲荷大明神と称したのが始まりと伝えられています。

初午の日に、湯殿山秘法のこんにゃくの護符を授けることから、俗に「こんにゃく稲荷」と呼ばれていました。

8．鳥井家（八広1）＜区登録文化財＞【文化財33頁】 MAP 58

江戸後期、鳥井重五郎（初代京山）によって始められた焼き物で、勝海舟の引き立てを受けたと伝えられます。非公開。

★文化財豆じてん　庚申塔

道教では人の腹中に三尸の虫がいて、悪事を働くと庚申の日に天帝に告げにいくと信じられていました。そこで、庚申の日にはご馳走を持ち寄り、夜明かしして虫を天に行かせないようにしました。この日集まる人々の集団を庚申講といい、みんなが現世や来世の供養のために建てたものが庚申塔です。

15世紀の後期から建て始められたようで、年号を見ると幕末まで製作され続けていたことがわかります。

主尊は初めは如来・菩薩・明王などいろいろありましたが、17世紀の中頃から青面金剛に統一され

庚申塔

ていきます。石の型や周囲に刻まれる日月・猿・鶏・邪鬼なども決まりはありません。これらは晴天への願いや三猿のような戒めなど、いろいろな意味を含んでいると言われています。区内には40基以上が確認されていますが、ほとんどが北部（旧向島地域）に点在しています。

★文化財豆じてん　小さな博物館

墨田区内には、伝統的な技術を伝えている職人さんがいます。高齢化や後継者難という状況の中で、がんばっています。そうした人々の中には作品や技を見せようという人々がいます。自宅や仕事場に小さなコーナーを設けて、気軽に見てもらえるようにしている人たちです。区では小さな博物館という名前を付けて、広く紹介しています。

江戸から続く木工や染色、金属加工などの匠の技もあれば、機械製品や情報処理機器など、現代産業の中で活躍している手わざもあります。

機械化や大量生産の時代にあって、一味違う高度な作品を生み出す職人の技術をじっくりとご覧ください。詳しくは産業経済課にお尋ねください。

町で見かける小さな博物館の看板

http://www.techno-city.sumida.tokyo.jp/shisetsu/shi_05.html

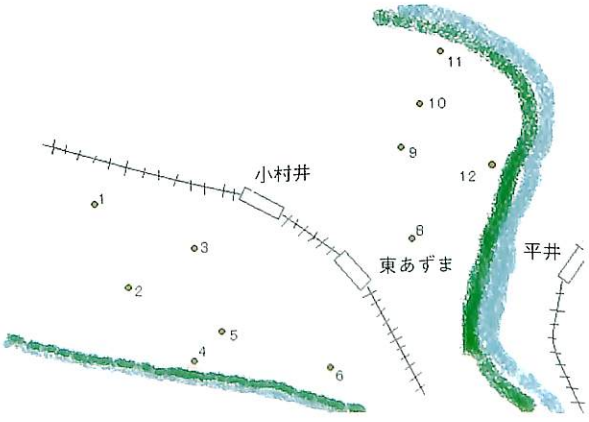
D 立花・文花コース

～小村井村・葛西川村を散策します～

江戸時代、小村井村・葛西川村だった辺りを散策するコースです。東武亀戸線小村井駅の改札を出て、北上すると（小村井）の信号があります。ここを左折し（向島警察署）を通り過ぎると250m先で十間橋通りとぶつかりますので左へ。踏切を渡ると区立文花中学校があります。その裏側に１．すみだ産学官連携プラザがあります（見学は事前予約）。ここはかつて西吾嬬小学校でした。前の道を左に進むと区立文花宮前橋公園に出ます。隣が２．すみだ環境ふれあい館です。先ほどの公園を右に向かうと（文花２丁目）の交差点があります。目の前には３．香取神社の木々がそびえています。

香取神社の南には石鹸工場がありますが、この工場の南東角に４．福神橋北詰の空き地があります。向かい側には５．吾嬬神社があります。北十間川に沿って東に向かいます。やがて、お寺が見えてきます。６．慈光院です。寺前の道を北上すれば７．長友家（非公開）があります。立花通りに出会う直前に小さな祠が目に飛び込んできます。立花帝釈堂として、戦前には多くの人が参詣していました。

踏切を渡り、直進します。立花通りを歩いていくと、８．大井戸稲荷の赤い鳥居が見えます。更に進むと、平井橋の手前で左折する道に出会います。その道を行けば、平井街道との交差点の所に９．北向き地蔵があります。その北側には10．東漸寺。寺北の道を右折すれば11．白髭神社が左に建っています。道はこの先で二股となりますが、右側を行くとやがて右側に12．立花大正民家園小山家住宅の裏門が現れます。



小村井駅～平井駅

小山家住宅を出て土手を登り、右折すれば平井橋に出ます。橋を渡って江戸川区平井に入ります。道なりに直進すればJR平井駅に着きます。

（小村井駅北口）→（15分）→1．埋蔵文化財展示室→（5分）→2．すみだ環境ふれあい館→（4分）→3．香取神社→（7分）→4．大沢梅次郎像→（1分）→5．吾嬬神社→（5分）→6．慈光院→（6分）→7．長友家→（8分）→8．大井戸稲荷→（8分）→9．北向地蔵→（1分）→10．東漸寺→（1分）→11．白髭神社→（4分）→12．立花大正民家園→（10分）→（平井駅西口）　移動時間：75分

1．埋蔵文化財展示室
（文花1-20-7：すみだ産学官連携プラザ内）

2階に展示室がある連携プラザ

廃校となった西吾嬬小学校が、すみだ産学官連携プラザとして生まれ変わりました。この2階に埋蔵文化財調査室・展示室・保管庫が並んでいます。

区内各所から発掘された遺物の一部が展示室に陳列されています。＜区登録文化財＞の江東橋二丁目遺跡（P.120）の出土品なども一般に公開されています【文化財57頁】。（事前に生涯学習課へ予約をしてください）

2．すみだ環境ふれあい館（文花1-32-9）

旧文花小学校の校舎を利用して、人と環境を考える場が誕生しました。「環境学習室」、「雨水資料室」、「関野吉晴探検資料室」の3コーナーから構成されています。いずれも月・水曜日が休館日です。詳しくは墨田区役所内環境保全課へお問い合わせください。

URL　http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryou/kankyou_hureai/index.html

(1) 環境学習室

環境や資源に関する問題を紹介したり、リサイクル体験ができます。

(2) 雨水資料室

世界でもめずらしい雨水に関する資料が展示されています。

(3) 関野吉晴探検資料室

「グレート・ジャーニー」で知られる、地元出身の探検家関野吉晴氏が踏破した、世界の気候・風土を紹介している部屋です。

3．香取神社（文花２－５－８） MAP 73 WC

この辺りの土地は「葛西御厨注文」によると、葛西38郷の一つとして記されています。

香取神社はこの開拓者の氏神として永万元年（1165）に創建され、以来、村の鎮守として崇められてきました。祭神は経津主神といい、武神であると同時に産業開発、開拓の神でもあり、香取神宮（千葉県）の分社です。

香取神社と香梅園

(1)「文政十一年」銘水鉢「禊盥」＜区登録文化財＞【文化財66頁】

境内の摂社諏訪神社前にあるこの水鉢は、文政11年（1828）の銘があり、かなり大型のものです。この水鉢は、もと当社本殿にすえられていたものです。

「禊盥　文政十一年戊六月吉祥日　氏子中　星塢秦鐘　書」

(2)「文政十三年」銘石燈籠【報告書Ⅳ・56頁】

摂社三峯神社前にあり、「文政十三年（1830）寅八（以下欠）」と刻まれた春日型の石燈籠であって、火袋は雄大であり、竿の部分と等しいことは、ある種の落ち着きを見せます。

4．福神橋北詰（文花２－１） MAP 75

(1) 大沢梅次郎像

明治22年（1889）この地の旧家小山家に生まれ、大正６年

28歳で町会議員、同13年（1924）から昭和２年（1927）まで吾嬬町長におされ、同３年（1928）東京府会議員となり、東京市会・都議会議員を歴任して同34年（1959）９月に没するまで、地方自治に徹した人物の銅像です。同38（1963）年に建立されました。

(2)「築道碑」【報告書Ⅶ・78頁】

明治中期から、純農村地帯であった吾嬬町にも都市化の波が押し寄せ、道路の拡幅・新設が問題となり、町長の大沢梅次郎はじめ地主・町民の協力によって成った道路整備事業を記念して建碑（大正14年）したものです。「人類相愛の情理と人類群居の態様と物質生産の現状と文化進展の帰趨とは」で始まる高さ２mのこの碑は、初め旧吾嬬町役場（現向島警察署）前の宮田橋々畔にあったものを、のち昭和37年（1962）に移設したものです。なお、この碑と軌を一にするものに、原公園（京島３丁目）の「新薬師道之碑」（大正６年建碑）があります。

5．吾嬬神社（立花１－１－15） MAP 74 WC

この地は江戸時代の頃「吾嬬の森」、また「浮州の森」と呼ばれ、その中に祠があり、後「吾嬬の社」と呼ばれました。祭神は弟橘媛命を主神とし、相殿に日本武尊を祀っています。

吾嬬神社

「縁起」の碑によると、昔日本武尊が東征の折、相模国から上総国へ渡ろうとして海上に出た時、にわかに暴風が起こり乗船も危なくなったのを、弟橘媛命が海神の心を鎮めるために海中に身を投じると、海上が穏やかになって船は無事を得、尊は上陸して「吾嬬恋し」と悲しんだと言われます。

後に命の御召物がこの地の磯辺に漂い着いたので、これを築山に納めて吾嬬大権現として崇めたのが始まりだと言われています。

(1)「安永二年」銘狛犬＜区登録文化財＞【文化財64頁】

安永２年（1773）に漁業関係者によって奉納されたものです。

(2) 「吾嬬森碑」【報告書Ⅸ・83頁】

明和３年（1766）の夏、藤原博古（山県大弐）の撰文になるもので、柱状の三面に「下総国葛飾郡吾嬬森碑」として日本武尊の東征と弟橘媛命の入水のこと、碓日嶺（碓氷峠）に登って「吾嬬はや」と歎いたこと、吾嬬森が命の墓であることなどを述べて、命の貞烈を顕彰しています。

山県大弐で知られる藤原博古は江戸中期の兵学者・勤皇家で、柳荘と号し、『柳子新論』を著すなどして、幕政を批判して忌諱に触れ、明和事件で捕われて処刑されています。

(3) 「縁起」の碑と連理の楠

【報告書Ⅶ・73頁】

当社の御神木であり、吾嬬の森の「相生の楠」（連理の楠）として有名な楠について、そのいわれ及び霊験を記し、合わせて、吾嬬神社の縁起・日本武尊の東征の事跡などを述べています。楠は現在枯れて、その根だけが境内に保存されています。＜区登録文化財＞【文化財56頁】

連理の楠

(4) 紀真顔「高麗剣」の歌碑

【報告書Ⅶ・76頁】

「高麗剣　わさこそ歌の　一風流を
我たましひと　いよよ磨かし」

裏は「昭和40年９月破損に付再建之」とあります。

紀真顔は狂歌堂と号し、また鹿津部真顔ともいい、狂歌を蜀山人に学び宗匠となった人です。

(5) 「文化十四年」銘水鉢【報告書Ⅲ・45頁】

銘は「奉納　文化十四年（1817）丑十月吉日　白木屋清兵衛」。

大柄に属するものであり、正福寺・天祥寺、とくに香取神社のものと共通しています。脚部の造り出しと、その曲線は萎縮することなく、刻字も太くのびやかです。また、現に使用に供されている点でも極めて数少ない例と言えます。

(6) 源延平「皇国は」の歌碑【報告書Ⅶ・77頁】

「皇国は　かみ代のままの　道しあれば　ことなる文の
をしへ何せむ　源延平」と刻みます。

(7) 「天保九年」銘鳥居【報告書Ⅳ・73頁】

吾嬬神社の摂社、福神稲荷社の前に建っています。

「天保九戊戌歳（1838）二月初午　願主　信濃屋筆女」

(8) 「磽而不磷（ますれどもうすろがず）」の碑【報告書Ⅸ・85頁】

「吾嬬森碑」撰文者、藤原博古（山県大弐）の顕彰碑とも言えるもので、昭和７年（1932）、徳富猪一郎（蘇峰・1863～1957）の撰文です。なお、篆額の「磽而不磷」は『論語』からの出典です。

(9) 力石群＜区登録文化財＞【文化財68頁】

6．慈光院（立花１-29-３）MAP 71

亀命山と号し、曹洞宗橋場総泉寺（板橋区に移転）末で、永正11年（1514）の創建と伝えられ、本尊は聖観世音菩薩です。

(1) 「元禄六年」銘庚申塔【報告書Ⅲ・19頁】

「奉待庚申供養良塔」、右側面に「元禄六癸酉天（1693）」、左側に「五月中旬　施主　谷口氏」。

7．長友家（立花１）MAP 70

かつてこの周辺で庚申講が行われていました。村人が集まって庚申堂に集い、楽しい一日を過ごしました。関東大震災後、講が行われなくなると庚申講法具一式は長友家で保管されるようになりました。＜区登録文化財＞【文化財62頁】非公開。

8．大井戸稲荷神社（立花３-20-10）MAP 69 WC

古くから平井街道（香取神社辺りから平井聖天へ向かう道）沿いにあってこんこんと水が湧き、旅人の喉を癒したと言われています。関東大震災によって涸れてしまいました。

9．北向地蔵（立花６-10-１）WC

かつて中川から多くの水死者が引きあげられ、ここに葬られました。堂内には地蔵立像のほかに塩地蔵も安置されています。南葛85番札所でもありました。【報告書Ⅳ・36頁】

10. 東漸寺（立花６-17-４） MAP 67

浅草寺（台東区）末の天台宗の寺院で、金林山明了院と号し、文安元年（1444）に秀尊法印が創建し、宝永年間（1704～10）円挙法印によって中興されました。

本尊は阿弥陀如来で、葛西33観音参りの一つに数えられた十一面観世音菩薩像が安置されています。

東漸寺全景

(1)「板坂如春先生」の墓碑

四角柱状の墓石の表面に「板坂如春先生」、裏面に「明暦元乙未年（1655）十一月十二日」とする、簡素でありながらボリュームのある墓碑です。

(2)「板坂卜斎如春叟碑銘」

一種の風格があり、重厚さが感じられる石碑です。４面にわたって、如春の経歴と建碑の事情とを明らかにしています。一種の墓誌であり、追悼碑と言えます。(1)と(2)は共に＜区登録文化財＞【文化財48頁】です。

板坂如春、卜斎は天正６年（1578）板坂卜斎宗敵の子として甲府（山梨県）に生まれ、幼名を長太郎、如春と号し、また東赤とも言いました。父の没後14歳で徳川２代将軍秀忠の小姓となり、長じて卜斎を襲名、駿府（静岡県）に隠居の家康に仕えました。後に紀州（和歌山県）藩祖の徳川頼宣の侍医として活躍、そして幼弱な４代将軍家綱を度々診療してからは名医の評が高くなりました。晩年は浅草医王院に閑居し、医書を集め「浅草文庫」と称して縦覧もゆるしました。明暦元年（1654）78歳で没しました。

(3)「元文元年」銘阿弥陀像と六地蔵【報告書Ⅳ・21頁】

「通蓮社覚誉了休　大徳」

「心蓮社法誉妙林　法尼　元文元辰天（1736）十月十日」

(4)「宝暦十三年」銘庚申塔＜区登録文化財＞【文化財62頁】

右側面に「右市川道　宝暦十三（1763）癸未十一月吉日」、左側面に「左やくし道」と道標を兼ねた庚申塔は、区内でこの１基のみで貴重なものです。

(5)「安永九年」銘地蔵坐像【報告書Ⅳ・26頁】

基壇上の台座に座する柔和な表情の地蔵尊像です。正面中央に「法華読誦塔」と刻まれています。

11. 白髭神社（立花６-19-17） MAP 66

旧葛西川村の鎮守として、天和２年（1682）に創建されたと言われていますが、文安元年（1444）創建という伝えもあってはっきりしません。祭神は猿田彦命で、俗に葛西川の白髭神社と呼ばれていました。

(1)「安永九年（1780）」銘鳥居＜区登録文化財＞【文化財７頁】

明神型鳥居で、左に「安永九（1780）庚子年六月」、右に「当村氏子中」の銘があります。

(2)「元禄四年（1691）」銘庚申塔【報告書Ⅰ・104頁】

不動明王の種字をいただいた庚申塔で、区内では数少ない例です。

※「村方議定書」＜区登録文化財＞【文化財35頁】【集成Ⅳ】

幕末に村の世話役が集まって、規則を定めた文書です。非公開。

12. 旧小山家住宅（立花６-13-17　立花大正民家園）

≪区指定文化財≫

【文化財４頁】

MAP 68 WC

旧小山家住宅

大正６年（1917）、小山家は母屋の北側に平屋建て寄棟造茅葺きの住宅を新築しました。のちに瓦葺になりました。江戸時代からの農家と町家の両方の性格を合わせもった構造を良く残しています。関東大震災や東京大空襲を免れ、サッシが入れられることもなく、出格子窓や創建当時の板ガラスが残されるなど、貴重な建築です。

★文化財豆じてん　隅田？墨田？

隅田川と墨田区。すみだはどの文字が正しいのでしょうか。古来より、すみだの地はいろいろな文字が当てられました。隅田・墨多・角太・住田・須田など、決まりはありませんでした。初めは川の中州に田を開拓したことから、州田または洲田と書いて「すだ」と発音していたようです。須田と書くのはその名残でしょう。

やがて隅田の文字が定着し、隅田（すだ）村や隅田（すだ）

町が正式に使われました。

昭和22年（1947）、向島区と本所区が合併して新区名を作ることになりました。その中には隅田区や吾妻区、江東区などの候補が上がりましたが結局、平安の昔から現代まで親しまれてきた墨堤（ぼくてい）と隅田川（すみだがわ）から1字ずつ選んで墨田（すみだ）区としました。当時、当用漢字の中に隅の字がなかったことも墨の字が使われる理由となりました。

今では国際化によってローマ字表記が使われ、SUMIDAや簡便に「すみだ」と書かれることも多くなりました。

また、文人墨客たちは私的に美しい文字を用いて隅田川や東岸（墨東）を美化しました。澄川、墨水、墨水、澄江、大川、墨陀河など数えきれないほどあります。どんな文字をあてても、決してすみだの美しさは失われないということでしょうか。

隅田川東岸の様子

E 押上・京島コース

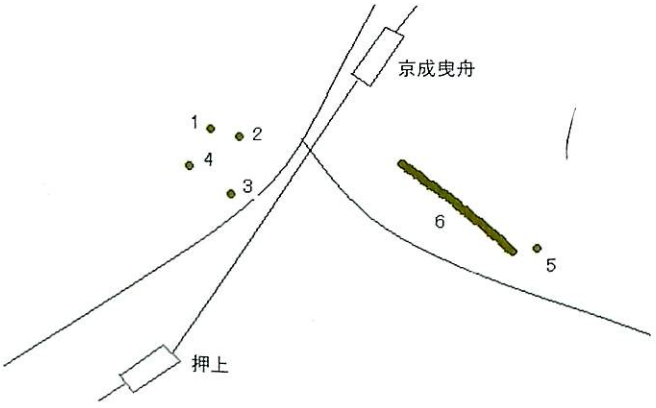
～旧曳舟川沿いを散策します～

江戸時代、本所地域に飲料水を供給するために掘られた用水路が曳舟川でした。しかし、高低差が少なく、土砂などが入り込んでしまうため、運搬用の川として使うようになりました。舟を曳いて運搬していた川を暗渠（あんきょ）にして道路としたのが通りの名前の由来です。この通りの周辺を散策しましょう。

東武伊勢崎線曳舟駅東口を出て、南下します。🔵🟡🔴（東向島２・押上２丁目）の所で左折し、細い路地を行きます。この細い路地が古代の陸地と海の境と考えられ、本所区と向島区の境でもありました。この境の路地を行けば１．高木神社・２．正円寺・３．円通寺・４．飛木稲荷神社が並んでいます。

境の路地をまっすぐ行って踏切を越えると新あづま通りと呼ばれます。

🔵🟡🔴（十間橋通り）の所で十間橋通りと交わっていますが、ここを左に北上して行きます。東武亀戸線の踏切を越えて更に直進すると、歩道の緑地帯の所に５．高松プロダクションの跡の説明板が立っています。少し戻って、曳舟たから通りを北西に歩いて行きます。100m程行けば、区立原公園に着きます。公園の西側ににぎやかな商店街が北に延びています。６．キラキラ橘銀座通りです。現在では数少なくなった露天の商店街です。商店街を通って北に行けば明治通りにぶつかりますから左へ。400m程で京成押上線の京成曳舟駅に着きます。



曳舟駅・京成曳舟駅周辺

（曳舟駅東口）→（６分）→高木神社→（１分）→正円寺→（２分）→円通寺→（１分）→飛木稲荷神社→（14分）→高松プロダクションの跡→（３分）→キラキラ橘銀座通り→（11分）→（京成曳舟駅東口）　移動時間：38分

1．高木神社（押上２-37-９） MAP 45

社伝によると、応仁２年（1468）創建と伝えています。祭神は高皇産霊神で、古くは第六天社と呼ばれてましたが、明治初期に高木神社と改称したといいます。

(1)「安政四年（1857）」銘水鉢【報告書Ⅲ・48頁】

方形の平面の円く彫りくぼめて貯水部とし、側面は長方形で、その正面に「奉納」、左側面に「安政四丁巳年（1857）九月吉日　氏子中」と刻まれています。

(2)「弘化二年（1845）」銘狛犬【報告書Ⅲ・59頁】

乱石積みの上に安置され、左右同形で阿・吽の区別がありません。左側の狛犬の銘文から、外神田平永町代地の白鼠屋藤七等が奉献したことがわかります。右側の狛犬の銘文には「海福山正円寺現住　順静代」とみえ、隣の正円寺が当社の別当寺であったようです。

2．正円寺（押上２-37-４） MAP 46

応仁２年（1468）に常照法印が開山したと伝えられています。天台宗に属し海福山医王院といい、本尊は釈迦如来です。

(1)「寛文二年（1662）」銘地蔵像【報告書Ⅳ・７頁】

江戸初期の雰囲気を伝えるもので、舟形光背を細身にし、尊像に比べて不似合いなほど大きく、上端に反りを持たせています。

光背の銘を４行に分けて「奉造立地蔵大菩　薩念仏結衆為現　当成就殊者為法界　衆生同利倶益也」とし、年紀を「于時寛文二年（1662）□寅二月七日」としています。地蔵念仏講による建立です。

(2)「宝永二年（1705）」銘地蔵像【報告書Ⅳ・15頁】

左右に「奉造立地蔵菩薩尊像　地蔵講供養二世安楽也」の銘があり、地蔵講中49名が結衆して、現当２世の安楽を願って造立された地蔵です。

(3)「正徳三年（1713）」銘庚申像【報告書Ⅲ・25頁】

三眼六臂の像は天邪鬼を踏まえています。「奉納庚申供養正徳三癸巳年十月十日」と刻まれています。

(4)「享保十九年（1734）」銘庚申像【報告書Ⅲ・30頁】

左右に「享保十九甲寅年二月十四日」と刻まれています。

(5)　光明真言百万遍塔

後補も含めて三重の基壇に立っています。正面に「奉納大乗妙典六十六部日本回国供養塔」、右側面に「奉念誦光明真言百万遍成就」、左側面に「文化十四丁□歳（1817）十一月

日　武州葛飾郡寺嶋村　行者　仁兵衛」とし、台座に「世話人　武州　万吉」ら８名を掲げています。

3．円通寺（押上２-39-６）　MAP 48

飛木山普門院といい、かつて浅草寺（台東区）末の天台宗の寺院で、本尊は阿弥陀如来です。良秀法印を開山として、応仁元年（1467）に創建されたと伝えられています。

円通寺全景

(1)　「明暦二年（1656）」銘地蔵像＜区登録文化財＞
【文化財58頁】

雄大で反りの強い舟型光背を持つ174cmの地蔵像で、左手に宝珠、右手に錫杖を持ちますが、錫杖の一部に損傷はあるものの、ほぼ原形の姿を保っています。尊像の顔容は童顔に満ちており、造形的に引き締まってもおり、江戸初期の佳作にふさわしいものです。

種子をいただき、銘を２行に分けて「奉造立地像大菩薩為寒念仏供養也　殊者当村血縁衆善□也」とし、年紀を「于時明暦二年（1656）丙申二月吉日」としています。

区内で確認されている近世石仏の最古の例として、非常に貴重なものです。

(2)「元文五年（1740）」銘庚申像【報告書Ⅲ・31頁】

年紀は「元文五（1740）庚申　極月廿四日」

4．飛木（とびき）稲荷神社（押上２-39-６）　MAP 47

言い伝えによると鎌倉幕府の滅亡後、北条氏の一門が逃れてこの地に転住し、稲荷大明神を奉祀したのに始まるとされています。

別の言い伝えでは、ある時、暴風雨の際にイチョウの枝が飛んできてこの地に刺さり、いつの間にか亭々（ていてい）とそびえたので、時の人が瑞兆であるとして稲荷神社を祀ったとも言われます。

また、当社は古来「請地（うけち）の七竈（かまど）」といわれ、明治２年の「神社明細帳」には、応仁２年（1468）の創建とされています。

大イチョウ

(1) 飛木稲荷の大イチョウ
≪区指定天然記念物≫
【文化財80頁】

樹齢500～600年と言われています。区内では江戸時代から残るイチョウは4本しかなく、その中でも最古の木と言われています。

戦災では一部を焼失し樹勢が衰えた時期もありましたが、現在では復活してきました。平成13年の台風で枝の一部が折れました。

5．高松プロダクションの跡（京島3-62-19） MAP 64

関東大震災後の大正14年（1925）、ここに映画制作者高松豊次郎の活動拠点が築かれました。高松プロダクション吾嬬撮影所です。所長兼監督の山根幹人を中心に42本の時代劇を製作しましたが、1年数ヶ月で休業状態となりました。

6．キラキラ橘銀座通り（京島3-19、20の間から43、44の間までの道） WC

明治通りから曳舟たから通りまでの350m余りは戦前から続いている商店街です。狭い路地の両側に100軒近い商店が立ち並び、下町らしさをかもしだしています。アーケードは無く、古い商店街の形をよく残しています。

★文化財豆じてん　隅田川七福神めぐり

＜区登録文化財＞【文化財71頁】

日本全国の七福神めぐりの模範となったほど有名な七福神めぐりです。人々が幸せを神仏に願掛けする風習は、古くからありましたが7種の幸せを、七神をめぐって回るという“七福神めぐり”の形にしたのは江戸っ子たちでした。

隅田川（向島）七福神めぐりは2番目に古い歴史を持ち、文化元年（1804）百花園に集った文人たちによってコースが作られました。初春の隅田川をそぞろに歩き、途中には長命寺のさくら餅屋まであるという、のんびり3時間のコースです。

(1) 毘沙門天（多聞寺）

インドの神様で、勇気や威厳を授けてくれます。

(2) 寿老神（白鬚神社）

中国の神様で、長寿や延命を授けてくれます。なお、寿老人は隅田川七福神の内最後まで決まりませんでした。白鬚神社の祭神ならば白鬚の老人にちがいないとして、寿老人を寿老神と替えました。祭神自体がご神体なので尊像はありません。

七福神を参拝している善男善女

(3) 福禄寿（向島百花園）

百花園主の佐原鞠塢が所蔵していたのが陶製の福禄寿像でした。中国の神様で幸福・俸禄（金銭）・長寿の３徳を備えていますが、ここでは人徳や人望を授けてくれるとしています。

(4) 弁財天（長命寺）

インドの神様で七福神中唯一の女神です。財福・知恵・弁舌・音楽など学問・芸術の神様です。弁才天とも書きます。

(5) 布袋尊（弘福寺）

七福神中唯一の実在した人物です。10世紀の中国で不思議な力を持った僧がいました。この僧が亡くなった時、人々は弥勒菩薩の化身として篤い信仰を持つようになりました。度量を授けてくれます。

(6)・(7) 恵比寿・大国天（三囲神社）

恵比寿は七福神中唯一の日本の神様です。網を用いず必要な分だけ釣竿で魚を獲ることから、清廉・謙虚などを授けると言われています。

大国天は大黒天とも書きます。インドの神様で、大いなる暗黒神で壊し尽くし、新たな生命を育むとされています。打出の小槌を持ち、財福を授けてくれます。

日本では恵比寿様と大黒様を大国主命と少名彦名命の親子に見立てることがあります。隅田川七福神でも親子２神として一緒に祀っています。

★文化財豆じてん　本所と向島

墨田区は昭和22年（1947）に本所区と向島区が統合して誕生しました。では、本所区と向島区の境目はどこまでだったでしょうか。

本所区の場合は明治11年（1878）に成立した東京市本所区が元になっています。境目は地主の所有地をなぞりましたから、かなり入り乱れていました。隅田川・大横川・北十間川・竪川に囲まれた地域に千歳・菊川・立川や江東区亀戸1・6丁目の一部、亀戸天神の周辺、向島1丁目などを含みました。

一方、向島区は昭和7年（1932）に成立しました。それまでは東京府南葛飾群に属していた吾嬬町・寺島町・隅田町の3町が合併して誕生したのです。

では、本所区北部と向島区南部の境目はどこでしょうか。現在の向島5丁目と東向島1丁目の丁目界の1本西側の道が、かつて境目だった小川が流れていたところです。その小川はそのまま南東に流れ、区立わんぱく天国（押上1－47：押上公園）の西端を通り、十間橋の所で北十間川に流れていました。つまり、今の向島に押上1・2丁目の一部を含めた部分も本所区だったのです。

さて、向島区北部の境目はどこでしょうか。向島区の飛び地などは足立区や葛飾区、江戸川区側の飛び地と調整し、今では旧綾瀬川と荒川（昭和5年に放水路として完成）が区界となっています。

西境は本所区・向島区とも、もちろん隅田川です。東境は向島区が旧中川で江戸川区平井と、本所区が横十間川で江東区亀戸と境を接しています（江戸時代の文献では本所亀戸と表記されるのが一般的です）。

本所区南部の境は、広くとらえれば小名木川まで入りますが、一般的には現区界とほぼ重なります。現区界にはかつて、境川と呼ばれる幅1.8mの小川が流れていたことに由来します。元禄頃にはすでに消滅していたといわれています。境川より北を本所、南を深川。川は消えても意識は残り、現在の区界に引き継がれてきました。

F 吾妻橋・東駒形・本所・石原コース

～隅田川沿いを散策します～

北本所を南下し、隅田川に沿って戻って来るコースです。都営地下鉄浅草線本所吾妻橋駅西口から墨田区役所を目指します。同じく浅草線浅草駅または東京メトロ銀座線浅草駅隅田公園口、東武伊勢崎線浅草駅南口からなら、吾妻橋を渡って墨田区役所を目指します。区役所２階の川側に噴水の広場がありますがそこに１．勝海舟の銅像が立っています。銅像の右後ろに伸びる歩道を進むと（墨田区役所前）の左手に２．枕橋が架かっています。また、右手には、３．浩養園跡の説明板があります。区役所正面玄関を通り過ぎ、右手の道を行くと左手に４．如意輪寺が現れます。寺の前の道を東に直進すると左手40m先に５．清雄寺が、右側には６．天祥寺があります。浅草通りと三ツ目通りの交差点、（吾妻橋３）付近に７．妙縁寺があります。妙縁寺の裏へ80m程行くと南側に８．福厳寺と９．桃青寺がはす向かいに建っています。

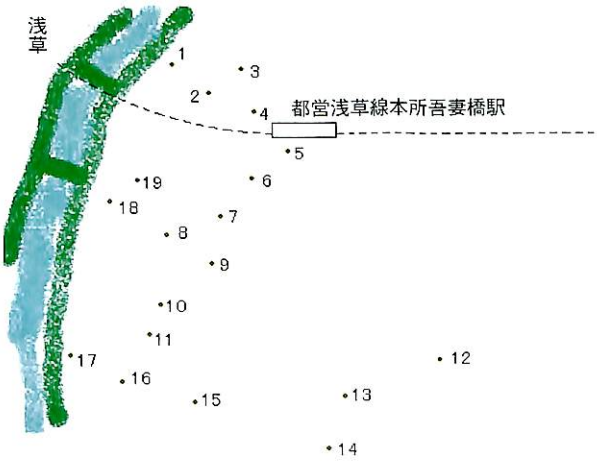
桃青寺角の信号を右折して２つ目の信号を左折すると、70m先に小さな10．篠塚地蔵が２軒の家にはさまれるようにして建っています。かつては縁日が盛大に開かれていました。地蔵の南側の道を東に直進すれば、区立本所中学校に到ります。校舎の１階には11．明徳資料館があります。

学校から南下すると春日通りにでます。右折（西進）すると12．華厳寺えんま堂・13．源光寺が並んでいます。春日通りを渡って100m程南下すれば、14．区立若宮公園内の御旅所に出ます。公園南側の道を東へ向うと紅葉橋の手前に15．能勢妙見堂があります。春日通りに戻り、南下すると16．NTT、蔵前橋通りをも越えて行くと17．松倉米吉住居跡の説明板があります。

今度は200m西進します。そこは18．栗本鋤雲の住居跡です。近くには新徴組屋敷もありました。すぐ北には蔵前橋通りが通っていますから西進します。清澄通りにぶつかる直前の路地を北に行けば、19．徳山稲荷神社があります。清澄通りを越えてさらに隅田川まで行くと20．蔵前橋、川に沿って国技館通りを北上すれば21．産婆学校跡に行き着きます。

さらに北上すれば22．厩橋。（厩橋東詰）の手前ではオペラ歌手の柳兼子が生まれ、春日通りを東に信号２つほど行けば本所番場銭座があった辺り。北に向かえば幕末の蘭方医伊藤玄朴が開業していたとか。

清澄通りを更に北上すれば、（高速駒形入口）の手前辺りに多田薬師がありました。この辺りから23．将棋名人木村義雄の住居跡辺りまでを達磨横丁と呼んだそうです。道路を渡れば24．本久寺。北上すれば浅草通りに出ますので、左には25．駒形橋。右に行けばやがて都営浅草線本所吾妻橋駅にたどり着きます。



本所吾妻橋駅周辺

（本所吾妻橋駅西口または浅草駅隅田公園口）→（５分）→１．勝海舟像→（３分）→２．枕橋→（４分）→３．浩養園→（４分）→４．如意輪寺→（４分）→５．清雄寺→（３分）→６．天祥寺→（３分）→７．妙縁寺→（３分）→８．福厳寺→（１分）→９．桃青寺→（３分）→10．篠塚地蔵→（３分）→11．明徳資料館→（３分）→12．華厳寺えんま堂→（１分）→13．源光寺→（11分）→14．牛嶋神社御旅所→（３分）→15．能勢妙見堂→（５分）→16．殉職慰霊碑→（２分）→17．松倉米吉の住居跡→（５分）→18．栗本鋤雲の住居跡→（７分）→19．徳山稲荷神社→（５分）→20．蔵前橋→（７分）→21．村松志保子の産婆学校跡→（10分）→22．厩橋→（10分）→23．木村義雄旧居跡→（２分）→24．本久寺→（５分）→25．駒形橋→（２分）→（本所吾妻橋駅西口）　移動時間：84分

１．勝海舟銅像（吾妻橋１-23-20：墨田区役所うるおい広場内）

MAP 76 WC

墨田区役所の脇に、右手を前に突き出した海舟の像があります。日展作家木内禮智の手になる銅像で、像高2.5m、台座も入れると5.5mにもなります。この海舟は壮年期、新し

勝海舟の銅像

い日本を思い描き、アメリカを目指そうとする瞬間を捉えたものです。平成15年に建立されました。区役所１階アトリウムには、禮智の作品や勝海舟コーナーもあります。

2．枕橋（吾妻橋３・向島１）

かつてあった水戸家下屋敷の池に、隅田川の水を引き入れるための水路に架けた小梅橋と、北十間川に架けた源森橋とが２つ並んでいたことから、夫婦が枕を並べたような橋ということでこの愛称がつきました。

戦後、下屋敷が無くなり、小梅橋も撤収されました。

源森橋の東側に無名の橋があったため、新たに源森橋の名が与えられ、元からあった源森橋には枕橋の名が正式につけられました。

3．浩養園（吾妻橋１-23-20：墨田区役所） MAP 76 WC

浩養園跡に建つ高層ビル群

この地は常陸谷田部藩細川家、秋田藩佐竹家など、次々と所有者は替わりましたが池を中心とした美しい庭園として有名でした。

明治になってからも市民の憩いの場となっていましたが、明治33年（1900）ビール工場となりました。

平成に入って墨田区役所、ビール会社、公団マンション、インダストリアルデザイナーフィリップ・スタルクのデザインによる“炎のオブジェ”を載せたレストラン等による、新しく整備された都市が出現し、隅田川の川面に新しい風景を映し出しています。

4．如意輪寺（吾妻橋１-22-14） MAP 78

如意輪寺は山号を宝珠山といい、嘉祥２年（849）に慈覚大師の創建と伝えられる天台宗の古刹です。中之郷竹町の成就寺（江戸川区に移転）末で、境内に聖徳太子像（寺伝によれば大師の作とも太子自作ともいう）を安置した御堂があっ

たことから、「牛島太子堂」とか「中之郷太子堂」の名で広く知られていました。

(1) 六面六地蔵石幢＜区登録文化財＞【文化財59頁】

入口脇に安置されています。延宝６年（1678）４月13日、信心深かった両親「慈父」某と「悲母妙意禅定尼」の菩提を弔い、合わせて「法界平等利益」を願って、その子が造立、奉納した六地蔵石幢です。今は失われている宝珠、蓮弁状に削ぎおとされた笠、各尊像を半肉彫りにした塔身、線刻にした蓮花座、荒たたきにして蓮池に見たてた基壇の五石から成ったものでしょう。震災による損傷がありますが、江戸初期の、柔和で造形的にも優れた石仏として区内随一といえましょう。

六面六地蔵石撞

「為奉造立地蔵二親芣也
為慈父□□□□　□悲母妙意禅定尼芣也
〔　　〕　在於地蔵後□□人〔　　〕
法界平等利益　〔　　〕
延宝六戊午天　四月十三日」

5．清雄寺（吾妻橋２-14-6）

覚英山清雄寺は本門仏立宗京都妙連寺末で、寛文２年（1662）、老中酒井忠勝が下屋敷内に建立し、自身が開基となって日崇上人に寄進した寺です。

天祥寺山門

6．天祥寺（吾妻橋２-６-５）

MAP 79

寛永元年（1624）の創建で、初め嶺松院と称して臨済宗浅草海禅寺が兼帯する寺院でしたが、元禄６年（1693）本所中之郷の下屋敷に隠居していた肥前（佐賀県）平戸藩主松浦鎮信が譲り受け、深く帰依した盤珪国師を中興開山とし、臨済宗京都妙心寺派に属しました。

さらに享保元年（1716）、近隣に松嶺寺があってまぎらわしいという理由から、天祥寺と改めました。

＜区登録史跡＞として登録されているのは、以下の墓や詩碑、燈籠など８基の石造物等一括です。【文化財76頁】【報告書Ⅳ・40、50頁】非公開。

(1) 松浦鎮信（しげのぶ）の墓

本堂前に松浦家の墓所があります。当時開基の鎮信は、元和８年（1622）３月出生、元禄16年（1703）10月没で、その墓は区内には数少ない大名墓です。墓前の石燈籠は元禄16年銘＜区登録文化財＞で１対のように見えますが、銘は左方は「壱基」とし、右方は「両基」としていますから、本来別個のものでしょう。

(2) 「祭贈従三位静山公詩碑」

同じ墓所内にあります。松浦静山は、宝暦10年（1760）、肥前平戸城主松浦政（まさし）の子として生まれ幼名英三郎、長じて清といいます。安永３年（1774）従五位下壱岐守に叙任。翌年祖父誠信の譲りを受けて家を継ぎ、総髪として静山と号し、別に雪洲の号もありました。文武両道に優れ、『甲子夜話』の著者として高名です。天保12年（1841）６月、82歳にて没し、ここ天祥寺に葬られました。

10月没で、その墓は区内には数少ない大名墓です。

(3) 養老泉の碑【報告書Ⅰ・17頁】

養老泉というのは、境内にあった掘抜井戸の名で、妙縁寺の夜雀井（やかくい）と共に本所では清水の湧き出る数少ない井戸でした。

(4) 水鉢

２基とも「水鉢」と銘している点で、区内には他に見当たりません。

(5) 盤珪（ばんけい）国師の墓

墓域の中ほどに高さ190cmの五重塔型式（頭部欠）があります。盤珪国師（1622～93）は、盤珪永琢大法正眼国師と称された禅宗の名僧で、播磨国（兵庫県）浜田郷に生まれ、諸国を遊歴し、郷里に竜門寺を建立、のちに京都妙心寺に住します。

(6) 生月鯨太左衛門（いきつきくじらたざえもん）の墓＜区登録文化財＞【文化財49頁】

生月鯨太左衛門は、松浦候のお抱え力士で、相撲史上まれにみる長身力士として知られています。墓の台石には体重280余斤（167kg）身長7尺5寸（227cm）、肥前平戸生月島の人で、嘉永４年（1851）５月23日、24歳で没したと刻しています。

7．妙縁寺

（東駒形３－２－10） MAP 81

正栄山妙縁寺は日蓮正宗に属し、富士大石寺（静岡県）の末です。京都要法寺の開山日尊上人によって創建されたと伝えられますが年代は不明で、寛永６年（1629）に日舜上人が中興しました。

夜雀井の碑

(1)　「夜雀井銘」の碑

＜区登録文化財＞【文化財43頁】

妙縁寺の境内に夜雀井と称する名泉のあったことが、「寺社書上」、『葛西志』などに記されていますが、現在は碑石だけが残されているのみです。

銘文に続いて「宝暦二年（1752）六月蘭台通熙撰、宝暦十二年（1762）壬午十二月五日　郎川滕包貫建並書」とあります。

(2)　歌沢寅右衛門の墓

本堂奥の墓域の東南にあります。嘉永（1848～53）のころ、端唄の同好者が集まって研究を重ね、端唄から一定の曲節に音調を創案して歌沢節と称し、本所南割下水に住んでいた笹丸（笹本彦太郎）が家元になりました。江戸日本橋生まれの平田虎右衛門は、美声で評判となり、歌沢寅右衛門を名乗り笹丸から家元を譲り受け、安政４年（1857）７月に嵯峨御所から歌沢能登の名を受けました。文久２年（1863）歌沢は寅右衛門の寅派と哥沢芝金の芝派に別れ、寅派では笹丸を初世とし、寅右衛門は２世を名乗ります。

なお、寅右衛門は明治8年（1875）に病没し、ここ妙縁寺に葬られました。

8．福厳寺（東駒形３－21－３） MAP 82

曹洞宗で駒込吉祥寺（文京区）末で山号を牛島山といいます。天文10年（1541）吉祥寺の２世大洲安充の創建としていますが、「寺社書上」では延徳３年（1491）の起立としています。

寺宝として本尊釈如来木像、十一面観音、無尽地蔵菩薩、大般若経600巻などが有名でした。当寺は、朱塗りの寺門があるので江戸時代から「赤門寺」と通称されていました。

(1)　大石三平の墓＜区登録文化財＞

屋内墓域の左手にあります。大石三平良穀は四国高松藩（香川県）松平家に仕えました。本所横網に住み、付近の地理に詳しく、そして当寺の住職を禅の師として親交がありま

福厳寺全景

した。三平は大石良雄の縁者であったことから、赤穂浪士の江戸入りには種々の便宜を与え、当寺で参禅求法の集会と称して浪士の密談を行わせたり、討入りの手引きなどもしたと伝えられています。

墓には、「玄忠院孝山一路居士」「大石三平藤原良穀」「寛延二己巳歳（1749）十一月七日」と刻まれています。75歳で没しています。

9．桃青寺（東駒形３-15-10） MAP 88

臨在宗妙心寺（京都市）末で、寛永３年（1626）の創建です。開山は法光明幢禅師、二世は黙宗和尚とされていますが、事実は黙宗和尚の創建で、後に師の明幢禅師を招いて開山したものと言われています。

江戸時代には寺内の芭蕉堂によって著名な寺院でした。はじめ定林院と号していたのを延享２年（1745）に芭蕉山桃青寺と変えたのも松尾芭蕉の俳号桃青の２字によったもので、芭蕉は当寺に寄宿すること数年に及んだと言われ、「芭蕉わらじ脱ぎの寺」と呼ばれていますが諸説があって確定できません。

(1)　長谷川馬光の墓

墓域の左手、塀のところに長谷川馬光の墓があります。貞享４年（1687）に生まれた江戸中期の俳人。父は津軽越中守の藩医須田宗人盛直で、幼名を孫太郎のちに半左衛門と改め、藤原直行と称しました。長谷川直隆に養われ、元禄７年（1694）、８歳で直隆の後を継ぎ、享保11年（1726）には西丸の御刀番に列しました。

俳諧を其日庵山口素堂に学び、師の其日庵を継ぎ２世となりましたが、点者となって門戸を張ることをせず、交友は各派にわたっていました。

享保10年（1725）に中川宗端、松本珪林、大場寥和、佐久間柳居と相謀って「五色墨運動」を起こし、俳壇の革新に尽くしたことは有名です。寛保３年（1743）芭蕉50回忌に当たり、当寺に芭蕉堂を作りました。

著書には『湯山紀行』『藪鶯』『かさね笠』等があります。寛延４年（1751）「振りかえる谷の戸もなし郭公」の１句を

桃青寺正面

残して65歳で世を去りました。

享保期（1716～36）の江戸俳壇は、其角の末流と沾徳一派の人々が最も勢力をふるい、宗匠はしきりに点料をむさぼり、作者はただ点者である宗匠の好みに投じようとして俳風は乱れ、宗匠による門閥の弊害も強くなりました。この状態を憂えて、相携えて弊風革新のため起こったのが五色墨運動だと言われています。

10. 篠塚地蔵（東駒形２－８－１） MAP 87

10～11世紀にかけて活躍した慧心僧都の作とされる地蔵を祀りました。新田義貞の家臣篠塚政景がこの地に安置したことから篠塚地蔵と呼ばれるようになりました。やがて、太田道灌や徳川家光らも深く帰依し、寺領が与えられて栄寿院と呼ばれるようになり、縁日が盛大に行われました。しかし、関東大震災では堂宇が焼失。本尊だけは奇跡的に助かりましたが、復興計画によって移転を余儀なくされ足立区竹の塚に移りました。しかし、地元の人達の願いによって、建物の隙間に本尊の写しが安置され、守り続けられています。

隙間に地蔵堂が

11. 明徳資料館（東駒形３－１－10：本所中学校内）

MAP 89 WC

明徳学校は、明治５年（1872）に学制が制定されるとすぐに開設されました。校名の由来は『大学』の「大学之道、在明明徳」にちなみ、旧秋田藩主佐竹義脩（よしなお）が命名しました。

昭和16年（1941）国民学校と改称されましたが、戦後に廃校となりました。やがて、新学制による本所中学校として再出発しました。

１階の一室には明徳時代の資料が展示されています。卒業生のアルバムや著名な卒業生の一人、棋士の木村義雄が恩師に寄贈した将棋盤、日本画家結城素明の描いた色紙、「明明徳」の扁額<区登録文化財>【文化財53頁】などが展示されています。

明徳の偏額

なお、校門の脇には木村義雄の書になる「明徳学校」の石碑と、本所中学校の卒業生で“世界の王”と呼ばれた王貞治の記念碑とが並んで建っています。

12. えんま堂（本所2-12-3：華厳寺） MAP 94

かつて“本所の閻魔様”と呼ばれて親しまれていた、えんま堂が門の右側にあります。災害の都度、作り替えられてきました。現在のものは戦後に作られたものです。参拝者が来るとセンサーが反応して、照明が付くようになっています。

華厳寺の西の辺りでは、日本画家の巨匠結城素明が生まれています。

えんま様

13. 源光寺（東駒形3-15-10） MAP 93

中郷山源光寺は浄土宗大谷派に属し、東本願寺（京都）末の名刹です。慶長3年（1598）本所中之郷原庭町、里俗に言う蛇山の地に創建されましたが、延享4年（1774）にいたり本所荒井町に移転しました。開山は源頼光八代の子孫浅野四郎光俊で、権大僧正光円法印と称した人です。本尊釈迦如来像が安置されています。

(1) 川尻清潭（せいたん）の墓

昭和30年（1955）の清潭一周忌に築地（中央区）歌舞伎座によって建立された記念碑は、高さ35cmほどの小さなものです。正面には清潭の句「秋風やまはり舞台の裏おもて」が刻まれ、また、その右側面には、久保田万太郎がこの機会に詠んだ句が独特の細かい字で「ひっきょうは　老（お）いの気弱の小春かな」が刻まれています。

14. 牛嶋神社御旅所（おたびしょ）（本所2-2-1：区立若宮公園内） MAP

墨田区の南部地域は大部分が牛嶋神社の氏子です。その牛嶋神社の本祭りは5年に1度、黒牛に曳かれた鳳輦が2日がかりで町内を巡行しますが、この御旅所で1泊します。

15. 能勢妙見堂（本所4-6-14） MAP 105

能勢妙見の海舟像

安永３年（1774）能勢頼次は故郷の能勢（大阪府）から妙見大菩薩の分体を移し、ここにあった下屋敷に安置しました。妙見大菩薩は日蓮宗の守護神で、江戸っ子には開運厄除けの神として信仰を集めました。

震災・戦災で焼失しましたが、昭和28年（1953）から15年を費やして再建されました。

(1) 勝海舟像

海舟晩年の胸像が境内の左手に立っています。海舟は子供の時、犬に噛まれて重傷となったことがありました。父小吉はこの妙見堂で水垢離をして息子のケガが平癒することや出世を祈りました。

(2) 鴎稲荷

大阪冬の陣に参戦していた能勢頼次は、鴎に導かれて手柄を立てました。それ以来、妙見と共に厚く信仰してきました。４月15日を大祭日とし、当日のみ厄除黒札守（能勢の黒札）を授与してきました。

※柳亭種彦生誕地

妙見堂からNTT墨田へ向かう途中に本所カトリック教会があります（本所4-37）。江戸時代、この場所で「偐紫田舎源氏」の作者柳亭種彦が生まれています。

16. NTT墨田（石原４-36-１） MAP 106

(1) 「慰霊」の碑

高さ230cm・幅34cmの細身の石柱に「慰霊」と刻むのは、時の電電公社総裁梶井剛氏の揮毫です。

傍らの副碑は、昭和20年（1945）３月10日の東京大空襲の際に、殉職した女子交換手28名と男子職員３名の殉難をいたみ、小説家吉川英治が撰文・朗読したものです。共に、昭和33年（1958）の建碑です。

慰霊碑

(2) 慰霊碑

平成13年（2001）に新たに建立された石碑です。「平和の尊さをおろそかにしてはなりません　そして　世界の平和こそが最大　最高の幸につながる事を」

17. 松倉米吉住居跡（石原４-22-5） MAP 107

大正６年（1917）、ひとりの歌人がここに移り住みました。松倉米吉です。彼はアララギ派の代表的な歌人で、近くに住む歌人の古泉千樫（ちかし）とともに活躍しました。彼の作風は独特で、労働に主眼を置いたところにありました。しかし、同８年（1919）23歳という若さで没しました。

18. 栗本鋤雲（じょううん）住居跡（石原３-18-１） MAP 109

幕末、外国奉行としてフランスなどと折衝した幕臣栗本鋤雲が住んでいたところです。

鋤雲は維新後、新聞の世界で活躍しました。やがて本所区の初代区議会議長を務めました。明治30年（1897）ここで没しました。

19. 徳山稲荷神社（石原１-36-10） MAP 110

江戸時代初期、本所・深川の開発事業を指揮した本所築地奉行徳山五兵衛重政の屋敷跡に残された屋敷神を祀っています。万治３年（1660）、幕府は明暦の大火における反省から、隅田川以東の開発に着手することにしました。こうして奉行に任命されたのが五兵衛と山崎四郎左衛門重政の二人でした。

無事開拓を終えた結果、本所・深川の広大な市街地が誕生したのです。

徳山稲荷

20. 蔵前橋（横網２）≪都選定歴史的建造物≫

昭和２年（1927）、震災復興計画によって架橋され、蔵前通りに架かることから蔵前橋と命名されました。

フランスのヌイー橋を参考にしました。

21. 村松志保子の産婆学校跡（横網２－７） MAP 111

産婆学校跡

明治21年（1888）日本初の産婆学校「安生堂産婆学校」がここに創設されました。上野国（群馬県）沼田藩の侍医の家に生まれた志保子は、幼少の頃から医学を志し、父から診療所を任されていました。当時は女性の医師は珍しく、同18年（1885）に荻野吟子が女医第１号となったばかりでした。

旧藩主夫妻の協力によって、屋敷地の一画を与えられて開校しました。

22. 厩橋（本所１）≪都選定歴史的建造物≫

かつて幕府の厩があり、御厩の渡しもあったために厩橋と命名されました。明治７年（1874）、民間の費用で完成し、同26年（1893）東京市によって鉄橋となりました。震災で破損したため、昭和４年（1929）現在の橋と架け替えられました。ドイツの運河橋を参考に作られました。

23. 将棋名人木村義雄の住居跡（東駒形１-18-６） MAP 84

明治37年（1904）、説明板と本久寺の間の路上辺りにあった家で木村義雄は生まれました。町内に天才棋士相川治三吉がいたため、物心がついた頃から将棋で遊んでいた義雄は、大正５年（1916）関根金次郎に入門。めきめきと頭角を現します。

昭和12年（1937）実力名人戦で勝ち抜いた義雄は、翌年正式に実力名人に就任します。同22年（1947）に一度名人位を失いますが、２年後に奪還するという快挙を達成しました。

同27年（1952）現役を引退して14世名人となり、同61年（1986）に81歳で没するまで将棋一筋の人生を歩みました。

24. 本久寺（東駒形２-21-8） MAP 83

照法山本久寺は日蓮宗に属する名刹で、天正３年（1575）の創立で開山は清眼院日有上人です。

(1) 平岡熙の墓

本堂裏の墓地に墓があります。明治４年（1871）森有礼に随行してアメリカに渡り、６年（1873）帰国に際し１本のバ

本久寺全景

ットと３個のボールを持ち帰って、日本に初めて野球を紹介した恩人です。東京ドームの野球殿堂入りをしています。

また、平岡熙は日本で初めて錦糸町に汽車製造会社を創設したり、吟舟と号し長唄や清元などの邦楽にも通じた粋人でした。昭和９年（1934）５月６日、77歳で没しました。なお、木琴奏者として有名な平岡養一は甥で、墓も並んでいます。

(2)　三笑亭可楽の墓

落語の名人３・４・５代目の可楽の墓があります。

25. 駒形橋（吾妻橋１・東駒形１）≪都選定歴史的建造物≫

橋名は対岸の駒形堂に由来します。昭和２年（1927）に架橋された女性的なやさしい形の橋です。

ドイツのキルフォンクル橋を参考にしました。

★文化財豆じてん　レガッタ

かつてのレガッタ

明治時代、西洋文明の一つとして紹介されたのが、レガッタ（ボートレース）です。水上スポーツなど思いもつかなかったところに、西洋スポーツとして入ってきたレガッタは東京中の人々の人気を博しました。各大学でも健全な肉体を築くためには良好と判断、また、当時の海軍でも鍛錬には必修と早速導入を決めました。

明治16年（1883）隅田川で海軍がレガッタを行うと、東京大学でも漕艇大会が開催されるなどボート熱は一気に盛り上がりました。当時は応援者があとから船で追いかけたために、応援者同士が川の上でけんかになり、たびたびレガッタは中止に追いこまれました。

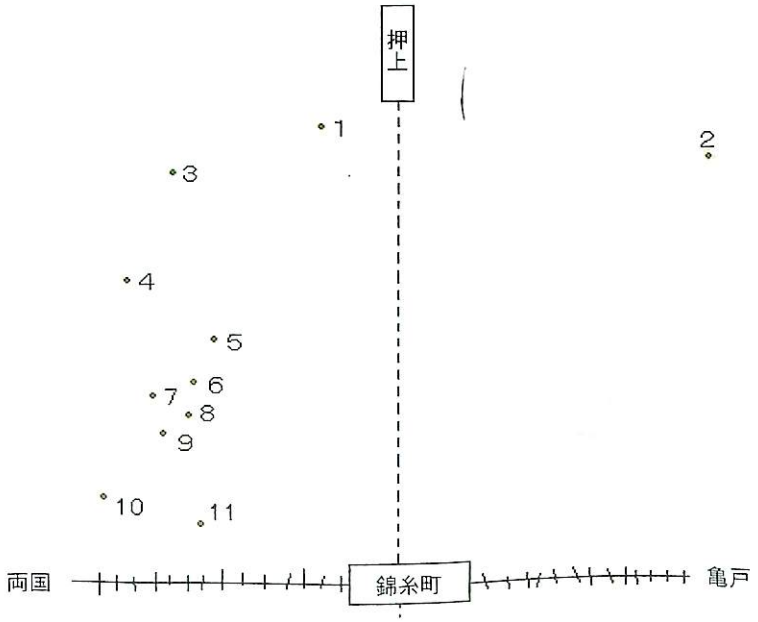
その後いろいろな事情によって中止と再開を繰り返し、昭和59年（1978）に早慶レガッタが復活して今日まで続いています。

G 業平・横川・太平コース

～寺町を散策します～

すみだでも寺院が集まっている辺りを歩くコースです。

銀行脇の東京メトロ半蔵門線都営地下鉄浅草線押上駅A2出口から出てくると、道の向こう側に1．春慶寺の大きな文字が見えます。春慶寺前の浅草通りを東へ進みます。400m余り行くと、横十間川と出会う所に2．柳島妙見と呼ばれる法性寺があります。今来た道を（押上駅前）まで戻り、四ッ目通りを南下、（業平3・4）の信号を渡って西進すると突き当たる辺りに3．小梅銭座跡の説明柱が立っています。この道を南下し、春日通りにたどり着いたら東に右折、横川橋のたもとに4．横川一丁目遺跡の説明板があります。



押上・錦糸町駅北口付近

（横川一丁目）を南下し、２本目の道を東に100m進めば、５．本法寺があります。本法寺の本堂と墓域の間の道を南に行けば、右手に6．霊性院、７．法恩寺、８．千栄院が次々と現れます。法恩寺の参道を蔵前橋通りに向かうと、９．陽運院が右手に建っています。蔵前橋通を西へ、法恩寺橋下の10．大横川親水公園を南下して長崎橋で地上に出れば11．津軽稲荷神社とトリフォニーホールが見えます。ホールを東に向かえば錦糸町駅北口です。

（押上駅南口）→（３分）→１．春慶寺→（７分）→２．法性寺→（10分）→３．小梅銭座跡→（５分）→４．横川一丁目遺跡→（３分）→５．本法寺→（２分）→６．霊性寺→（１分）→７．法恩寺→（１分）→８．千栄院→（１分）→９．陽運院→（３分）→10．大横川親水公園→（４分）→11．津軽稲荷神社→（３分）→（錦糸町駅北口）　移動時間：43分

１．春慶寺（業平２-14-９）　MAP 96

元和元年（1615）浅草森田町に起立した日蓮宗の寺で、開山は真如院日理上人とされています。その後、寛文７年（1667）現在地に移転し、「押上の普賢様」といわれました。近くの法性寺末です。

春慶寺

プロ野球で有名な王貞治氏の生まれたのもこの寺域の一画です。

〔１〕普賢菩薩立像＜区登録文化財＞【文化財30頁】

「押上の普賢様」として有名な立像で、約10cmという小像でありながら、豊かな面相、細かな裳、彩色までもが残されており、室町前期に制作された秀美な仏像です。

(1) 四世鶴屋南北の墓（碑）

記録によると、表に「南無妙法蓮華経」の七字題目が彫られ裏に「文政十二年（1829）十一月廿七日　一心院法念日遍」とあり、側面には六樹園宿屋飯盛（石川雅盛）による墓誌銘があったとされますが、被災によって表面は劣化しています。

四世鶴屋南北（1755～1829）は「大南北」と呼ばれたにふさわしく、「東海道四谷怪談」の名作を世にだしました。江戸乗物町（中央区本町４丁目）の紺屋伊三郎の子として生まれ、安永５年（1776）初代桜田治助に入門し、文化元年（1804）の「天竺徳兵衛韓噺」で当てたと言われます。同８年（1811）四世鶴屋南北を襲名し、永く名声をほしいままにしました。

(2) 宇野信夫「なつかしや」の歌碑

「なつかしや本所押上春慶寺　鶴屋南北おくつきところ」としています。昭和41年（1966）建立の宇野信夫による、南北への供養碑です。宇野は明治37年（1904）、埼玉県本庄市に生まれ浅草橋場育ちで、写実的な芸風を生かした作品を書きます。戦後は、新作の歌舞伎の第一人者ともなります。

(3) 「岸井左馬之介寄宿の寺」碑

池波正太郎の人気小説『鬼平犯科帳』で、長谷川平蔵の親友がこの寺に暮らしたという設定がなされました。それを記念して平成15年（2003）に鬼平ファンによって建碑されました。

2．法性寺（業平５－７－７）　MAP 97

柳島妙見と呼ばれて江戸時代から信仰する人の多かった寺です。天正元年（1673）日遥上人によって創建され、妙見山玄和院と号し、日蓮宗真間山弘法寺（千葉県市川市）の末寺です。

法性寺

(1) 栄松庵一鶴「豊かさや」の句碑【報告書Ⅶ・94頁】

「豊かさや　寝ても野山を　夢見艸」

(2) 痣髪塚（火消和解の碑）【報告書Ⅸ・91頁】

火消の二番組と中組との争いに、仲間も共に髪をおろして和解に努め、その記念に髪を埋めたことが青石の自然石に彫られています。台石には、関係各組の多くの人名が見えます。

天保９年（1838）の建碑です。

(3)「桂家元　故六世文治之碑」【報告書Ⅶ・98頁】

大正４年７月に「柳連」によって建てられたもので、世話人として三笑亭可楽、桂文楽、翁家さん馬の名が見えます。碑銘の左に「江戸落語の名家文治翁の碑の成りたるを悦びて名に残る　芝居噺しや　涼み台　三代目柳家小さん」とあります。柳連は、柳派の集まりでしょう（柳塚の項参照）。

(4)「小蓮遺愛之碑」【報告書Ⅸ・88頁】

画家老蓮が儒者であった子息小蓮の若くして没したのを嘆き悼んで、その遺稿をうめたのを銘した碑です。没した翌文化６年（1809）10月に建てたもので、小蓮の師浪華葛質の撰文、巻菱湖による書と篆額です。篆額の周りに、老蓮の描いた蓮の絵が彫られています。

(5)「夢さめて」の句碑【報告書Ⅶ・90頁】

「夢さめて　見れば色なし　青す□□」

「青す□□」は「青すだれ」と思われます。作句者は不明ですが、謝恩のための建碑者が、清元節、富木節、一中節の人々であることから、浄瑠璃関係の人ではないかと考えられます。建立は「□□八丁酉」とあるので、天保８年（1837）と判断できます。

(6) 宝田寿助「それ辞世」の辞世歌碑【報告書Ⅶ・91頁】

「狂言作者宝田寿助　□□辞世
さる程にま□　是まで□　むかしの人□□真似をし□」

(7)「涼しさや」の句碑【報告書Ⅶ・96頁】

「涼しさや　生まれた時の　天窓つき」

(8) 櫻田左交「花清し」の辞世句碑（浄瑠璃塚）【報告書Ⅶ・83頁】

「桜田左交　浄瑠璃塚　□□□
□□□□浮む　水のうえ」

(9)「葎堂午漣「世は花に」の辞世句碑【報告書Ⅶ・86頁】

「世は花に　安かれわれは　旅に向く」

(10)「豊国先生痿筆之碑」【報告書Ⅶ・87頁】

上下が欠けていて全文は読み取れませんが、浮世絵師初代歌川豊国の略歴と、その遺筆を埋めて碑を建てたということ

は何とか読むことができます。狂歌堂真顔の撰文、山東京山の書並びに篆額（欠落）です。

(11) 「昔ばなし　柳塚」【報告書Ⅶ・100頁】

表面に「昔は那し　柳塚　楽痴生書」と刻まれています。碑絵は剥落がひどく年紀は読み取れませんが、社長、副頭取等の役職名と、柳派の落語家の名前が何とか読み取れるので、落語界の一派、柳派の記念碑と考えられます。高さ266cmもある青石の碑です。

落語界は、明治17年（1884）に柳派と三遊派とに別れ、大正６年に統一されました（木母寺「三遊塚」参照。）

(12) 風也坊秋香「あふぎ見る」の句碑【報告書Ⅶ・93頁】

「あふぎ見る　まつの光や　露の珠　唯草庵主書」

3．小梅銭座跡（業平１-７-２：本所税務署）　MAP 95

元文元年（1736）、ここに寛永通宝の鋳造所、小梅鋳造所が作られました。寛永通宝は数ヶ所で鋳造されましたが、この地で作られたものは裏に小の文字が刻まれました。鋳造期間や鋳造量などは分かっていません。

4．横川一丁目遺跡（横川１-15-１）　MAP 98

ここには明治時代、日本における近代ゴム工業の礎となった三田土ゴムという会社がありました。

平成９年（1997）、住宅建設工事にともなって、江戸時代の池や遺構、瓦などの遺物が発見されました。これによって旗本太田家の屋敷跡であることがわかりました。

5．本法寺（横川１-12-12）　MAP 100

(1) 狩野元信の墓碑

狩野元信は、文明８年（1476）狩野派の始祖正信の子として京都に生まれました。父の跡を受けて足利将軍家の御用絵師となり、大炊介のち越前守に任じられ、のち仏門にはいって永仙と号し、法眼になりました。元信は父に学んだ宋元の画風の上にさらに大和絵の技法を入れて、力強い日本的な画法を大成しました。画題も山水、花鳥、人物等のあらゆる方面にわたっています。それまでの漢画は禅僧の余技的なものでしたが、彼に至って専門画家の手に移ったと言えましょう。彼の様式は後の狩野派の規範とされ、後世「古法眼」と俗称されています。室町から桃山時代にかけては、豪壮な建築が数多く建てられましたが、それらにふさわしい障壁画が多く、

彼によって完成されていきました。なお、元信の妻は土佐興信の娘であり、彼は、土佐派の技法をも吸収して、狩野派の新しい画法を確立し、御用絵師としての立場を不動にしていきました。室町幕府の崩壊、豊臣氏の滅亡など権力者の交替でも、徳川幕府の絵師としての新しい地位を確立し、狩野派の繁栄を維持していきました。とりわけ江戸狩野といっても、鍛冶橋狩野、木挽町狩野、浜町狩野といった奥絵師、さらに分派して表絵師・各藩お抱え絵師等その勢力を拡大していきました。もちろん、京都でも京狩野として栄えていきました。従って事実上の狩野派の始祖ともいうべき元信の供養墓を江戸に築き、狩野派永遠の隆盛を願ったことでしょう。

本法寺の元信墓碑は高さ109cmで正面に「善巧院殿元信法眼日到大居士」左側面に「永禄二年（1559）十月六日歿狩野元信」、右側面に「昭和三十年十月再建　狩野文」とあります。なお、当時には各狩野家関係の墓碑が多くみられます。

(2) 伊藤宗印（そういん）の墓碑

墓碑は将棋の駒形をしたものですが、戦災により破損し、正面に「藤」だけが残り、裏面も「名人」、右側面に「昭和五年十二月建立」とみえるのみです。

本法寺の伊藤宗印の墓

宗印は文政９年（1826）神田松永町に生まれ、本名は上野房次郎といい、御城将棋の伊藤宗寿の養子となり、嘉永５年（1852）７段に昇格し、宗印を名のりました。幕府瓦解後、本所相生町４丁目（両国４丁目）に移り、明治12年（1879）11世名人と、14年には「魁進社」を作り、「将棋新報」を発行し、棋界復興につとめ、明治26年（1893）相生町に没しています。13世名人関根金次郎も内弟子として生活していましたし、金次郎の弟子となる14世名人木村義雄も、本所表町（東駒形）に生まれるなど墨田区は将棋に縁の深い地域です。

6．霊性院（れいしょう）（横川１-15-１）　MAP 101

延命子育地蔵があります。正徳年間（1711－15）に井戸を開削中に掘り出されたといわれ、赤痢にご利益があったといわれています。

7．法恩寺（太平１-26-16） MAP 102

法恩寺

長禄２年（1458）江戸平河（千代田区）の地に創造されたと伝えられています。当時の江戸城主太田道灌が日住上人に助力して一寺を建立し、本住院と号したといいます。大永４年（1524）に至って道灌の孫に当たる資高が、父資康追善のために堂舎を造営し、寺号を平河山法恩寺と改めました。さらに江戸開府以来、数度の移転を経て元禄元年（1688）に現在地に寺地を定めたものです。日蓮宗本圀寺（京都市）末で本尊として安置する日蓮上人木像は日法上人の作と伝えられています。

(1) 太田道灌家供養塔＜区登録史跡＞【文化財78頁】

墓域正面にあって目立つ五輪塔です。各石ごとに「妙法蓮華経」の各一字を充てています。地輪正面に「当山開基蓮乗院殿道灌日恩大居士」とし、側面には資康・資高・康資らの法号も見られます。建立年代等は定かではありません。

太田道灌供養塔

(2) 「天保十二年（1841）」銘無縁塔【報告書Ⅰ・19頁】

本所入江町（緑４丁目）の小茶屋（娼家）松葉屋・吉本屋・島津屋・新鰕屋・海老屋・河村屋の６軒が共同で建てた無縁仏塔で、茶屋で働いてはかない命を終えた72名もの女性の戒名が刻まれています。

(3) 「地震圧死火難水難剣難横死精霊」供養塔（「文政十二年」銘供養塔）【報告書Ⅰ・19頁】

正面に「南無妙法蓮華経」の髭題目を刻み、その下に３行書で「地震圧死　火難水難　剣難横死　精霊」としています。文政12年（1892）３月に本所堅川講中が建立したもので、世話人８名の名もみえます。

8．千栄院（太平１-24-２） MAP 103

法恩寺の塔頭で道晴様と呼ばれる神を祀り、「たんぼとけ霊場」として知られています。

9．陽運院（太平１-25-12） MAP 104

法恩寺の塔頭で日朝上人を祀り、「めぼし霊場」として知られています。

(1) 水間沾徳（みずませんとく）の墓【報告書Ⅰ・20頁】

水間沾徳は江戸中期の俳人で、談林風、知的な比喩的俳諧を得意としました。寛文２年（1662）江戸に生まれ、通称を次郎左衛門、字を友兼といい、本姓は門田であったとされています。

俳諧を志して、初め福田路言に入門して沾葉と号し、後、内藤露沾の門にかわり、沾徳と号しました。31歳の時『一字霊蘭集』を著して好評を得、享保期（1716～1736）俳壇の中心的存在となりました。その他の著に『沾徳随筆』『文蓬莱』など多々あります。

なお、沾徳は赤穂浪士、特に大高源五（子葉）と俳諧の道で強い師弟関係にあったといわれます。

墓石に「本妙院沾徳日到居士」の法名を刻んでいます。

(2) 哥沢芝金（うたざわしばきん）の墓【報告書Ⅰ・20頁】

歌沢節の２代目で芝派を開いた柴田金吉の墓です。

10．大横川親水公園 MAP 157

もとは万治３年（1660）、本所開拓と同時に開削された堀割で、排水と運搬の役目と、浚渫（しゅんせつ）した土を盛り土に利用するという役目がありました。

昭和62年（1987）、川の汚染が激しく悪臭を放ったため、埋め立てて公園とすることになりました。人工の小川を作り散策できるゾーン、釣堀のあるゾーン、ガラス市などが開ける広場の３つのゾーンから構成されています。

法恩寺橋近くの親水公園

11．津軽稲荷神社（錦糸１-６-12）

ここは津軽藩中屋敷の跡です。中屋敷とは大名の私邸で、

郷土の産物を保管する倉庫でした。津軽藩は墨田区内にいくつかの中屋敷を持っていました。

明治時代に屋敷を撤収後、陸軍が兵士の食料を保管する糧秣廠を設置しました。その時、この稲荷だけが残されました。家には守護神として屋敷神（稲荷）が必ず祀られました。屋敷神は土着性が強く、他に移動しないため、そのまま残ることが多いものです。この稲荷もそのひとつでした。

なお、目の前を走る道路にはかつて南割下水と呼ばれる堀割が流れていました。ここは区内にいくつか推定される、おいてけ堀推定地のひとつでもあります。

★文化財豆じてん　隅田川の渡し

隅田川には多くの渡し場があって、旅人や町の人の便宜をはかっていました。幕府が軍事上の理由から、川に橋を架けさせなかったためです。

墨田区には11もの渡しがありました。

1．汐入の渡し。汐入と墨田の最北端を結んでいました。
2．水神の渡し。隅田川神社と石浜を結んでいました。
3．橋場の渡し。最も古い渡し場で、在原業平や歴史上の人物が渡った可能性が高い渡し場です。白鬚橋が架橋された後もしばらくは、渡し船が出ていました。
4．寺島の渡し。明治23年（1890）頃に始まりましたが大正３年に廃業しました。近くに橋場の渡しがあったためです。
5．竹屋の渡し。江戸時代後期に開業しましたが、震災後に言問橋が架橋されると廃止されました。
6．山の宿の渡し。枕橋の渡しとも呼ばれます。明治９年（1876）に開業しましたが、吾妻橋が架橋されると廃止されました。
7．竹町の渡し。江戸時代前期から開かれていた渡し場でしたが、途中中断と再開を繰り返し、吾妻橋の架橋によって廃止されました。
8．駒形の渡し。江戸時代後期に開かれた渡しでしたが、昭和２年（1926）に駒形橋が架橋されると廃止されました。
8．御厩河岸の渡し。文珠院の渡しとも呼ばれました。厩橋の架橋によって廃止されました。
9．御蔵の渡し。富士見の渡しとも呼ばれました。幕末から大正の初め頃まで開かれていましたが、蔵前橋の架橋により廃止されました。
10．浜町の渡し。浜町と竪川の入り口の間を渡していました。

★文化財豆じてん　桜とツツジ

昭和22年（1947）、墨田区が誕生した頃は日本もまだ、戦後の復興の最中で町づくりが忙しい時期でした。同52年（1977）活気を取り戻した墨田区では区政30周年の記念行事が華やかに行われました。隅田公園の大改修や“すみだ音頭”が発表されました。この時、区を代表する樹木も公募されました。“区の木”“区の花”です。公募基準は区にふさわしく、なじみがあり、だれにでも育てられて、公害に強い樹木とされました。

“区の木”には圧倒的に桜が選ばれました。江戸の昔から墨堤の桜として親しまれてきたからです。一方、“区の花”には手軽に栽培できて庶民的であり、花の期間が長いツツジが選ばれました。

H 横網・亀沢・両国コース

～にぎやかな両国の町を散策します～

みどころ満載の両国を歩きます。

西口を出れば右手に緑色の屋根を持つ１．両国国技館があります。国技館を過ぎたら（国技館北側）の角に２．舟橋聖一生誕の地碑と３．旧安田庭園があります。庭園の正門前には４．東京都慰霊堂と５．復興記念館が横網町公園の中に建っています。

清澄通りを南に向かえば、北斎通り、南側の歩道の植栽に６．北斎生誕の地の説明柱が建っています。（亀沢二・三丁目）を左折すれば、７．河竹黙阿弥と８．三遊亭円朝の説明柱が道の左右に向かい合っています。

さて、信号をひとつ戻ると小さな９．野見宿禰神社があります。この神社から緑町公園までが10．津軽家上屋敷跡の北辺にあたります。公園内のテニスコートの向かい辺りに11．江川太郎左衛門の説明柱が建っています。北斎通りを戻って12．江戸東京博物館に寄るのも良いでしょう。

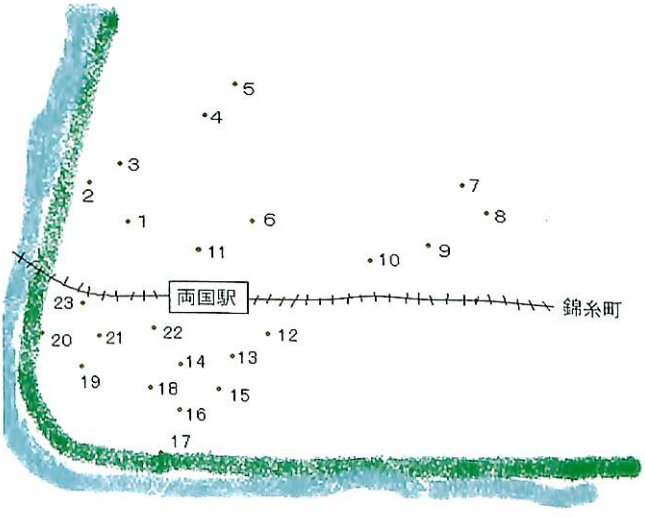
清澄通りを南下するとやがて京葉道路とぶつかりますが、その１本手前の道のところに13．榛稲荷神社はあります。京葉道路を渡って西に進むと本所警察署が見えてきます。敷地の北西角に14．殉職慰霊碑がひっそりと並んでいます。警察の裏側に両国小学校と両国公園が並んでいます。学校の北西

角には15．芥川龍之介文学碑が、公園の南東角には16．勝海舟生誕の地の碑が建ちます。学校の体育館裏の駐車場のところに17．尺振八の説明板が建っています。

さらに南下すると千歳橋が出てきますが、１本西の橋に向かいます。この橋は18．塩原橋と呼び、近くに塩原太助の店がありました。塩原橋を北上すると信号があります。この信号を北西の端として吉良邸がありました。２本目の道を小学校の方に向かえば19．本所松坂町公園として吉良屋敷地の一部が残されています。

松坂町公園を西に向かい、一の橋通りとぶつかったところを右に行けば歩道脇の中に20．与兵衛鮨の説明板が建っています。

両国橋のたもとに向かいますと、児童遊園があります。ここには21．大高源五の句碑が建っています。京葉道路を東に向かうと22．回向院のカマボコ型の山門が見えてきます。また、山門の手前のビル脇に23．花火資料館があります。奥まっているので、かなり奥に向かわなければなりません。さて、回向院を過ぎて京葉道路を東に進むと24．芥川龍之介生育の地説明柱が道路際に建っています。回向院前まで戻り、山門前の道を北に向かいます。（両国駅西口）にある横断歩道のところには25．斎藤緑雨の説明柱が建っています。横断歩道を渡れば両国駅です。



両国駅付近

（両国駅西口）→（１分）→１．両国国技館→（１分）→２．舟橋聖一生誕の地→（１分）→３．旧安田庭園→（２分）→４．震災慰霊堂→（１分）→５．復興記念館→（３分）→６．

葛飾北斎生誕地→（５分）→７．河竹黙阿弥終焉の地→（１分）→８．三遊亭円朝の旧居跡→（２分）→９．野見宿禰神社→（１分）→10．津軽藩上屋敷跡→（１分）→11．江川太郎左衛門終焉の地→（４分）→12．江戸東京博物館→（３分）→13．榛稲荷神社→（３分）→14．殉職者の碑→（２分）→15．芥川龍之介文学碑→（２分）→16．勝海舟生誕地→（１分）→17．尺振八の共立学舎跡→（３分）→18．塩原橋→（３分）→19．本所松坂町吉良邸跡→（３分）→20．与兵衛鮨発祥の地→（２分）→21．大高源五の句碑→（３分）→22．花火資料館→（１分）→23．回向院→（２分）→24．芥川龍之介生育の地→（３分）→25．斎藤緑雨の旧居跡→（１分）→（両国駅西口）　移動時間：63分

１．両国国技館（横網１－３）WC

両国国技館

戦後、旧両国国技館が進駐軍に接収されたこともあって、昭和29年国技館が蔵前（台東区）に建設されました。いわゆる蔵前国技館です。栃若、柏鵬時代などの思い出を残していますが、建物の老朽化も進み、昭和60年（1985）伝統ある両国の地に、新国技館として帰って来たわけです。

JR両国駅の北側にそびえる、緑の銅板葺きの大屋根がそれで、地上３階地下３階の延べ面積３万5,000m²、収容人員１万1,000人を誇るものです。外観はクラシックですが、内部は最新技術を駆使した新鉄傘造りで、土俵も電動式で奈落に沈み、神明造りの土俵の屋根も昇降式になっており、多角活用のできるものになっています。

相撲博物館、相撲教習所も大屋根の下に収まっています。

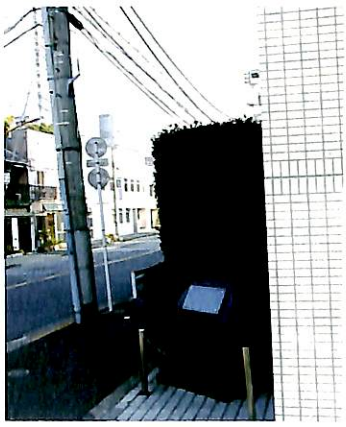
URL　http://www.sumo.or.jp

２．舟橋聖一生誕の地（横網１-11-１）MAP 115

舟橋聖一は明治37年（1904）12月25日、本区横網２丁目２番地に生まれました。クリスマスでしたので聖一と名付けられました。父了助は東京帝国大学工科助教授、母さわ子は古河合名会社理事近藤陸三郎の長女です。

東京府豊多摩郡落合村大字下落合435（新宿区下落合３丁

目）に転居、ここに落ち着きます。大正11年（1922）旧制水戸高校入学、同14年（1925）に東京帝国大学国文科に入学、同15年（1926）7月佐藤百寿と結婚、昭和3年（1928）24歳で帝大卒業、明治大学予科講師となります。同5年（1930）、小説「海のほくろ」を「文学時代」に発表、川端康成に認められます。聖一は旺盛な文学、戯曲等の創作活動と共に、実に多方面にわたって活躍しました。同40年（1965）には日本芸術会員にもなり、各方面に多大な貢献をし、同51年（1976）1月13日逝去しました。



生誕の地の碑

3．旧安田庭園（横網1-12-1）≪都指定名勝≫≪景観上重要な歴史的建造物≫ MAP 114 WC

庭園と公会堂

本園は、もと常陸国（茨城県）笠間藩主本庄因幡守宗資により元禄年間（1688～1703）に築造されたと伝えられ、隅田川の水を導いた汐入回遊式庭園で、明治維新後は、旧備前岡山藩主池田侯の邸となり、次いで安田善次郎氏の所有となりました。氏の没後大正11年（1922）東京市に寄付されました。

翌年の大震災によりほとんど旧態を失い、その後東京市が復旧に努力、昭和2年（1927）7月、市民の庭園として開園、戦後の43年（1968）4月東京都から墨田区に移管されましたが、隅田川の汚濁により名園の面影は失われました。

全面的改修をして同46年（1971）5月、名園といわれた往時の姿を復元しました。

(1) 「元禄4年（1671）」銘水鉢

(2) 晋堂雲南「水も亦」の句碑
「水も亦　器によらず　草の露」

(3) 松尾芭蕉「みの虫の」の句碑
「みの虫の　音をき、にこよ　草の庵　芭蕉」

(4) 伝・駒止石

源義家が奥州征伐に向かう際、駆け出した馬がここで止まったとも、太田道灌の家臣が里見軍へここから矢を射ったともいわれています。

※庭園の北には江戸時代、松浦家の屋敷があり、落ち葉が出ない椎の木がありました。(本所七不思議のひとつ)

4．本所被服廠跡（横網2－3－25：都立横網町公園）

MAP 113 WC

この地は旧陸軍被服本廠跡で全体で2万400坪（6万7,400m²）ありました。大正11年（1922）3月にこの地を逓信省用地、東京市電気局用地、東京市の社会事業用地、同公園用地等に分割して譲渡さらました。大正12年（1923）7月、まず横網町公園の造成に着手しましたが、9月1日関東大震災が突発、広大な空き地であったここの安全性を信じて多くの人々が避難して来ました。ところが人々は多くの荷物を運び込んだために、これに火が付いて、ついに4万4,000人という焼死者を出す大惨事となりました。これらの犠牲者と市内各地で犠牲となった人々の遺骨とを合わせて5万5,000人の霊をこの地に安置することにしました。

(1) 東京都慰霊堂（震災慰霊堂）≪都選定歴史的建造物≫

東京都慰霊堂は、昭和2年（1927）2月着工、同5年（1930）9月2日に完成しました。

震災慰霊堂

慰霊堂内の供養塔に遺骨を安置する変則の五層塔で高さ41mあり、堂の総建坪は1,414m²あります。はじめ「震災記念堂」と称していましたが、太平洋戦争による都内戦災犠牲者約10万5,400人（一般都民のみ）の遺骨を合わせ安置したので、昭和26年（1951）9月1日「東京都慰霊堂」と改称しました。3月10日、9月1日の両記念日には法要が盛大に行われ、多くの人々が参拝します。

(2) 霊冥鐘（れいめいしょう）

堂の東南にあるこの梵鐘は関東大震災による遭難者の霊を追悼するため、当時の中華民国仏教徒会から大正14年（1925）10月、日本仏教連合会をへて東京市に寄贈されたものです。

(3) 「大正大震災遭難児童弔魂群像」

大震災では約5,000人の児童が遭難死しました。昭和5年

(1930) 東京市校長会が、難を免れた児童たちの手によって弔魂碑を建立することを発起しました。彫刻家小倉右一郎は、児童たちが遭難当日、相寄り、相助けている群像を翌6年(1931) 5月に竣工させました。しかし、この群像は昭和18年 (1943) に戦時資材として供出されたため、戦後、前作者の高弟津上昌平と山畑阿利一に都が依嘱し、昭和36年 (1961) に復興したものです。

(4) 「追悼関東大震災朝鮮人犠牲者」の碑【報告書Ⅶ・44頁】

正面に「追悼関東大震災朝鮮人犠牲者」、前面の石に「この歴史永遠に忘れず　在日朝鮮人と固く手を握り、日朝親善アジア平和を打ちたてん　藤森成吉」と刻まれ、左横の別の碑には由来を詳しく刻した碑があり、その最後に「一九七三年九月　関東大震災朝鮮人犠牲者追悼行事実行委員会」とあります。誤った策動と流言蜚語のために、6,000余名の朝鮮人の尊い人命が失われたことは、何とも痛ましいことです。

(5) 永田秀次郎「焼けて直ぐ」の句碑【報告書Ⅶ・42頁】

「焼けて直ぐ　芽ぐむちからや　棕梠の露　青嵐」

震災当時東京市長として被災者の救護や、復興事業に日夜精魂を傾けた永田秀次郎氏を追悼する碑です。永田秀次郎(俳名青嵐) は、明治9年 (1876) 兵庫県淡路島に生まれ、昭和5年 (1930) に再び東京市長となり、同18年 (1943) に没しました。

(6) 東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑

平成13年 (2001) に完成した、円形花壇型の追悼碑です。昭和17年 (1942) の初空襲から同20年 (1945) の終戦の空襲まで、多くの都民が犠牲となりました。

復興記念館

追悼碑建設の呼びかけに賛同した人々の寄付金によって作られた碑は、斜面に生命の象徴として四季折々の花が植えられ、碑の内部には「東京空襲犠牲者名簿」が納められています。碑の作者は土屋公雄、作品名は「記憶の場所」です。

5. 復興記念館≪都選定歴史的建造物≫ WC

慰霊堂隣の復興記念館は関東大震災の状況を永く後世に伝えるため、当時の被災品や遺品、写真などを保存陳列すべく、昭和6年 (1931) に建設されたものです。今次大戦の写真や被災の資料も追加陳列されています。

6．葛飾北斎生誕の地

現在の南割下水跡

江戸後期の浮世絵師の巨匠、また日本風景版画の創始者とされる北斎は宝暦10年（1760）9月23日、本所割下水（亀沢一～四丁目）に生まれました。本姓を川村といい、大成して後、この地が下総国葛飾領であったことから葛飾北斎と名のりました。俵屋宗理、百琳・北斎・為一（いいつ）などの号を用いました。彼の画業の集大成ともいうべき「北斎漫画」を文化11年（1814）に発表、続いての「富嶽三十六景」は、彼の名を不朽のものとしました。そして、高齢になるにしたがい肉筆画を多く描き、80歳を越して芸道の鬼と化した如く「画狂人」と自称・署名し、嘉永2年（1849）4月1日90歳の天寿を全うして、浅草において世を去りました。台東区浅草浄土宗誓教寺に葬られました。法名、南牕院奇誉北斎居士。

7．河竹黙阿弥終焉の地（亀沢2-11-11） MAP 121

歌舞伎の世界に新風を巻き起こした劇作者黙阿弥が、晩年を過ごした住居跡です。

白浪物（盗賊が主人公の作品）を確立した黙阿弥は、明治20年（1887）、浅草仲見世裏からこの地に転居しました。72歳という高齢での引越しでしたが、騒がしくなった浅草より閑静な亀沢の地を求めたのでした。当時は南二葉町と呼ばれていました。

同26年（1893）、「花の咲く　春をば待ちしかいもなく　片枝よりして枯れし老梅」の辞世の歌を残して病没しました。

※五百羅漢寺跡

ここから東に100m程行った辺りに、かつて五百羅漢寺（亀沢3-16）がありました。境内にはさざえ堂と呼ばれた螺旋（らせん）状の高い堂宇があって江戸っ子が見物に来ていました。葛飾北斎も版画に描きました。現在羅漢寺は、目黒区に移転しています。

8．三遊亭円朝の旧居跡（亀沢3-20） MAP 122

名人と呼ばれた落語家円朝は、明治9年（1876）浜町（中央区）からこの地に移り、同20年（1887）に新宿に移るまで

の11年間をこの地で暮らしました。両国橋近くの寄席を中心として活躍し、「塩原太助一代記」や「怪談牡丹燈籠」などの名作を残しました。

※歌沢笹丸旧居跡

ここから南東に110m程行った辺りで、歌沢節の創始者笹丸が住んでいた屋敷がありました（亀沢３-５-４）。旗本でしたが日夜芸人を集めて新たな三味線演奏法を編み出しました。

9．野見宿禰神社（亀沢２-８-10）

MAP 120【報告書Ⅰ・13頁】

かつて当社の東側に相撲の高砂部屋があり、明治18年（1885）親方であった高砂浦五郎の尽力で、元津軽家上屋敷跡に、相撲の神様として知られる野見宿禰を祀ったのが当社の起こりです。境内に歴代横綱の名前を刻んだ石碑が立っています。

10．津軽家上屋敷跡（亀沢２-６～８：緑町公園、及び緑２-16～20、23、24）MAP 134 WC

南割下水から京葉道路までの長方形の敷地に、陸奥弘前藩津軽家の上屋敷がありました。上屋敷は藩主の公的な屋敷、幕府の人々を迎えることもある公邸でした。いつもは江戸在番の数十人だけですが、参勤交代で藩主に従ってくる江戸勤番が来るとかなりにぎやかだったようです。

現在の緑町公園

11．江川太郎左衛門終焉の地（亀沢１-３-11）MAP 119 WC

この地は伊豆韮山代官の江戸屋敷があった所です。江川氏は代々、太郎左衛門を名乗り、韮山の代官職を世襲していました。幕末に活躍した太郎左衛門英龍は洋学を積極的に学び、韮山に反射炉を築いたり、日本初のパンも焼いたりしました。

ペリーの来航以来、国防についての第一人者として江戸と韮山を往復し、寝る間もなく働き続けました。その結果、江戸に向かう途中で病に倒れ、危篤状態でこの江戸屋敷に担ぎ込まれましたが、帰らぬ人となりました。

なお、鎖国の禁を破った土佐（高知県）の船乗り、中浜（ジョン）万次郎を罰することなくこの屋敷に引き取り、アメリカ見聞を記録させたり、英語の講義をさせたのも英龍でした。

12. 江戸東京博物館（横網１－４－１） MAP 117 WC

江戸東京博物館

平成元年（1989）、かつて江東市場があった場所に新しく、江戸・東京の歴史を伝えるための博物館が建立されました。

徳川家康の江戸幕府開府から現在の東京、未来の東京をも含めた展示を行っています。

〔１〕萌葱（もえぎ）地葵紋付小紋染胴服１領≪国指定重要文化財≫
今村家覚書１巻も付いています。

〔２〕阿蘭陀風説書≪国指定重要文化財≫
徳川幕府の命令で、オランダの商館長がヨーロッパの状況をまとめたレポートです。

〔３〕旧江戸城写真ガラス原版29枚≪国指定重要文化財≫
明治初期、江戸城を撮影した写真の原板です。

〔４〕壬申検査関係ステレオ写真ガラス原版257点≪国指定重要文化財≫
明治政府が国宝候補の品々を撮影した写真の原板です。

〔５〕瓦製造用具62点≪都指定文化財≫

http://www.edo-tokyo-museum.or.jp/

13. 榛（はんのき）稲荷神社（両国４-34-11） MAP

榛稲荷神社

このあたりは、榛馬場と呼ばれた馬場のあった所で、東西102間（約185m）南北12間（約22m）ありました。馬場を囲む土手に大きな榛があったところから、この名がつけられたのでしょう。この馬場は本所に住む武士の弓馬の稽古を目的としたものです。この馬場の傍らに祀られていたのが榛稲荷神社です。この神社には天保８年（1837）亀沢町の若者中が奉納した１対の木製朱塗りの奉紙立が現存しています。震災・戦災を免れ、今に伝えられています。なお、勝海舟の父小吉の著書『夢酔独言（なすいのひとりごと）』の中に、子供のころの回想として榛馬場のことが出てきます。

また、引っ越し魔で有名な葛飾北斎も当社の隣に住んでいたそうです。

14. 本所警察署（両国４-29-６） MAP 138

２基の「警察官殉職慰霊碑」があり、それぞれに副碑があります。

(1) 「本所原庭警察署殉職警察官碑」【報告書Ⅶ・28頁】

大正13年（1924）９月１日建立。この碑の右手前にある副碑には、建碑の由来が記されています。関東大震災の折、業火の中を積極果敢に多くの人々の救出誘導にあたり、ついに殉職した当時の本所原庭警察署、和多喜義警部補以下15名（氏名裏面に刻む）の勲功をたたえ、震災翌年の９月１日、現在の東駒形２丁目１番の本所原庭警察庁舎前に建立されたもので、のち移されたものです。

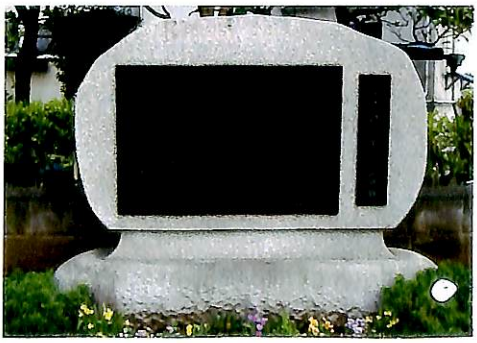
なお、副碑は昭和59年（1984）１月20日建立。この副碑には、明治13年（1880）凶悪犯人逮捕にあたって殉職した永山三月巡査をはじめ15名、昭和20年（1945）３月の東京大空襲の際の殉職者川原一男巡査をはじめ14名、合わせて29名の氏名が刻まれています。

(2) 「大震災相生警察署員殉職之碑」【報告書Ⅶ・28頁】

昭和８年（1933）９月１日建立。碑陰には殉職者氏名が刻まれています。関東大震災の時、とりわけ被服廠跡を擁した本所地区の悲惨な状況は筆舌に尽くしがたいものがあります。傍らの副碑には、この地区を管轄していた当時の相生警察署員の、身の危険をも省みず救出に奮闘、ついに殉職した山内署長以下34名の氏名が刻まれています。

※警察署の東隣には将棋名人、伊藤宗印の屋敷があって関根金次郎や木村義雄らも出入りしていました。

15. 芥川龍之介文学碑（両国4-26-６：両国小学校） MAP 140



龍之介の文学碑

平成２年（1990）文化都市づくりの一環として龍之介の文学碑が建立されました。場所は、出身校である両国小学校（当時は江東尋常小学校と呼ばれていました）の北西角です。龍之介の自署、と小学校ということから児童文学の「杜子春」の一節が刻まれています。

16. 勝海舟生誕之地（両国4-25-24：両国公園） MAP 139 WC

(1) 「勝海舟生誕之地」の碑

生誕の碑と由来碑

勝海舟は、文政６年（1823）１月30日、本所亀沢の父小吉の実家である男谷家に生まれました。初めの名は義邦、幼名麟太郎。

蘭学を修め、西洋の兵学、砲術、航海、測量法などを学びました。安政７年（1860）１月、咸臨丸艦長として邦人の手による初の太平洋横断の快挙をなしとげました。慶応４年（1868）３月、高輪（港区）薩摩藩邸において西郷隆盛と会見、江戸城無血開城に成功し、江戸市民を戦禍から救いました。

明治政府にも重用され、参議兼海軍卿・元老院議官などになり伯爵となりました。晩年は著述に専念し『海軍史』『陸軍史』『開国起源』等の多くの著書があります。明治32年（1899）１月19日、77歳で病没、大田区洗足池畔に葬られました。昭和43年（1968）建碑。当時の法務大臣西郷吉之助（隆盛の孫）の書です。

(2) 「由来碑」

平成元年10月の建碑です。

17. 尺振八の共立学舎跡（両国４－８付近） MAP 139

尺振八は天保10年（1839）、下総高岡藩の医師の家に生まれました。

万延元年（1860）22歳の尺はジョン万次郎や英学者西吉十郎らから英語を学び、文久元年（1861）からは福沢諭吉もいた幕府外国方に通弁（通訳）として勤めました。その間、同３年（1863）の遣欧、慶応３年（1867）の遣米と２度の使節団に随行してじかに西洋文明に接しました。

帰国後、諭吉は「慶応義塾」を、尺は明治３年（1870）７月に相生町のこの地に「共立学舎」を開きました。スペンサーの『教育論』を翻訳した『斯氏教育論』を刊行、自由民権運動の理論書として数多くの人々に愛読され、“現代英学の祖父”とも呼ばれ、近代教育の幕開けを演じましたが、同19年（1879）11月28日、48歳の若さでこの世を去りました。

18. 塩原橋（両国３－９） MAP 143

本所相生町２丁目（両国３丁目）あたりで、塩原太助

（1743～1818）が薪炭商を営んでいたので、それにちなんで塩原橋とつけられました。太助（三遊亭円朝作の人情噺では多助）は故あって上州下仁田小高明神の森に捨てられていましたが、村の旧家塩原角左衛門に拾われ育てられました。

太助は天性の商才によって財をなしました。江東区の亀戸天神社には彼の奉納した石燈籠が見られます。それには次のような銘が刻まれています。

「奉寄進石燈台　両基　武蔵国葛飾郡亀戸　天満宮大前
天明元辛丑年（1781）八月十七日
本所相生町住　塩原太助」

19. 吉良邸跡（両国３-13-９：本所松坂町公園）

《都指定旧跡》 MAP 144

吉良上野介義央（こうずけのすけよしひさ）の屋敷は広大で、東西733間（約134m）、南北は34間（約63m）であって、坪数2,550坪（約8,400m²）と諸書に記されています。

吉良屋敷跡

吉良上野介が近藤登之介の屋敷跡を拝領したのが元禄14年（1701）９月３日、義士（旧赤穂藩浪士）の討入りがあって没収されたのが同16年（1703）２月４日ですから、実際に住んだのは１年半に満たない短期間でした。

現在、吉良邸跡として残る本所松坂町公園は、当時の86分の１にすぎません。公園の特徴を出すために、周囲を『仮名手本忠臣蔵』に描かれていたなまこ塀で張り巡らしています。

敷地の中には、屋敷神として安置されていた松坂稲荷と後から合祀された兼春稲荷が祀られています。【集成Ⅴ】

都の指定旧跡名は“赤穂義士元禄義挙の跡”です。

20. 与兵衛鮨発祥の地（両国１-８-８） MAP 149

与兵衛鮨の説明板

かつて、握り鮨「与兵衛鮨」の店が近くにありました。華屋与兵衛は、はじめは蔵前の札差板倉屋の手代でした。やがてお店風の風流が身にしみて、それが高じて不相応なぜいたくをして身代をつぶし、いろいろ

な商売替えして本所横網の裏店に身をひそめていました。しかし、道楽中に覚えた味から、握りのこはだ鮨を考案しました。それを岡持ちに入れて夜の繁華街を売り歩くと握り鮨の味が江戸っ子に受けて飛ぶように売れました。やがて屋台をだし、ついに「与兵衛鮨」という店を持つようになりました。

店舗は昭和初期まで続きました。

21.「日の恩や」の句碑（両国１-11-２：両国橋児童遊園）

MAP 151 WC

明暦大火（1657）の大災害の教訓を生かして幕府がそれまでの政策を大きく変え、両国橋を架けたのが万治２年(1659)。本所開拓事業の進展につれて交通の要衝として両国橋界隈は大繁昌でした。橋の西は両国広小路といわれ、大衆演劇・大道講釈・落語・娘義太夫等が軒を並べ、腰掛茶屋が数多くありました。一方、東両国側は「向両国」といわれ、俗に「垢離場」とも呼ばれました。当時盛んだった大山（神奈川県）詣りの者たちが、橋の東詰めにあった垢離場で水垢離を取ってから出かけたからです。ここには見世物小屋が軒を並べそれにつれて食べ物の屋台が並び、料理屋も繁昌しました。

大高源五の句碑

(1) 伝・大高源五「日の恩や」の句碑【報告書Ⅶ・26頁】

大高源五の俳句といわれる「日の恩や　忽ちくだく　厚氷」を刻んだ石碑が昭和３年に立てられました。

22. 花火資料館（両国２-10-８：住友不動産両国ビル１階）

隅田川の花火は、享保18年（1733）川施餓鬼の一環として川開きに打ち上げられました。江戸っ子や東京っ子はそれ以来、納涼の風物詩として楽しんできました。平成３年（1991）、花火に関する資料を提示し、ビデオ上映なども行える無料施設として開館しました。展示解説員が詳しく案内してくれます。７、８月は毎日開館してますが、他の月は木・金・土曜日のみ開館しています。正午～16時まで。詳しくは墨田区観光協会へ。(03) 5608－6951

23. 回向院（両国２－８－10） MAP 148

回向院山門

江戸の町500余町を焼失し、10万人を超える死者を出したという明暦３年（1657）正月の大火、俗にいう振袖火事の後惨状を目の当たりにした将軍後見役の会津少将保科正之から合葬の指示がありました。その結果、本所牛島新田の地60間四方（約2,900m²）が下付され、貴賤の別なく死者を埋葬しました。これが今の諸宗山無縁寺回向院の始まりです。幕府は、増上寺の遵誉上人に命じて追善の法要を行わせました。

回向院は、その後、江戸市中全ての無縁仏を埋葬するようになり、洪水のために隅田川を漂流する水死者を埋葬し、数次に及ぶ江戸大火によって生じた無縁の焼死者も埋葬しました。また、牢病死の者もここに葬る習わしでした。関東大震災による焼死者の分骨も一部納められています。

〔１〕「宝永二年(1705)」銘阿弥陀如来座像≪都指定文化財≫

(1) 阿弥陀如来座像【報告書Ⅳ・32頁】

(2) 「寛文四年（1664)」銘阿弥陀三尊像＜区登録文化財＞【文化財58頁】

高さ263cmに及ぶ大きな石塔で、正面に阿弥陀像、右面に観音像、左面に勢至像を配した阿弥陀三尊形式をとるものです。正面の銘に「為三界万霊六親眷属菩提」裏面に「寛文四辰年八月十五日　南新堀大川端町念仏講中」。とあり、江戸初期の唐破風笠塔婆石塔として、区内でも数少ない大変貴重なものです。

(3) 地蔵像（３基）

①「宝暦七年（1757)」銘地蔵半跏像【報告書Ⅳ・25頁】

②「寛政五年（1793)」銘地蔵像【報告書Ⅳ・27頁】

老中松平定信が寛政５年（1793）に建てさせたと伝えられるものです。

③「安政四年（1857)」銘六地蔵石幢＜区登録文化財＞【文化財60頁】

三段の台座に乗る６面地蔵塔で、総高232cmのものです。これは安政２年（1855）の大地震と、翌３年の風水害による死者の霊を弔ったものです。

銘の「安政二乙卯歳十月二日夜四時大地震（中略）壓死焼亡幾千万人不量又翌三丙辰歳八月廿五日従夜五時（中略）壓亡溺死数千万人（下略)」は、誇張があるものの両当日の惨

状をよく伝えています。

願主は八丁堀金六町の横山同明で、その倅たちとの合力によるものです。

(4) 供養塔（７基）

回向院には、その起立のいきさつから多くの供養塔があります。江戸時代の災害を知る上で貴重な手がかりとなっています。

①「寛文七年（1667)」銘供養塔【報告書Ⅰ・４頁】

正面に「繋囚牢獄病患死亡諸精霊等　捨市殃罰殺害前後衆霊魂等」と二行に刻み、裏面に寛文７年の年紀を掲げています。獄死者や行倒の者たちの供養に建てられたものです。

②「延宝三年（1675)」銘供養塔≪都指定文化財≫

俗に「明暦大火横死者等供養塔」と言われるもので、高さ３ｍをこえる大きな唐破風笠のある供養塔です。願主は回向院第２世信誉貞存です。延宝３年の建碑です。

境内の石碑群

③「天明五年（1875)」銘供養塔【報告書Ⅰ・１頁】

「信州上州地変横死之諸霊魂等」と刻まれています。

④「天明八年（1878)」銘供養塔【報告書Ⅰ・１頁】

「浅間嶽大火震死者供養」

右の２基は天明３年（1873）７月の浅間山噴火による大規模な被災・死者の、それぞれ３回忌・７回忌の菩提を供養したものです。

⑤「文政十二年（1829)」銘供養塔【報告書Ⅰ・２頁】

文政12年３月、神田から出火し下町の繁華街を全焼する大火（俗に「己丑の大火」）がありました。その死者の霊を供養したものです。銘に「文政十二年三月二十一日　焼死無縁塔」と刻んでいます。

⑥「安政三年（1855)」銘供養塔【報告書Ⅰ・１頁】

安政２年10月、江戸市中を激震・津波が襲い（俗に「安政大地震」)、各所に大きな爪跡を残しました。その時の圧死者への供養塔です。

⑦「慶応三年（1867)」銘供養塔【報告書Ⅰ・１頁】

安政大地震における焼死者の13回忌の菩提を弔ったものです。銘を「地震焼亡横死諸群霊塔」としています。

(5) 海難供養碑（6基）＜区登録文化財＞【文化財47頁】

境内にある6基の海難供養碑群は、江戸期海難史の貴重な史料となっています。

①「勢州白子三州高浜船溺死一切精霊」

帆掛船型にした珍しいもので、背面に大黒屋幸太夫の名も見えます。寛政元年（1789）建立。

②「勢州白子参州平坂溺死供養塔」

高さ92cmのこの供養塔の名号は、江戸庶民の尊崇を集めた徳本上人の筆になるものです。文化11年（1814）に江戸大伝馬町の太物（綿・麻織の反物）問屋仲間が溺死者供養のため建立したものです。台座には、南無仏庵の撰並びに書による、天明2年（1782）大黒屋幸太夫からの、海難小史が刻まれています。

③「勢州白子戎屋専吉船溺死者等供養塔」

文政8年（1825）太物店が建立したこの供養塔は、伊豆神津島で溺死した戎屋専吉外22名と、天保・寛政の遭難者を追刻して供養しています。

④「海上溺死者群生追福之塔」

高さ112cmのこの塔は、文政10年（1827）に菱垣廻船十組が建てたもので、安政大地震で倒れたのを翌年3年（1856）に再建したものです。正面名号は増上寺第6世冠誉慧巌大僧正の筆になるものです。

⑤「紀州本宮徳福丸富蔵船溺死人之墓」

高さ85cmのこの墓碑は、安政4年（1857）に樽廻船問屋井上重次郎と酒店・荒荷方等積合中が建立したものです。

⑥「溺死四十七人墓」

高さ185cmのこの墓碑は、明治2年（1869）上総国川津村（千葉県勝浦市）海岸で沈没した肥後（熊本）軍艦の溺死者供養碑で、山鹿屋富岡文吉等が建立したものです。

(6) 鼠小僧の墓＜区登録文化財＞【文化財69頁】

鼠小僧の墓

実在した鼠小僧は極悪人で、小塚原で処刑されました。しかし、貧しい庶民の家を襲わなかったことから、戯作者が義賊として作品化したことから人気がでました。この墓も歌舞伎役者が舞台の成功に感謝して建てたものです。小塚原の回向院別院が遠いため、繁華街である両国の回向院に建てたのでした。また、鼠小僧の墓石を欠くと運が着くといわ

れ、欠き専用の墓石が手前に建ててあります。

(7) 加藤千蔭の墓≪都指定旧跡≫

大岡越前守配下の与力、加藤枝直の子で幼名佐芳、字は徳与丸、通称は常太郎、のち又左衛門と名乗り、祖先が橘諸兄であることから本姓は橘を称えました。号は萩園・宇恵園等。父は歌人としても知られ、江戸に出た賀茂真淵の保護者であり門人でもありました。

千蔭は幼時から真淵に師事して国学を学び、村田春海とともに門下の双璧と称せられました。

著書も『万葉集略解』『うけらが花』等すぐれたものが数多くあります。文化５年（1808）９月２日、74歳で死去しました。墓碑の文字は自筆であるという説があります。

(8) 「宇恵園橘翁墓碣銘」の碑

この墓碣銘は、加藤千蔭の墓の隣に建てられています。高さ175cm、幅89cm。大学頭林衡の撰文、日向守巨勢利和の書によるもので、千蔭の経歴や業績などが刻まれています。文化11年（1814）銘です。

(9) 岩瀬醒・岩瀬百樹の墓≪どちらも都指定旧跡≫

山東京伝・京山兄弟の墓です。兄京伝の幼名は甚太郎、のちに伝蔵、名は醒、字は酉星と改めました。18歳で黄表紙『開帳利益札遊会』を発表、その後洒落本・滑稽本等を次々出しました。文化13年（1816）９月７日、56歳で没しました。

弟京山の本名は百樹と言います。京山は京伝の墓銘を撰文し、自分の墓銘も53回目の誕生日に自撰、自書しました。安政5年（1858）９月24日、92歳の長寿で没しました。

(10) 無縁法界塔＜区登録文化財＞【文化財48頁】

この供養碑は浮世絵の彫師・摺師らが建てたことがわかる、大変珍しいものです。

(11) 力塚＜区登録文化財＞【文化財79頁】

高さ470cmもある巨碑で、昭和11年１月に相撲協会が歴代相撲・年寄慰霊のため建立したものです。碑陰には「然ルニ力士行司ニシテ名声ヲ天下ニ馳セ斯道興隆ノ為ニ貢献シタル者モ時ニ名跡其ノ後ヲ欠クル至レバ後世空シク無縁トナリ祭祀ノ典礼ヲ絶ツ憾ミナシトセズ」とあり、

力塚

その後、力士の断髪した髷（もとどり）や、物故力士・行司の分骨を納めて供養するようになりました。

また新弟子たちが力を授かるように祈願の対象にもなっています。力塚の玉垣内に4基の碑があります。

①「東京相撲記者碑」

物故相撲担当記者慰霊のため「角力記」の後を受けて、昭和38年9月に日本相撲協会が建立しました。

②「角力記」

相撲記者慰霊のため、大正5年5月に初代梅ヶ谷が建立しました。

③「回向院相撲記」

江戸勧進相撲が、記録で判明した貞享元年（1684）深川八幡宮境内に始まり、以後の推移を述べ、さらに天保4年（1833）10月から明治42年（1909）6月国技館が建設されるまで76年間にわたる回向院との関係を記しています。昭和38年（1962）9月24日、日本相撲協会が建立しました。

④「法界万霊塔」

大正5年（1916）5月に初代梅ヶ谷が建立しました。

(12) 太鼓塚

「呼出先祖代々之墓　呼出し連」とし、墓域の左側奥の方にあります。旧墓碑は昭和6年（1931）5月に建立されましたが、戦災のため昭和34年（1959）9月呼出し組合により再建されました。なお呼出塚と呼ばれていたようですが、昭和58年（1983）に建てられた、墓の左の「歴代呼出し各々之霊位」の裏面には太鼓塚と記されています。

24. 芥川龍之介生育の地（両国3-21-14） MAP 145

龍之介は明治25年（1892）3月1日、東京市京橋区入船町8-1（中央区明石町）に牛乳搾取販売業耕牧舎を営む新原敏三・ふくの長男として生まれました。辰年辰の日辰の刻の生まれにより龍之介と命名されたと言います。生後7ヶ月で生母ふくの病のため、当時本所区小泉町15番地（両国3丁目）に住んでいたふくの長兄、芥川道章に引き取られ、後13歳の時、芥川家

生育の地の説明板

の養子となりました。

芥川家は江戸時代からの旧家で、道章は東京府の役人をし、文学・美術を好み、俳句や南画をたしなみ、盆栽に親しみ、一家をあげて一中節を習い歌舞伎を見物するなど、教養を重んじてなお下町的な江戸情緒の濃い家庭でした。

それ以来、物心つくまで生活し、ここ両国界隈・大川端は龍之介の精神的風土となった地です。5歳で回向院に隣接する江東尋常小学校付属幼稚園に入園、翌年同尋常高等小学校に入学しました。明治38年（1905）府立第三中学校（両国高等学校）に入学、同43年（1910）成績優秀により無試験で第一高等学校第一部乙類に入学しました。その後、大正2年（1913）東京帝国大学英文科に入学、同5年（1916）卒業しました。

このころ、芥川家は府下内藤新宿2丁目1番地（新宿区新宿2丁目）に転居し、同7年（1918）塚本文と結婚しました。

大学在学中、同人雑誌「新思想」に「鼻」を発表して夏目漱石に認められ、文壇に名をなす機縁をつくりました。初期には多く歴史小説を書き、「羅生門」「芋粥」「戯作三昧」「地獄変」「奉教人の死」「きりしとほろ上人伝」等を発表しています。彼の作風には外国作家の影響のほか、森鷗外や漱石からの感化が強いとされています。また、日本の古典、とくに『今昔物語』あるいはキリシタン文学などから素材を発見し、殉教的感激・芸術至上主義的情熱などに興味を寄せています。文体は一語一句をゆるがせにせず、素材に応じて多種多様な試みをし、人生の一部を知的な視覚から切り取って、大正期の代表的短編小説家になったと言えます。

大正10年（1921）、中国周遊後に健康を害し、神経衰弱や胃瘍病に悩み、作品にも憂鬱の度を加え、「玄鶴山房」「河童」「蜃気楼」に現れています。昭和2年（1927）7月24日未明、「自嘲　水涕や鼻の先だけ暮れ残る」の辞世と遺書を残し、服毒自殺しました。豊島区染井の慈眼寺に葬られ、命日には毎年「河童忌」が営まれます。彼が好んで河童の絵を画いたことにより、この名があります。

遺稿に「西方の人」「歯車」「或阿呆の一生」などがあります。また、小説以外に詩、俳句（高浜虚子に師事）、評論、随筆にも優れました。

なお、両国高校内にも「大川の水」の冒頭を刻んだ文学碑が建てられています。

25. 斎藤緑雨終焉の地（両国２-13） MAP 146 WC

緑雨は慶応３年（1867）12月31日、伊勢国（三重県）神戸に斎藤利光、のぶの長男として出生。本名は賢。父は津の人で謙堂といい、和歌俳諧をたしなむ医師、母は江戸京橋の人でした。11歳の時、両親と上京、数年後父が藤堂家（伊勢久居藩）の侍医となったため、本所緑町３丁目の藤堂邸に住みました。緑雨の号も本所を心から愛したためでした。

土浦藩主土屋侯設立の土屋小学校に入学、以来転校をくりかえし、最後は明治法律学校を中途で終わっています。

20歳で「善悪押絵羽子板」などを江東みどりの筆名で今日新聞に発表し、32歳で満朝報入社。幸徳秋水と親交を結び、36歳の10月、終焉の地となる横網町一丁目15番地（両国１-13）に転居してきます。38歳で明治37年（1904）４月１日に永眠しました。戒名は「春暁院緑雨醒客」と幸田露伴がつけました。

★文化財豆じてん　本所七不思議

江戸時代の初め、まだ本所地域の開発は行われていませんでした。明暦３年（1657）の振袖火事の教訓から、隅田川以東の開発が急遽に開始されました。そのころはまだ狸や狐などがよく見られるほど寂しい所でしたから、いつのまにか７つの謎が作られました。

1．おいてけ堀。錦糸堀（御米蔵の堀とも）で魚を釣ると、どこからともなく「おいてけ」の声が聞こえ、気がつくと釣ったはずの魚がどこにもないとか。狸説と河童説に分かれます。

2．落葉なき椎。同愛記念病院のある所は、かつて松浦家の屋敷がありました。ここにあった大きな椎は、1年中落葉が出ませんでした。

3．片葉の葦。両国橋の近くに生えていた葦はなぜか同じ方向にしか葉を出すことがなかったとか。

4．津軽の太鼓。緑町にあった津軽家の屋敷では、火事の合図に半鐘ではなく、太鼓を叩いたそうです。

5．狸囃子。ばか囃子とも言われ、どこからはわからないが、祭りの囃子がいろいろな方向から聞こえたといいます。

6．送り提灯（拍子木とも）。または送られ提灯とも。割下水の辺りで前方の提灯に追いつこうとしても距離が縮まらないそうです。

7．つかずのあんどん。割下水の辺りに出ていたそば屋の屋

台に一晩中消えているあんどんが掛けてあったといいます。消えているあんどんに灯を点けると死ぬとも。

七不思議とはいいますが、ひとによって表現が異なるものもあります。意味が逆のものに変わっている場合もあります。

8．消えずのあんどん。7のつかずのあんどんの逆で、一晩中消えないあんどんです。油をさしているところを見ると死ぬそうです。

9．送られ提灯。6の送り提灯の逆で、どこまでも追いかけてくる恐怖……。

10．入江町の時無し。時間が当てにならない時の鐘。

11．足洗い屋敷。夜中に天井から血だらけの足が出てきて、「足洗え」と叫ぶ話です。

12．一つ目の唐傘。詳細は不明です。

Ⅰ 錦糸・江東橋コース

～錦糸町界隈を散策します～

錦糸町界隈を歩きます。錦糸町駅南口を出て、目の前のバス乗り場の中ほど、地下鉄半蔵門線の地上口の脇辺りに1．伊藤左千夫の石碑と説明板が並んでいます。

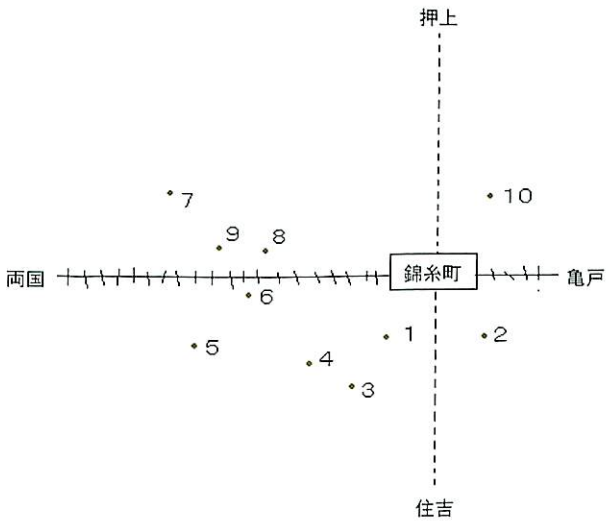
四ツ目通りを南に向かいます。 （錦糸町駅前）の次の信号を左に曲がると突き当たりに2．錦糸堀公園があります。先ほどの四ツ目通りを曲がらずに直進し、四之橋直前の信号を西に曲がって100mほどで3．田螺（たにし）稲荷神社があります。稲荷から北へ道路2本行けば、4．江東観音が安置されています。寺前の道を西へ向かうと突き当たりが両国高校です。

高校は西側に回れば正門があります。正門脇には5．芥川龍之介文学碑が、京葉道路側の体育館裏に回ればマッチ発祥の地碑が建っています。

京葉道路を渡り、錦糸町駅ビルの西隣に6．アビリティーガーデンが建っていますが、ここの地下から磁器片などが出土しました。大横川親水公園に沿って総武線をくぐると、右手に7．津軽稲荷神社が見えます。

津軽稲荷神社の向かい側、今は再開発によってビルディング群となっていますが、そこは8．錦糸町駅前北口遺跡だったところです。江戸時代の暦、大小暦が出土しています。ビ

ル群の中にはホテルなどとともに9．トリフォニーホールが建っています。北斎通りを東に進んで行き、駅の北口を通り越すと、やがて左側に大きな公園が見えてきます。10．錦糸公園です。この公園のすぐ北側には平成12年（2000）まで、時計製造で有名な精工舎の大工場がありました。



錦糸町駅周辺

（錦糸町駅南口）→（1分）→1．伊藤左千夫の住居跡→（3分）→2．錦糸堀公園→（4分）→3．田螺稲荷神社→（2分）→4．江東観音→（5分）→5．芥川龍之介文学碑→（3分）→6．江東橋二丁目遺跡→（4分）→7．津軽稲荷神社→（1分）→8．錦糸町駅北口遺跡→（1分）→9．すみだトリフォニーホール→（3分）→10．錦糸公園→（3分）→（錦糸町駅北口）　移動時間：30分

1．伊藤左千夫旧居跡（江東橋3-13：錦糸町駅南口バス乗り場） MAP 146 WC

左千夫の歌碑

駅南口、地下鉄半蔵門線A1出口の横に、牧場跡と旧居跡の石碑と史跡説明板が立っています。

明治22年（1889）、左千夫は上京後しばらくして、ここ茅場町三丁目18番地（江東橋3-5-3）に居を構え、

牧場を設け搾乳業を営みました。現在は駅前広場となっています。

左千夫は元治元年（1864）８月18日、上総国殿台村（千葉県成東市殿台）に生まれ、本名を幸次郎といいました。26歳のとき上京、その後「ホトトギス」に「野菊の墓」を載せ、激賞を受けました。そして、門下に島木赤彦・斎藤茂吉らをだしました。この茅場町は左千夫文学の出発点となった場所といえます。

「よき日には　庭にゆさぶり　雨の日は　家とよもして児等が遊ぶも　左千夫」としています。「伊藤左千夫記念会」により昭和58年（1983）に建碑されました。

2．区立錦糸堀公園（江東橋４-17）

おいてけ堀推定地は区内にいくつかありますが、ここもそのひとつです。そのため、全国に広がる親睦団体のひとつ、河童連邦共和国「おいてけ堀カッパ村」の人々によって平成５年（1993）に河童の像が設立されました。

「おいてけ堀カッパ村」では年間２回ほど、カッパ祭りを開催してPRにつとめています。

ユーモラスな河童

3．田螺（たにし）稲荷神社（江東橋３-３-９）

田螺稲荷神社には、ひとつの逸話があります。ある時、大きな火災がありました。周囲の家が次々と燃えていくその時、稲荷の社殿に多くの田螺がびっしりと張り付きました。お蔭で田螺は焼け焦げても、社殿は火災から免れました。以来、人々は霊験あらたかな稲荷として厚く信仰しました。

4．江東（こうとう）観音（江東橋３-６-５：江東寺）

実業家小林一三が、錦糸町駅前を浅草のように活性化しようと計画して、昭和15年（1940）群馬県伊香保にある水沢観音の別院を建立しました。仲見世のようににぎやかな商店街や遊園地を作り、楽天地と名づけて江東の浅草を目指しました。しかし、５年後の東京大空襲によってすべて被災しました。

被災後、まもなく観音堂が再建され、今日に至っています。

5．芥川龍之介文学碑（江東橋１－７-14：両国高等学校）

MAP 128

かつて府立第三中学校と呼ばれました。

(1)　「芥川龍之介」文学碑

龍之介の文学碑

龍之介は本校の第７回生として卒業し、文壇に大きな足跡を残し（芥川龍之介生育の地の項参照）たことは、人の知るところです。

彼が愛してやまなかった大川（隅田川）についての、19歳の時の随想の一部を引用したものです。「自分は大川があるが故に“東京”を愛し“東京”あるが故に生活を愛するのである。」

(2)　新燧社跡

創始者の清水誠は明治３年（1870）にフランスに渡り、マッチの製法を修得して８年に帰朝し、翌９年に大久保利通の後援をうけて、ここ本所柳原に新燧社を設立し、赤燐マッチ（安全マッチ）の製造を開始したのです。

※時の鐘跡

ここから西に約60m、大横川を渡った緑４-22-６にかつて時間を知らせる鐘楼が建っていました。

江戸時代、江戸城から告げられた太鼓の音は上野寛永寺や日本橋本石町の時鐘を経由して江戸の町々に伝えられました。本所の時鐘もそのひとつでした。

6．江東橋二丁目遺跡

（江東橋２-19-14：アビリティーガーデン）MAP 埋

錦糸町南口から生涯職業能力開発促進センター（アビリティーガーデン）にかけて、旗本・大名家下屋敷が並んでいました。

旗本夏目家の辺りからは、泥面子などの土製品が大量に出土しました。おそらく、屋敷の中では土製品を生産していたと思われます。出土品の一部は、墨田区埋蔵文化財展示室(61頁）に展示されています。

※勝海舟の旧居跡

京葉道路の江東橋を渡り、すみだふれあいセンター・区立江東橋保育園（緑４-35）とその南側（緑４-25の一部）にあたる辺りが海舟が暮らした入江町の旗本岡野孫一郎屋敷跡で

す。父小吉の『夢酔独言』によると、岡野が町屋を作って賃貸ししていたそうで、その中の１軒に海舟の一家が暮らしていました。

※山岡鉄舟生誕地

海舟の旧居跡からガードを潜り、少し西に向かうと幕末の英傑鉄舟が生まれた旗本小野家跡に出ます。現在は竪川中学校（亀沢４-11-15）があります。（鉄舟は小野家から山岡家に養子に入りました）

7．津軽稲荷神社（錦糸１-６-12）

津軽稲荷神社

ここは陸奥弘前藩津軽家中屋敷の跡です。中屋敷とは大名の私邸で、郷土の産物を保管したりする倉庫でした。弘前藩は墨田区内にいくつかの中屋敷を持っていました。

明治時代に屋敷を撤収後、陸軍が兵士の食料を保管・研究する糧秣廠（りょうまっしょう）を設置しました。その時、この稲荷だけが残されました。家には守護神として屋敷神（稲荷）が必ず祀られました。屋敷神は土着性が強く、他に移動しないので、置いて行かれることが多いものです。この稲荷もそのひとつでした。

なお、目の前を走る道路（北斎通り）にはかつて南割下水と呼ばれる堀割が流れていました。ここは区内にいくつか推定される、おいてけ堀推定地のひとつでもあります。

8．錦糸町駅北口遺跡（錦糸１-２、２-２、３-２）MAP 埋

平成５年（1993）、JR錦糸町駅北口地区の市街地再開発工事の開始前に遺跡調査が行われました。武家地跡のため、多くの出土物が出ましたが、とりわけ木製の大小暦（だいしょうれき）は珍しいものです。大小の月の配列を刷り物にする前の形態だったことがわかったのです。（出土物の一部はすみだ郷土文化資料館に所蔵されています）

現在、遺跡の上にはホテルやコンサートホールが建っています。

9．すみだトリフォニーホール（錦糸１-２-３）

MAP 埋 WC

平成９年（1997）に完成したコンサートホールです。新日

本フィルハーモニー交響楽団の活動拠点として建立されました。木材を多用し、柔らかな音響を作り出しています。そのため、クラシック以外の分野の音楽でも演奏に利用されることが多くなりました。

10. 区立錦糸公園（錦糸４-15-１）

明治時代、７．津軽稲荷神社の場所と同様に陸軍本所糧秣廠が設置されていました。大正時代、糧秣廠は他に移転しましたが、関東大震災後の帝都復興計画による３大公園のひとつとして、昭和３年（1928）に競技場を備えた緑地公園として開園しました。工業地帯のオアシスとして、約17000坪の芝生に200mトラックという運動を主体とした空間が作られました。

同39年（1964）の東京オリンピックをきっかけとしてスポーツ熱が盛んになり、同42年（1967）江東一の体育館が開館しました。

※精工舎の工場跡

錦糸公園北側の太平４-１には、精工舎の工場がありました。文明開化とともに時計の需要も拡大しました。創業者服部金太郎は精巧な国産時計をこの工場から生み出そうと、社名を精工舎としました。現在、セイコー時計資料館が白鬚橋近くにあります（見学は要事前予約）。

★文化財豆じてん　区のマーク

昭和32年（1957）区政10周年を記念して、区の紋章が一般に公募されました。誰もが一目で墨田区とわかるもの、今後長く墨田区を表し続けることなどを考慮して審査が行われました。多数の作品が寄せられましたが、当選したのは区内の蒔絵師の方が作ったものでした。カタカタナの“ス”を３つ、向島の“ム”と本所の“ホ”を組み合わせました。

そして昭和59年（1984）健全な家庭と町作りをめざす“すみだ健康宣言”を行い、シンボルマークを作りました。楕円は広がりを、四角は安定を表し、健康な肌色と自然の緑色、健康を表す白色で構成されています。また、平成元年（1989）に新庁舎移転に伴って、統一シンボルを作りました。12の長方形を散りばめたロゴに“ふれあい活力ゆとり　すみだ”のスローガンとすみだグリーンと呼ばれる緑色を決めました。

そして同12年（2000）、新たに“すみだやさしいまち宣言”を行い、やさしさとおもいやりを大切にする町づくりを表す

シンボルマークを制定しました。すみだの空にやさしくかかるハートの虹をあたたかいピンク色ときらめく紫色の文字で表しています。

J 緑・千歳・立川・菊川コース

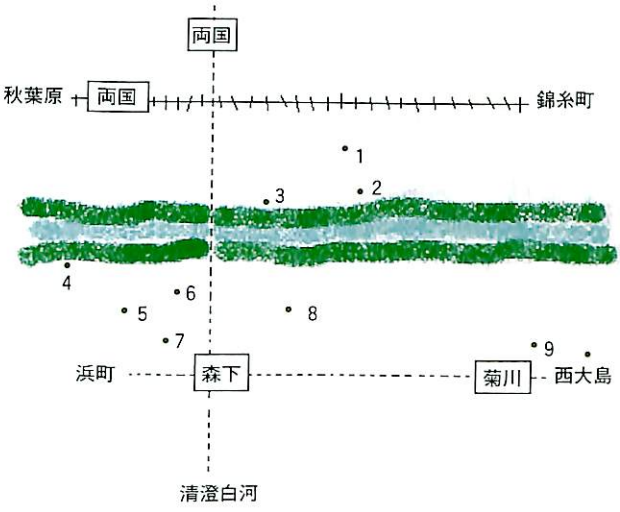
～本所と深川の境を散策します～

このコースは本所・深川の境を散歩するものです。

両国駅の東口を出て、京葉道路に出ます。京葉道路を東に向かうと、 （緑一歩道橋）が出てきます。この信号を50mほど過ぎると、左手に１．寿座の跡の説明柱があります。さらに進んで （緑三）の所で右折。竪川に架かる三之橋脇に２．元徳稲荷神社があります。今来た道を少し戻って （緑三南）を左折します。550m程西行すれば３．小林一茶・立川焉馬の説明柱が歩道脇の植栽に建っています。90m西進すると左手に二之橋。二之橋を渡り、最初の信号を右に曲がって460mほど行くと、４．江島杉山神社があります。今来た道を50mほど戻り、塩原橋からきている道と交差しているところで南に向かいます。

50mほど南下すれば５．西光寺、そのすぐ裏には６．初音森神社が並んで建っています。

神社前の道を南へ、行き止ったら左折します。200mほどで７．要津寺に着きます。そのまま東に進み、清澄通りを越えると８．弥勒寺に至ります。弥勒寺を出て、さらに東に向かうと、信号の先に右手（南東方向）に走る道があります。道なりに行くと新大橋通りにぶつかります。ここで、新大橋通りを東に向かいます。400mほどで三ッ目通りと出会います。横断歩道を渡ればここは９．長谷川平蔵・遠山金四郎の住居跡です。菊川駅Ａ３出口前が屋敷の西端です。新大橋通り東の、最初の信号の所には住居跡を表す卵形のモニュメントがあり、ここが屋敷の東端を表します。



森下駅周辺

（両国駅東口）→（７分）→１．寿座の跡→（８分）→２．元徳稲荷神社→（７分）→３．小林一茶・立川焉馬の旧居跡→（６分）→４．江島杉山神社→（２分）→５．西光寺→（１分）→６．初音森神社→（２分）→７．要津寺→（２分）→８．弥勒寺→（10分）→９．長谷川平蔵・遠山金四郎の旧居跡→（１分）→（菊川駅）　移動時間：46分

１．寿座の跡（緑２-16-３）　MAP 133

墨東地域では唯一の歌舞伎の常設小屋として明治9年（1876）に深川から緑町５丁目（現在の３丁目）に移転して来ました。はじめは常盤座といいましたが、座元が替わり、名前も寿座と改名して緑１丁目の竪川に近い所に移転しました。数々の興行を打ちましたが入場者は少なく、同25年（1892）改築期限がきたために廃絶しました。

同31年（1898）、有志によって現在地に寿座（寿劇場）が再興されましたが、震災で焼失。再建されましたが、空襲によって廃絶しました。

２．元徳（げんとく）稲荷神社（立川３-18-２）

この稲荷は、神田の和泉橋付近の名主河村徳右衛門の屋敷神でしたが、元禄６年（1693）徳右衛門町とともに移転してきました。戦前は都内でも有数の縁日で知られていました。

3．小林一茶・立川焉馬（たてかわえんば）の旧居跡（緑１－３－４） MAP 135

一茶旧居跡の説明柱

この辺りに住んでいた大工の棟梁、和泉屋和助は廃れていた落語を復活させた功労者です。自らも立川焉馬、または烏亭（うてい）焉馬と名乗りました。

５代目市川団十郎に心酔し、団十郎から団州楼の名を与えられました。

また、この辺りは、俳人の小林一茶が暮らした所でもあります。一茶は文化元年（1804）、大島（江東区）から転居しました。寄寓ばかりだった一茶が唯一借家を借りて、腰を落ち着けた所です。しかし、祖母の法事のため帰郷している間に、家賃を前払いしていたにもかかわらず、家主に家を売り払われてしまいました。

4．江島杉山神社（えじますぎやま）（千歳１－８－２） MAP 152

杉山検校は若い頃失明し、家が貧しかったので一念発起、江ノ島の岩窟で断食祈願し、満願の前夜夢に弁財天より鍼術を感応、その後寝食を忘れて修練し、ついに杉山流の鍼術を創始しました。のち５代将軍綱吉に針治療を奉り、本所一ツ目に方1町（約12,000m²）の土地を拝領しました。ここに総録屋敷を建て、その西隣に弁財天の1社を建立したのが始まりです。

〔１〕「元禄６年（1693）」銘釣燈籠１対。

江島杉山神社のいわやみち

社殿創建当時の釣燈籠で貴重なものです。非公開。

(1)　「杉山検校頌徳碑」【報告書Ⅶ・14頁】

篆額の下に杉山検校のレリーフと点字による銘文銅板をはめ込んだ頌徳碑で、点字を掲げた碑は全国的にも珍しいと言えましょう。

大正13年（1924）の250年遠忌に建立された碑が、戦災で損壊したので、昭和34年（1959）に杉山検校遺徳顕彰会が再建し

ました。

(2) 洞窟

江ノ島の弁財天を模して、小さな洞窟が築かれています。

(3) 力石

都内で現在確認されている力石の中で、93貫目（348kg）は最重量のものです。

江島杉山神社全景

5．西光寺（千歳２－４－７）

浄土宗知恩院の末寺です。歌舞伎役者沢村一門の墓があり、沢村訥子（とつし）・助高屋小伝次・伊藤雄之助らが眠っています。

6．初音森（はつねのもり）神社（千歳２－４－８）

浅草橋西詰にあった神社が、明暦３年（1657）の大火によって本所に替地を与えられたようです。境内には田部酒（の）稲丸の歌碑があります。

【報告書Ⅶ・11頁】

7．要津寺（ようしんじ）（千歳２－１－16） MAP 153

臨済宗、京都妙心寺末で、慶安年間（1648～51）に僧東鉄が本郷に創建して、東光山乾徳寺と号しました。牧野越中守成儀を開基、西江和尚を開山とします。その後、天和２年（1682）に焼失して廃寺となっていました。元禄４年（1691）２月に牧野備後守成貞が本所の地に7,134坪（23,542m²）を下屋敷として給せられ、翌３月９日、その一部を寺に寄付し、再興されました。

要津寺

(1) 搗謙（ぎけん）中野先生の墓≪都指定旧跡≫

寛文７年（1667）長崎に生まれ、名を継善、字を完翁、通称は善助、搗謙と号しました。19歳の時江戸に学び、朱子学を修めました。関宿侯牧野家に仕え、150石を賜り、江戸の藩邸に住みましたが、享保５年（1720）に没しました。

(2) 島男也の墓≪都指定旧跡≫

島男也は勤王家で水戸藩士でしたが、故あって浪人し、大阪に出て生玉神社（天王寺区生玉町）の祠前に住み、剣術を教えて有名でした。

万延元年（1860）高橋多一郎が上方に来て男也を訪ね、機密を示して反幕計画をたてようとしました。この高橋多一郎も水戸藩士で、藤田東湖に学び、徳川斉昭の近侍に抜擢されるなど、なかなかの人物でした。幕府に批判的でとくに井伊大老の幕政に抗し、種々画策しました。しかし、幕府の探索は厳重を極め、ついに多一郎父子は自殺に追いこまれ、男也は捕らわれて江戸に送られ、文久元年（1861）11月5日、小伝馬町の牢で獄死しました。法名は「孝道是新居士」です。

(3) 雪中庵関係石碑＜区登録文化財＞【文化財44頁】

要津寺は芭蕉門下、服部嵐雪が中心となって活躍していた雪中庵一門の拠点でした。

雪中庵関係石碑群

境内の一隅に、雪中庵関係の6基の石碑が整備されています。

①雪中庵蓼太「みかの月」の歌碑（「芭蕉翁俤塚」）

花崗岩の石の正面に「芭蕉翁俤塚」と刻まれ、裏面上部に「銘」として、右側に「宝暦十三年（1763）」、左側に「癸未十月十二日　雪中庵門人　建」と刻まれています。

②「芭蕉翁百回忌発句冢碑」

「碑に　花百とせの　蔦植む　雪中庵蓼太」

③松尾芭蕉「古池や」の句碑

「古池や　蛙飛びこむ　水の音　はせを」

「安永二癸巳歳（1773）四月十二日」「深川親和七十三歳書」と2行に刻んでいます。

④雪中庵供養墓

雪中庵4世完来に始まって対山、椎蔭、鳳州、梅年、雀志、宇貫、東枝、竜雨、二松、双美と14世までの供養墓です。

⑤大島蓼太の墓

自然石を四角の台石の上に置いたもので、台石正面に「雪上下霜」と刻まれ、水さしに「雪碑」とだけ刻まれています。天明7年（1787）に建てられたものです。これは供養墓だとする説もあります。蓼太は本名大島陽喬、通称平八。吏登の

門人にて３世雪中庵と称し、門人多く蕉風復活の立役者といいます。天明７年９月６日、70歳で没しました。

⑥前雪中庵嵐雪居士・後雪中庵吏登(りとう)居士墓碑

一世雪中庵服部嵐雪、二世雪中庵桜井吏登供養のため、三世大島蓼太が安永５年（1776）に建立したものです。嵐雪は江戸湯島の生まれで、新庄隠岐守、井上相模守に仕えました。早く芭蕉の門に入り、其角と並び称される逸材で、多くの秀句をのこしています。「梅一輪一輪ほどの暖かさ」や「黄菊白菊そのほかの名はなくもがな」などはとくに知られた名句でしょう。なお、風雪は宝永４年（1707）10月、54歳で没しています。また史登は風雪の門人で。宝暦５年（1755）２月、75歳で没し、法恩寺に葬られました。

(4) 牧野家代々の墓＜区登録史跡＞【文化財76頁】

当寺の開基、牧野成儀侯ら牧野家代々の墓が墓域にあります。

天祥寺の松浦侯、弘福寺の池田侯と共に、区内に残る数少ない大名墓の一つです。

8．弥勒寺（立川１－４－13） MAP 154

万徳山徳宝院と号し、かつて京都醍醐寺三宝院末でした。慶長15年（1610）宥鎧(ゆうばん)によって、小石川鷹匠町に創建されました。幾度かの移転の後、元禄２年（1689）２月、新開地である本所の現在地に移ったものです。のちに根来寺（和歌山県）の末寺となっています。江戸時代は新義真言宗の触頭で、寺領100石の朱印状を下付され、関東四カ寺中の一寺として高い格式がありました。

杉山和一の墓

(1) 杉山検校の墓≪都指定旧跡≫【報告書Ⅰ・10頁】

杉山検校は名を和一といい、慶長15年（1610）伊勢（三重県）藤堂家の家臣の子として生まれました。しかし、幼くして失明し、江戸に出て鍼術を山瀬琢一の門に学び、ついに杉山流管鍼術を創案しました。

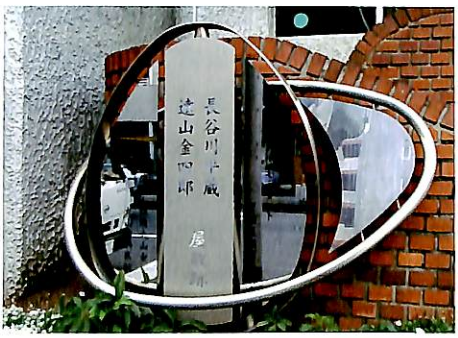
元禄７年（1694）５月18日に85歳で没し、江の島の弁天社と弥勒寺に分骨されました。

9．長谷川平蔵・遠山金四郎住居跡（菊川３-16）

MAP 155,156

鬼平こと、長谷川平蔵は明和元年（1764）父の屋敷替えによって築地からこの地に移り住みました。

天明６年（1786）、父同様御先手弓頭に昇進し、火付盗賊改役（俗に火盗改の役）につきました。



平蔵・金四郎住居跡

８年間の在職中に石川島の人足寄場を創設し、多くの犯罪者を更生させたことは有名です。屋敷の西端にあたる都営地下鉄新宿線菊川駅の入口に史跡説明板が、東端にあたる歯科医院前には斬新な記念碑が建っています。敷地面積は1,238坪（4,085.4m²）にも及びました。

なお、長谷川家が屋敷替えで移動した後には、代わって江戸町奉行遠山金四郎（テレビ時代劇で知られる金さん）の屋敷となりました。

★文化財豆じてん　江戸時代の橋

江戸時代初期、隅田川には軍事上の理由から橋が架けられていませんでした。しかし、明暦３年（1657）の振袖火事によって、防火都市計画の一環としての本所・深川開発が始まり、橋も４本架けられました。

１．両国橋　この橋は万治２年（1659）、振袖火事の犠牲になった多くの江戸市民が眠る回向院にいく必要から掛けられました。正式橋名は大橋でしたが、江戸っ子らはかつての武蔵国・下総国にまたがる事から両国橋と呼びました。

　現在の橋は昭和７年（1932）震災復興計画によって、スイスのアルバン橋を参考にして架けられたゲルバー式鋼鈑桁橋です。

２．新大橋　大橋の次に架橋されたことから、新大橋と命名されました。震災にも戦災にも落ちることなく、多くの人命を救ったため「お助け橋」とも呼ばれました。昭和53年（1978）に現在の鋼斜張橋に架け替えられましたが、旧橋の一部が愛知県犬山市にある明治村に保存されてい

ます。

3．永代橋　元禄６年（1693）、将軍綱吉の誕生日を祝い命名されたとも言われています。何度も修復を繰り返し、その度に町人らの支援が行われました。赤穂浪士もここを渡って泉岳寺に向かいました。震災で木製の床が落ちたため、大正15年（1926）現在の鋼アーチ桁橋が架けられました。ドイツのレマーゲン鉄橋を参考にしました。≪都選定歴史的建造物≫

4．吾妻橋　安永３年（1774）、浅草の町人が架橋を請願して出来た唯一の民営橋で隅田川唯一の有料橋でした。正式には大川橋と命名されましたが、すぐに吾嬬神社への参道にあたるとして吾妻橋と改名願いが出されました。現在の橋は昭和６年（1931）震災復興計画によって、フランスのグルネル橋を参考にして架けられた鋼アーチ桁橋です。≪都選定歴史的建造物≫

★文化財豆じてん　「第九」

エコー

日本人の大好きな、ベートーベンの交響曲第九番。今ではＥＵ（ヨーロッパ連合）の歌としても有名です。日本の年末は全国的に第九のコンサートが開かれます。

墨田区では、国技館が両国に戻ってきたことを祝って、毎年２月に5,000人の第九コンサートが開催されます。

JR錦糸町駅北口に巨大な黄金の輪が吊り下げられています音楽都市すみだを象徴するモニュメントの「エコー」で、アメリカの彫刻家ローレン・マドソンの作品です。２つの弧からなる黄金の輪は音記号を表しています。また、輪を支える２本の柱には、過去から現在までの音楽家たちの生没年が線で画かれています。

さくいん

秋葉神社	あきばじんじゃ	19,20,52
芥川龍之介生育の地	あくたがわりゅうのすけせいいくのち	98,99,114
芥川龍之介文学碑(両小)	あくたがわりゅうのすけぶんがくひ	98,99,106
芥川龍之介文学碑(両高)	あくたがわりゅうのすけぶんがくひ	115,117,118,120
吾嬬神社	あずまじんじゃ	60,63
板碑	いたび	4,6,15,16,20,28,46
伊藤左千夫の住居跡	いとうさちおのじゅうきょあと	117,118
牛嶋神社	うしじまじんじゃ	18,19,46
牛嶋神社御旅所	うしじまじんじゃおたびしょ	75,76,83
歌川豊広辞世狂歌碑	うたかわとよひろじせいきょうかひ	18,19,33
厩橋	うまやばし	75,76,86
梅若塚	うめわかづか	10,11
江川太郎左衛門終焉の地	えがわたろうざえもんしゅうえんのち	97,99,104
回向院	えこういん	98,99,110
エコー	えこー	130
江島杉山神社	えじますぎやまじんじゃ	123,124,125
江戸東京博物館	えどとうきょうはくぶつかん	97,99,105
榎本武揚像	えのもとたけあきぞう	1,2,7
圓通寺	えんつうじ	69,71
圓徳寺	えんとくじ	1,2,5
大井戸稲荷神社	おおいどいなりじんじゃ	60,65
大沢梅次郎像	おおさわうめじろうぞう	61,62
大高源五の句碑	おおたかげんごのくひ	98,99,109
大横川親水公園	おおよこかわしんすいこうえん	89,95
海棠園の跡	かいどうえんのあと	19,33
勝海舟生誕地	かつかいしゅうせいたんち	98,99,107
勝海舟像	かつかいしゅうぞう	75,76
葛飾北斎生誕地	かつしかほくさいせいたんち	97,99,103
香取神社	かとりじんじゃ	60,62
鐘淵の由来説明板	かねがふちのゆらいせつめいばん	1,2,3
鐘紡発祥の地	かねぼうはっしょうのち	1,2,3
河竹黙阿弥終焉の地	かわたけもくあみしゅうえんのち	97,99,103
岐雲園跡	きうんえんあと	1,2,14
北向地蔵	きたむきじぞう	60,65
木下川梅園の跡	きねがわばいえんのあと	55,57
木下川薬師道の道標	きねがわやくしみちのどうひょう	55,57
木村義雄旧居跡	きむらよしおきゅうきょあと	75,76,86
旧小山家住宅	きゅうこやまけじゅうたく	60,67
旧墨堤の道	きゅうぼくていのみち	18,20,32
旧安田庭園	きゅうやすだていえん	97,98,100
キラキラ橘銀座通り	きらきらたちばなぎんざどおり	69,72
錦糸公園	きんしこうえん	117,118,122
錦糸町駅北口遺跡	きんしちょうえききたぐちいせき	117,118,121

錦糸堀公園	きんしぼりこうえん	117,118,119
近代映画スタジオ発祥の地	きんだいえいがすたじおはっしょうのち	1,2,13
区のマーク	くのまーく	122
蔵前橋	くらまえばし	75,76,85
栗本鋤雲の旧居跡	くりもとじょうんのきゅうきょあと	75,76,85
啓運閣教会	けいうんかくきょうかい	1,2,15
華厳寺えんま堂	けごんじえんまどう	75,76,83
源光寺	げんこうじ	75,76,83
元徳稲荷神社	げんとくいなりじんじゃ	123,124
庚申塔	こうしんとう	4, 5, 32,33, 40,56,57,58, 65,66,70,71
幸田露伴の蝸牛庵跡	こうだろはんのかぎゅうあんあと	18,19,33
幸田露伴の校歌	こうだろはんのこうか	18,19,20
江東観音	こうとうかんのん	117,118,119
江東橋二丁目遺跡	こうとうばしにちょうめいせき	117,118,120
弘福寺	こうふくじ	19,40
小梅銭座跡	こうめぜにざあと	88,89,92
浩養園	こうようえん	75,76,77
子育地蔵	こそだてじぞう	1,2,15
子育地蔵堂	こそだてじぞうどう	18,20,32
言問橋	ことといばし	19,20,46
寿座の跡	ことぶきざのあと	123,124
小林一茶・立川焉馬の旧居跡	こばやしいっさ・たてかわえんばのきゅうきょあと	123,124,125
小林家住宅	こばやしけじゅうたく	55,56
狛犬	こまいぬ	31,44,48, 63,70
駒形橋	こまがたばし	75,76,87
西光寺	さいこうじ	123,124,126
斉藤緑雨の旧居跡	さいとうりょくうのきゅうきょあと	98,99,116
桜とツツジ	さくらとつつじ	97
桜橋	さくらばし	18,19,35
佐原家	さはらけ	18,19,29
三遊亭円朝の旧居跡	さんゆうていえんちょうのきゅうきょあと	97,99,103
塩原橋	しおばらばし	98,99,107
慈光院	じこういん	60,65
七福神	しちふくじん	3,25,29, 42,72,73
篠塚地蔵	しのづかじぞう	75,76,82
下稲荷	しもいなり	1,2,7
春慶寺	しゅんけいじ	88,89
殉職慰霊碑（NTT墨田）	じゅんしょくいれいひ	75,76,84
殉職慰霊碑（本所警察署）	じゅんしょくいれいひ	97,99,106
正円寺	しょうえんじ	69,70
常泉寺	じょうせんじ	19,20,51
正福寺	しょうふくじ	1,2,6

常夜燈	じょうやとう	34,45
成林庵	じょうりんあん	1,2,6
白鬚神社	しらひげじんじゃ	18,19,29
白髭神社（東墨田）	しらひげじんじゃ	55,57
白髭神社（立花）	しらひげじんじゃ（たちばな）	60,67
白鬚橋	しらひげばし	1,2,14
震災慰霊堂	しんさいいれいどう	97,98,101
鈴木家	すずきけ	18,19,20
鈴木家	すずきけ	18,19,20
鈴木家住宅	すずきけじゅうたく	1,2
隅田	すみだ	67,68
隅田稲荷神社	すみだいなりじんじゃ	1,2,15
隅田川神社	すみだがわじんじゃ	1,2,11
すみだ環境ふれあい館	すみだかんきょうふれあいかん	60,61
すみだ郷土文化資料館	すみだきょうどぶんかしりょうかん	18,19,45
すみだトリフォニーホール	すみだとりふぉにーほーる	118,121,122
清雄寺	せいおうじ	75,76,78
尺振八の共立学舎跡	せきしんぱちのきょうりつがくしゃあと	98,99,107
千栄院	せんえいいん	89,95
第六十八番札所	だいろくじゅうはちばんふだしょ	1,2,15
高木神社	たかぎじんじゃ	69,70
高松プロダクションの跡	たかまつぷろだくしょんのあと	69,72
立花大正民家園	たちばなたいしょうみんかえん	60,67
田螺稲荷神社	たにしいなりじんじゃ	117,118,119
玉の井稲荷神社	たまのいいなりじんじゃ	1,2,15
多聞寺	たもんじ	1,2,3
小さな博物館	ちいさなはくぶつかん	59
力石	ちからいし	18,19,20, 48,65,126
長命寺	ちょうめいじ	19,35
津軽稲荷神社	つがるいなりじんじゃ	89,95,117, 118,121
津軽家上屋敷跡	つがるけかみやしきあと	97,99,104
天祥寺	てんしょうじ	75,76,78
桃青寺	とうせいじ	75,76,81
東漸寺	とうぜんじ	60,66
道標	どうひょう	12,21,57
燈籠	とうろう	21,31,53,62
徳山稲荷神社	とくやまいなりじんじゃ	75,76,85
飛木稲荷神社	とびきいなりじんじゃ	69,71
富田木歩終焉の地	とみたもっぽしゅうえんのち	18,19,49
鳥居	とりい	45,48,65,67
鳥井家	とりいけ	55,58
長友家	ながともけ	60,65
七不思議	ななふしぎ	116
如意輪寺	にょいりんじ	75,76,77
能勢妙見堂	のせみょうけんどう	75,76,84

野見宿禰神社	のみのすくねじんじゃ	97,99,104
長谷川平蔵・遠山金四郎の住居跡	はせがわへいぞう・とおやまきんしろうのじゅうきょあと	123,124,129
初音森神社	はつねもりじんじゃ	123,124,126
花火資料館	はなびしりょうかん	98,99,109
榛稲荷神社	はんのきいなりじんじゃ	97,99,105
福厳寺	ふくごんじ	75,76,80
福神橋北詰	ふくじんばしきたづめ	62
復興記念館	ふっこうきねんかん	97,98,102
舟橋聖一生誕の地	ふなはしせいいちせいたんのち	97,98,99
法恩寺	ほうおんじ	88,89,94
法泉寺	ほうせんじ	18,19,28
墨堤の桜	ぼくていのさくら	18,19,34
法性寺	ほっしょうじ	88,89,90
堀辰雄の住居跡	ほりたつおのじゅうきょあと	18,19,50
本久寺	ほんきゅうじ	75,76,86
本所松坂町公園	ほんじょまつざかちょうこうえん	98,99,108
本法寺	ほんぽうじ	89,92
埋蔵文化財展示室	まいぞうぶんかざいてんじしつ	60,61
枕橋	まくらばし	75,76,77
松倉米吉の住居跡	まつくらよねきちのじゅうきょあと	75,76,85
松本家	まつもとけ	19,53
萬福寺	まんぷくじ	55,57
水戸徳川家下屋敷跡	みとどくがわけしもやしきあと	18,19,48
三囲神社	みめぐりじんじゃ	18,19,42
妙縁寺	みょうえんじ	75,76,80
弥勒寺	みろくじ	123,124,128
三輪里稲荷神社	みわさといなりじんじゃ	55,58
向島百花園	むこうじまひゃっかえん	18,19,23
村松志保子の産婆学校跡	むらまつしほこのさんばがっこうあと	75,76,86
明徳資料館	めいとくしりょうかん	75,76,82
木母寺	もくぼじ	1,2,8
森鴎外住居跡	もりおうがいじゅうきょあと	19,20,52
八広庚申堂	やひろこうしんどう	55,56
ユートリヤ	ゆーとりや	18,19,20
陽運院	よううんいん	89,95
要津寺	ようしんじ	123,124,126
横川一丁目遺跡	よこかわいっちょうめいせき	88,89,92
与兵衛鮨発祥の地	よへえずしはっしょうのち	98,99,108
両国国技館	りょうごくこくぎかん	97,98,99
霊性院	れいしょういん	88,89,93
レガッタ	れがった	87
蓮花寺	れんげじ	18,19,21
六地蔵	ろくじぞう	4,22,54,66
渡し	わたし	14,49,96

すみだの
史跡 文化財 散歩

平成18年（2006）3月31日

発行　墨田区教育委員会
生涯学習課文化財担当
東京都墨田区吾妻橋１－23－20
墨田区役所内
03（5608）6310　直通

印刷　大東印刷株式会社
墨田区向島３－35－９
03（3625）7481

墨田区教育委員会
http://www.city.sumida.lg.jp/kyouiku/